

岐阜聖徳学園大学

# 仏教文化研究所紀要

第11号

【巻頭言】

「頭が下がる人間教育」ということ

讓 西 賢

【論 文】

笠置寺に見られる結衆（契約を結んだ同法）について

— 華嚴宗尊勝院の十二人の結衆と貞慶の結衆について —

新 倉 和 文… 1

いのちのバトンタッチ

— 映画「おくりびと」によせて —

青 木 新 門… 23

建学の精神の理解度と教育方法の調査研究

— 岐阜聖徳学園大学・短期大学部必修科目

「宗教学」受講生を対象として —

蜷 川 祥 美

河 智 義 邦… 59

仏教認識論において前提される認識の構造

— 外界実在論と唯識説 —

吉 田 哲… 149

2011

## 当研究所の研究テーマ

### (1) 仏教と現代

環境破壊・生命倫理などの現代社会がかかえる諸問題（政治・経済・法律上の問題や情報化社会の問題などを含む）とのかかわりにおける仏教の研究。

### (2) 仏教の文化と歴史

絵画・造形・音楽・文学・建築・儀礼・習俗・慣習などの芸術・文化とのかかわりにおける仏教の研究。仏教と歴史にかかわる研究。民族学的な見地からの仏教の研究。

### (3) 仏教と教育

教育とのかかわりにおける仏教の研究。

### (4) 仏教思想と仏教哲学

仏教の教理・教学に関する研究。

### (5) 仏教と諸思想・諸宗教

諸々の哲学思想あるいは諸宗教伝統とのかかわりにおける仏教の研究。仏教に関連した宗教学的的研究。

### (6) 聖徳太子と仏教

聖徳太子に関する研究。

## 巻頭言

### 「頭が下がる人間教育」ということ

仏教文化研究所所長

讓 西 賢

二〇一一年三月十一日、未曾有の災害といわれる大地震と大津波による東日本大震災が発生しました。犠牲となられた方々に哀悼の誠をささげ、被災された方々に衷心よりお見舞い申し上げます。

一瞬にして人間の歴史ある文化を破壊した自然の猛威に、人間の顛倒した価値観を思い知らされました。地球は人間の所有物ではなく、地球に人間が住まわせてもらっているのです。目先の快適さと利便さばかりを追い求めた文化は、顛倒だったのです。

また、福島原子力発電所の放射線洩れ事故では、人間の頭が下がることのむずかしさを教えられました。世界のトップに君臨することばかりを追求すれば、自己の愚かさや失敗を認めることができなくなります。日本の教育において、「頭が下がる人間になれ」と教えることが、忘れられてしまっていたと指摘された気がします。もっと早く諸外国に頭が下がれば、放射線洩れの被害は、小さくて済んだのではないでしようか。蓮如上人の「参らせ心がわるき」のことが、我がこととして心に突き刺さります。

『仏教文化研究所紀要第十一号』をお届けします。今回は、二〇一〇年十月、当研究所開所十周年記念式典において「いのちのバトンタッチ―映画『おくりびと』によせて―」と題してご講演いただいた、青木新門先生の記念講演を特別に掲載いたしました。ご覧いただければ幸甚に存じます。

二〇一一年三月三十一日

## 笠置寺に見られる結衆（契約を結んだ同法）について

— 華嚴宗尊勝院の十二人の結衆と貞慶の結衆について —

新 倉 和 文

はじめに

本論考では、結衆に注目して笠置における集団の信仰のあり方を考察していきたい。そもそも結衆とは、数人の同法達による往生を期した契約である。古くは源信の二十五三昧会が有名である。一方、南都でも、治承四年（一一八一）の南都焼き討ちを境にして、志しを同じくする僧侶達が寺院を離れて、自分たちの結衆をつくるのが盛んとなった。笠置の地においても、数個の結衆が存在した。東大寺尊勝院の十二人の結衆と貞慶の数人の結衆である。特に貞慶の結衆は、当時の結衆の中で特異である。阿弥陀信仰を共有しながらも、最も重んじたのは「発心」（道心）であり、一千日の舍利講を行い、その際修した念仏は釈迦念仏であった。やがてこの貞慶の結衆は、靈山講を行い、十三重塔の舍利塔を建立するという運動を展開していく。

## 一、東大寺尊勝院の十二人の結衆

貞慶の遁世した笠置寺は、そもそも華嚴宗の末寺であった。それは『東大寺縁起』（続群書類従七百九十三）の「諸末寺事」の項に記されている。一方、宗性が貞慶の勸進文や講式を集めた『弥勒如来感應抄一』の中には、貞慶の遁世前に書かれた笠置寺の勸進文が三つある。

元暦二年（一一八五） 笠置寺弥勒殿毎日仏供事 沙門信長

文治元年（一一八五） 笠置寺毎日仏供事 仏子如教勸進

文治四年（一一八九） 塔婆勸進旨趣事 沙門観俊

これらは笠置寺での信仰形態を示すものとして注目される。特に文治元年の如教という勸進僧は、永暦元年（一一六〇）に東大寺尊勝院の領する田地売買に関わっており（東大寺文書三卷四十五頁）、東大寺僧であったことが知れる。しかも、「笠置寺毎日仏供事」に、

仏子ら十二輩、聊か勸進の張本と為り、普く親疎の知識を訪ひ、方に弥勒靈界に勝地に就いて、毎月不退の供養を展べんと欲す。

とあるように、如教を中心とした十二人の同法が勸進をしており、結衆が出来上がっていることが読み取れるのである。一方、宗性の、貞慶の願文・諷誦文を集めた『讚佛乗抄』（東大図書館蔵、校刊美術史料寺院篇）には、「一結衆十餘輩互修追善」という追善文が残されている。奥書に「文治三年八月二十一日一結衆敬白」とある。本文に「爰に一人の禅侶有り、則ち此の会の張本なり。去年の窮冬、期せずして遷化す」とあり、文治二年十二月に、結衆の中心人物（張本）が亡くなったことが知れるのであるが、この人が文治元年の十二人の勸進の張本であった如教ではあるまいか。この文治三年の結衆は、「頃年以來、

一院之中十餘輩許輩」とあるように「一院の中」の結衆だったのであり、これと如教が尊勝院と関わりがあったことを考え合わすれば、「一院」とは東大寺尊勝院だと仮定しても不都合はないと思われる。今全文を挙げ、書き下し文を付して、尊勝院の十二輩の同法達の追善のあり方、そこに見える信仰の形態を見てみたい。

一結衆十餘輩互修追善

夫浄土之業行者、濁世之舟楫也、上惣万善下至十念、遠自西天近及我國、凡蕪道俗賢愚因修其業之者多又多矣、爰頃年以來、一院之中十餘許輩、發心歸弥陀之行願、迎月修住生之講合、蓋善友之勸也、微力之功也、見佛聞法懺悔滅罪、恒規漸舊垂七八年矣。

爰念佛之暇竊相議曰、我輩者一門之同侶、多歳之芳友也、其身雖非骨肉之分氣、其儀猶同鵲鴿之接翅、剩結一佛土之善因、寧非百千劫之宿縁哉、而電泡之命無常、老少之運不定、我前人前如旅客之接路、為今為明、似木葉之待風、一赴冥途誰訪幽魂、然別此中若有先亡之人、永勿忘引攝結縁之誓、其時若有残留之輩者、方宜廻濟度解脫之謀、青鳥之使縱隔三家之浪底、白牛之車必達九品之雲外、彼三千如來一旦之知識也、十六沙弥一世兄弟也、五人之得道四佛之正覺、少縁不朽、永劫益物、善友之儀古今相同者歟、一言銘肝、衆舉伏膺焉、

爰有一人之禪侶、則此會之張本也、去年窮冬不期遷化、其以來廻首見此席、會合皆如舊、只其所欠幽儀一人而已、無常之理馴而猶驚、衆客之腸忽焉暗断、何其足言矣、仍奉圖繪阿弥陀如來像一鋪、奉造立率都婆ム○本、其上奉書寫妙法蓮華經一部八卷、無量義、觀普賢、阿弥陀、般若心等經各一卷、則擺每月之會場、聊儲一日之齊筵、云佛云經無相無相、一施一香隨有隨無、蓋志之所之也、幽儀若預弥陀之來迎、早進住行向地之位、幽儀末離娑婆之流轉、疾捨生老病死之苦、所生之善兼資法界、抑其

人若有闕者、宜補他人、其人有補者宜告此旨、供佛施僧永同此儀、嗚呼、往日芳約之席、不知誰人方為其先、今朝追福之近、又不知何日我預 此報、悲哉凡心只仰佛界焉、敬白

文治三年八月二十一日 一結衆等敬白

一結衆の十餘輩、互いに追善を修す

夫れ浄土の業行は、濁世の舟楫なり。上は万善を惣べ、下は十念に至る、遠くは西天より近くは我が國に及び、凡そ蔽その道俗賢愚も其の業を修するの者の多く、また多し。

爰に頃年より以來、一院の中の十余ばかりの輩、発心し弥陀の行願に歸し、迎月、住生の講會を修する、蓋し善友の勤めなり。微力の功なり。見仏聞法・懺悔滅罪、恒規し漸く旧し七八年になんなんとす。爰に念仏の暇に竊かに相い議して曰く、「我が輩は、一門の同侶にして、多歳の芳友なり。其の身は骨肉の分氣に非ずと雖も、其の儀は猶ほ鶴鴿の翅を接するに同じ。剩へ一仏土の善因を結ぶは、寧ぞ百千劫の宿縁に非ざらんや。而るに電泡の命は無常にして、老少の運は不定なり。我や前、人や前、旅客の路を行くが如し。今とや為せむ明あすとや為む、木の葉の風を待つに似たり、一たび冥途へ赴かば誰か幽魂を訪はん。然れば別して、此の中に若し先亡の人有らば、永く引攝結縁の誓いを忘る勿かれ。其の時、若し残留の輩有らば、方に宜しく濟度解脱の謀を廻らすべし。青鳥の使いは、縦い三宗の浪底を隔つと雖も、白牛の車は必ず九品の雲外に達す。彼の三千の如來は一旦の知識なり。十六の沙弥は一世の兄弟なり。五人の得道、四仏の正覚、少縁は朽ちず、永劫物を益す。善友の儀、古今相同じものか。一言肝に銘じ、衆はそ挙そつて伏膺す。

爰に一人の禪侶有り、則ち此の會の張本なり。去年に窮冬に期せずして遷化す。其れより以來、首



を廻らして此の席を見るに、会合は皆旧の如し。ただ其の欠くる所、幽儀一人のみ。無常の理りは、馴れて而るに猶ほ驚く、衆客の腸は忽焉として暗に断えぬ。何ぞ其れ言うに足らんや。

仍りて阿弥陀如来像一鋪を凶絵し奉りて、率都婆○本造立し奉る。其の上、妙法蓮華經一部八巻を書写し奉り、無量義、観普賢、阿弥陀、般若心等の經各一卷、則ち毎月の会場を擺き、聊か一日の齋筵を儲け、仏と云い經と云い、無相無相なり。一施一香、有るに随い無きに随い、蓋し志の之く所なり。幽儀、若し弥陀の来迎に預らば、早く住行向地の位に進め、幽儀末だ娑婆の流転を離れずは、疾く生老病死の苦を捨てよ。所生の善兼ねて法界に資す。抑も其の人、若し闕くる者有らば、宜しく他人を補すべし。其の人、補さること有らば、宜しく此の旨を告ぐべし。供仏、施僧は永く此の儀に同じ。嗚呼、往日の芳約の席には、知らず、誰人か方に其の先たるを。今朝追福の庭、又知らず、何れの日にか我此の報いに預らん。悲しいかな、凡心はただ仏界を仰ぐのみ。敬曰す。

文治三年八月二十一日 一結衆等敬白

十二人の僧侶が「一門の同侶にして、多歳の芳友」であることから、彼らが尊勝院の同侶であったことが窺えるのであるが、ではなぜ笠置寺の弥勒の磨崖仏の前で齋会を開く必要があったのだろうか。そもそも華嚴宗尊勝院の中で、さらに十二人の結衆を契るのはなぜであろうか。その疑問を解くのが、文中にある「見仏聞法・懺悔滅罪、恒規し漸く旧し七八年になんなんとす」である。この「一結衆」の敬白文が書かれた文治三（一一八七）年から、遡ること七八年は、治承四年（一一八一）に当たる。南都焼き討ちの事件が起こった年である。後年（文治二年）東大寺の造営を祈願して重源、弁曉、後白河院は伊勢神宮に大般若經を奉納するのだが、その際の尊勝院弁曉らの「東大寺僧綱大法師等敬白」に、南都焼き討ちの状況が記されている。それを引用すると、

治承年中、忽然として火起こり、一時に焚焼す。長者の宅の如し。尔の時に当たりて遠きも無く近きも無く西より東より老弱相携えて競い來たる。縋素疾走して群集す。柱礎の空しく残れるを見て、声を呑み鳴咽す。佛像の半ば焦がれたるを礼して涙を拭いて蹉跎さたごぶ。

とあり、南都炎上を目の当たりにした僧侶の悲嘆がひとと伝わってくる。そして尊勝院の一門の中には、弁曉などのように東大寺の再建に望みをかけて重源とともに活動を始める者もいれば、一方、結衆を結んで「一仏土」の浄土（阿弥陀の浄土）を願う者も出てきたのである。そして「此の中に若し先亡の人有らば、永く引撰結縁の誓いを忘るる勿かれ。其の時、若し残留の輩有らば、方に宜しく濟度解脱の謀を廻らすべし」とあるように、先に浄土に往生したものは残された者の引撰を助け、残された者は彼の往生と解脱を計って供養するという契約を結ぶのである。

南都焼き討ちの前後の治承・養和・寿永・元暦・文治・建久と続く年号の間、僧侶は自ら小集団を形成して往生の契約をなしたのであった。今挙げた尊勝院の十二人の結衆以外に、治承二年の、名前が伝わらないが二三名で始まった結衆、次に文治四年の観俊を張本とする結衆、そして建久三年と思われる貞慶の結衆があったことが、『讚仏乗鈔第八』や『弥勒如来感応抄一』によって知ることができる。成立の早いものから、今その結衆のあり方を紹介したい。

最初に文治四年の沙門観俊の「塔婆勸進旨趣事」の中に、

願はくは、此の中に若し輩一人、先づ仏道に入らば、其の人必ず余人を導くべし。此の中若し一人の悪縁に赴く者ありと雖も、余人必ず將に其の人を救はん。

とある。「仏道に入る」とは浄土に往生して仏の教化を受けて菩薩地に入ること、「悪縁に赴く」とは六道輪廻に墮することであろう。観俊は前の如教などの十二人の結衆とは別のグループであろう。本文中に

「十二人」あるいは「十数輩」だと明示されていないからである。この観俊の信仰は、本文に、

三箇月不断念佛

毎年三月自十二日勤修。七箇年間（養和以後）敢不退転。永契慈尊之出世耳。

とあり、また

去ぬる養和二年より知識を勧めて、毎年不退の念仏を始行す。運歩助功の者、朝野遠近、幾千万なるを知らず。

とあるので、観俊は三ヶ月の不断念仏を養和二年（一一八二）より七九年行ってきたのである。この弥勒念仏に結縁するもの「幾千万なるを知らず」という盛況であった。源平の戦いや養和二年の飢饉など人心は不安に満ち、弥勒浄土への往生を願ったのである。ところが、笠置に弥勒の磨崖仏はあっても、念仏道場に弥勒菩薩像は欠けていた。そこで観俊は「塔婆勧進旨趣事」を貞慶に作成してもらい、「七寸の白檀の弥勒菩薩像」一体とそれを納める塔婆、即ち「宝篋印塔」一基を勧進している。宝篋印塔については、その勧進文に次のように記される。

宝篋印塔婆は、功德殊勝にして、十方諸仏の恒に其の内に集まる。また、弥勒菩薩、光明の中に、無量諸仏に身を変じ通を現す。今、彼の両事を存ずるは、内に安白檀の尊像を安んじ、外に黄金の化仏を絵するのみ。

塔婆の中に弥勒菩薩像を、外に蒔絵で金の化仏が描かれる、この象徴するものは兜率天浄土に他ならない。

次に『讚仏乗抄第八』八十五頁には、別の結果が記されている。

治承の歴、闍茂の歳、芳友二三の輩と閑かに相い語りて云はく、「我ら謬りて淄衣の名を窃み、徒らに粗糲の責めを受けん」と。

と僧として内実伴わないことを内省し結衆を契るのである。その結衆する理由は「衆心は不同なるも之を同ずる者、必ず其の功を立つ。一念調じ難きも之を調ずる者、其の感有り。合力の善功の徳、莫大なるものか」であると述べ、心を合わせて往生しようとする「合力の善功」を強調する。治承二年（一一七八）より七年間、毎年七日の齋会を設けることを約した結衆なのである。「松門煙滅すと雖も顧みず」とあり、その間に南都炎上するも断絶することなく、今七年後の文治元年（一一八五）を迎える。もともと芳友二三人で、始まった結衆も「親疎老少、聞きて隨喜の者多く、各の淨財を投げ競いて施主と為る」と、僧侶と施主となりながら結衆の人数が増えていったようである。しかし七年の歲月の中で、幾人かは亡くなっていたようで、

榆柳七廻りの間、徒衆漸く少なし。芝蘭の一結の中、存没忽ち隔つ。嗚呼、南浮の聞法の席、縦い彼を欠くと雖も、隨喜の声なり。西方見仏の庭、必ず此の迴向の志しを贈らんと欲す。詞は短くも、願いは遠し。仏界照見したまえ。

とあり、一結（結衆）を生と死に分ち「徒衆、漸く少な」くなったのであった。しかし、ここには「死」への嘆きはなく、死者は西方浄土への往生を遂げたことを述べることで、この齋会は終えるのである。この結衆は阿弥陀信仰だったのである。

このようにさまざまな結衆が南都焼き討ち前後を境にして生まれたのである。さて、最初に戻って尊勝院の十二人の結衆の中身を如教の「笠置寺毎日仏供事」に探って行きたい。彼らは毎月に「不退の供養」をするのだが、その内容は『八名経』を読誦し、弥勒の宝号を百遍唱えるという行いであった。『八名経』は、『八名普密陀羅尼経』のことで、玄奘が訳出している。経の中に、

將命終時身心安隱。見有諸仏及諸菩薩來現其前。爲說大乘甚深法要。既聞法已。必得往生觀史多天奉

事弥勒。後随弥勒下瞻部洲。

とあるように、この経は、「命終時」に諸仏と諸菩薩が「大乘甚深の法の要」を説き、それを聞いて兜率天に往生すると説いている。また「同心の人、合力の輩、同じく知足に上生し、共に慈尊に値遇し、下生に日に我もまた下生せん」とあることによりて、兜率天（知足）に上生しかつ下生することを願っている。弥勒磨崖仏のある笠置は、弥勒菩薩が下生し、成仏する地であると信じられていた。この信仰は、承元四年（一一二〇）に後鳥羽院が磨崖仏の岩穴に書写した『瑜伽論』を埋めるといふ如法経供養によく現れている。「承元四年信田記」に、

次笠置御幸、先御入堂、被行御誦經、著御御宿所、其後又有御入堂、瑜伽論供養御導師解脱房上人、供養以後奉埋論、上人等持筒捧蓋列立、在迦陀於三所誦之。

とある。一方、「一蓮房瑜伽論供養」（『貞慶鈔物』七三才）が、その時の供養の表白文である。その供養の際に参加した人々は下生して、未來仏である弥勒仏が、この埋めた『瑜伽論』を説法する場に立ち会うことを願ったのであった。

古くから笠置の地は弥勒下生の地として信仰されていた。だから、当然過ぎることだが、笠置の地に於いては弥勒仏への信仰一色である。ところが弥勒磨崖仏という「場」を離れると、個々の信仰は阿弥陀を仰ぐこともあった。華嚴宗尊勝院の十二人の結衆が、その良い例である。彼らは如教の「笠置寺毎日仏供事」に見られるように弥勒信仰をしながら、阿弥陀信仰を持っていたことは、「一結衆十余輩互修追善」で、

阿弥陀如来像一鋪を図絵し奉りて、率都婆○本造立し奉る。其の上、妙法蓮華經一部八巻を書写し奉り、無量義、觀普賢、阿弥陀、般若心等の経各一卷、則ち毎月の会場を擲き、聊か一日の齋筵を儲けとあるように「阿弥陀如来像一鋪を図絵し」て、追善供養を行っていることで明白である。さらには、東

大寺尊勝院の僧侶の信仰に、法華經一部八巻を書写していることから、法華信仰が存していたのである。このように弥勒信仰・阿弥陀信仰・法華經信仰が共存することが、南都の信仰のあり方であり、専修念仏とは大きく異なる。さまざまな信仰が複合的にある、このあり方は、やがて貞慶を待って体系化される。今は十二人の結衆が阿弥陀信仰と弥勒信仰と法華信仰も兼ね合わせていることを確認するにとどめたい。そういう信仰を持ちながらも、笠置の地では弥勒信仰のみが表明される、という至極当然の道理をも確認しておきたい。というのも、貞慶が笠置の地にもたらしたものは、舍利信仰・釈迦信仰であり、従来の笠置のあり方と異なるものだったからである。

## 二、貞慶とその結衆

貞慶ほど不幸な思想家はいない。法然を配所へ流すこととなる『興福寺奏状』を草したが故に、一般大衆には不人気となり、果ては民衆と切り離された高僧というイメージを烙印のように押されたのであった。貞慶の全作品を読んだ研究者は誰も存在せず、また貞慶の全作品とは何であるかも確定していない。主著の多くは写本のまま眠っている。教団と研究者が重なるが故に、自らの教団の祖師の研究には熱心だが、それに批判的だった者へは、冷酷かつ無関心である。仏教が元来、概念化された言説を空すること、即ち言語によるレッテルを貼ることから自由であれと説き続けているにも関わらず、研究態度は伝統的解釈の枠組みから一步も出ようとしめない。顕密体制と、口で唱えても、法相教学を理解しようとする努力はない。それでも中世思想史を声高に論ずる。『興福寺奏状』や一部の講式を以て貞慶論を展開する。かかる不幸な中で貞慶の笠置遁世は弥勒信仰のなせる業だという通説がまかり通ったのである。貞慶の信仰は、

興福寺の沙門としての時期と笠置遁世時の弥勒信仰、それから海住山寺に於ける観音信仰という、三期に分けて論じられるが、それが全くの偏見なのである。

龍谷大学図書館蔵の『愚迷発心集』の写本（以下、龍大本）を読むことで、貞慶の同法集団とその契約を推理することが出来た。何も新しい資料が龍大本に付加されていたのではない。その逆である。龍大本には、『愚迷発心集』の次の部分が無いのである。

於是同心芳友相議云。抑恩愛惱心肝者。皆是為生死囚獄之繫縛也。佛陀勸我等。寧又非彼岸直至之指南乎。去來別離無常恩愛。而不退聖衆為友。不忘堅固之契約。而盡未來際為限。恒為親友互助佛遣。鎮為法器同營善事。人若進有遂菩提心者。必施引導。我若先有遂菩提心者。必施引導。若在三途之苦難若人天之欲境。助彼人而為善趣之身。導此人兩人出世之門。乃至有緣無緣現現界他界。自親至疎。從近及遠。面々恩（思力）所一々利益耳。今双眼無乾。而同俱隨喜。落淚盈袂而從啓三寶。於此契約者、今生即終焉之暮為際。未來際又證覺之朝為期。而我等者違此旨。聊有生退屈。拘少事怠大要者、能專此趣、可勵彼心。猶強不隨此語者、永不遂成佛。伏乞、冥衆知見證明、仍所結如右。敬白。

この「是に於いて同心・芳友相い議して云はく」で始まる文章は、本来あったものを龍大本が欠いたのでなく、もともと存在しなかったのである。それは内容から結衆（同心、芳友）の契約であり、貞慶の『愚迷発心集』に付加したものであったのである。結衆であるのは、「不退の聖衆を友と為し、堅固の契約を忘れず」とあることで明白である。また、以下の

人若し進んで菩提心を遂げば、必ず引導を施し、我若し先んじて菩提心を遂げば、必ず引導を施さん。  
若し三途の苦難に在るも、若しは人天の欲境に在るも、彼の人を助け、善趣の身と為さん。此の人を導き、世の門を出でしめ、有縁・無縁、現界・他界に及び至り近より遠に及び、親しきより疎きに至

り、面々の恩所一々に利益せんのみ。

とある部分で、互いに先に往生した者が他の引導を約する所も結衆の特徴を備えている。ただし、他の結衆と異なるのは、往生することを「菩提心を遂ぐ」と表現することである。「菩提心」を往生の根底に置くところに、貞慶の結衆の特徴が見られる。

問題は、貞慶の結衆は何仏を信仰したのか、である。つまり、笠置に遁世したから則ち弥勒信仰とはならないのである。『弥勒如来感応抄』に載せられる「弥勒講式」は貞慶の結衆が実践したのではない。貞慶は文筆に秀でていた。だから、諸方面から講式作成の依頼があった。貞慶の思想研究を困難にしている側面の一つがこの作品論なのである。あらゆる貞慶の著述が本人の思想を表しているとは限らない。例えば、遁世して数年後の建久七年の「弥勒講式」は、

建久七年二月十日於笠置山般若臺草之。

依菩提山仰也。願以此功、必仕慈尊矣。

沙門貞慶

と奥書にあるように、「菩提山」つまり菩提山上人、一蓮房専心（あるいは仙心）の注文に応じて書かれたのである。無論、ここに貞慶本人の思想がないとするのは間違いであろう。自ら信仰しないものを確かに書くはずはない。しかし、貞慶の信仰が菩提山の「弥勒講」に集まった人々と必ず一致するかと言えばそうではないだろう。仏教に対機説法という言葉があるように、そこに集まる人々の信仰を考慮して貞慶は文言を選んだに違いないのである。そこで貞慶本人の思想をつかまえる方法論として、筆者は「別願」という個人的信仰表明の形式を提唱したのである。本稿では、貞慶本人というよりは、貞慶を中心とした結衆、「堅固な契約」の同法集団の思想として探ってみたい。



さて、貞慶はさまざまな講式を書き記した。今その講式を拾ってみると、次のようになる。「舍利講式（一段）」「誓願舍利講式（三段）」「発心講式」「欣求靈山講式」「靈山講式（五段）」「弥勒講式」「文殊講式」「地藏講式」「薬師講式」「弁財天講式」「聖徳太子講式」「珍魔講式」「如意輪講式」「観音講式」「値遇観音講式」「観世音感応抄」「権現講式」「春日権現講式」「別願講式」「神祇講式」「法華講式」などである。注目されるのは『欣求靈山講式』である。奥書に

建久七年、秋月中旬比、笠置山の般若台の菴室において之を草す。同法等の勧めに依るなり。（事は常途に非ず、軽毀を悼むと雖も、若し同志の人有らば、願はくは靈山に会わん。）

とあり、「同法等の勧め」とある、その「同法」が「堅固な契約」をなした同法であれば、貞慶の集団の思想が表れているものと取れる。一方、この講式とほぼ同内容の『靈山講式』がある。貞慶の作であるが、その中に

方今、當山一結佛弟子等、一心凝誠。三業調儀。擺道場之座、聊設微少之供具。燒至心之香、遙迎靈山之聖衆。恭敬供養、發願廻向、以報廣大之佛恩。以祈二利之勝果、蓋毎月今日不退薰修也。

方に今、当山の一結の仏弟子等、一心に凝誠を凝らし、三業に儀を調じ、道場の座を擺く。聊か微少の供具を設け、至心の香を焼き、遙かに靈山の聖衆を迎へ。恭敬供養し、発願廻向す。以て広大の仏恩に報いん。以て二利の勝果を祈らん。蓋し毎月の今日不退の薰修なり。

と、「当山の一結の仏弟子」とあり、これが貞慶の結衆であることは間違いないのである。その信仰は弥勒仏ではなく、釈迦仏だった。『靈山講式』には、

浄土・穢土と謂はず、ただ釈尊の所居の往生を望む。仏非仏の形を嫌わず、深く如來応現の値遇を期す。と「釈尊の所居」である靈鷲山を往生の地として望んでいる。さらに、次に、

其の靈山に於いて、浄土有り、穢土有り、化土有り。凡夫の欣う所は、即ち化仏の国土なり。凡そ如幻の妙境は、定相無きと雖も、機に随いて猶ほ方処を示す。縁に依りて、また遠近有り。往生の難易は、之に依りて弁ずべし。彼の極楽世界は去ること十万億土なり。想觀すれば尚ほ隔て無し。兜率天宮の昇ること、三十二万なり。運心すれば自ら至る有り。況んや、摩竭陀の鷲峯山は、同界なり、同地なり。閻浮の一州なり、人間の一処なり。此れより當西南に当たり、山海は幾地も隔てず。浄土は既に其の処に属す。誰か以て遠しと謂はんや。

とあり、貞慶達の結衆が願う浄土は、共土の化土であったことが明らかになる。共土というのは、不共土が菩薩のみの浄土であるのに対し、穢土と浄土が混在した土である。それは見方を変えれば穢土とも言えるし、浄土とも言える。穢土を全く含まない純浄土の不共土に対して往生し易いのである。しかし、往生に対して用心深い、あるいは慎重なと表現すべきか、貞慶は釈迦の共土の中の浄土を願いながらも、万一の場合は穢土でも釈尊に値遇することを願うのである。その箇所を引くと、

此の方の浄土を欣うは、機縁馮み有りと雖も、若し業行の残闕し、万が一にも生ぜずは、設い穢土の中に於いても、値遇また難からざらん。夫れ釈迦の分身は、無量無数なり。淨穢に因を分かつも、現に十方に居す。爾許の世界の間に、寧ぞ一所の機縁無からんや。就中、此の娑婆世界の中に、また百億の分身有り。粗ら証拠を勘うるに、仏化未だ尽きず。

とある。往生の「業行の残闕」して、共土の浄土へ行けそうもない時は、穢土に往生しても釈迦に値遇することは難しいことではないとする。そもそも「釈迦の分身は無量無数」であり、浄土に限らず穢土にも存在する。だから穢土に往生しても釈尊の値遇の機縁はあるはずである。また、釈迦の分身とは、娑婆世界にあっては仏舍利と現れる。それが「就中、此の娑婆世界の中に、また百億の分身有り」の意味である。

實際貞慶は舍利を首から掛けて持っていたことは、舍利を「常安垢穢之胸間。願日日觸舍利之威光、漸漸破我身之濁闇。」(常に垢穢の胸間に安んず。願わくは、日々に舍利の威光に触れて、漸々に我が身の濁闇を破らん。)と「仏舍利身常可奉安置事 解脱上人製」(『溪嵐拾葉集』大正七六、五四三)にあることで知れる。

貞慶達の結衆の実体は、釈迦信仰⇨舍利信仰であった。笠置の地に遁世して来たからといって、弥勒信仰とは限らないのである。ただし、専修的な信仰は、法然がもたらしたものであり、釈迦信仰⇨舍利信仰が、無論、弥勒信仰を否定することには結びつかない。貞慶が、釈迦・弥勒・阿弥陀を父母君に例えたことは、「釈迦弥陀弥勒三佛、猶如父母君、必可歸依。互助其行」(釈迦・弥勒・阿弥陀の三仏は、なお父母君の如し。必ず帰依すべし。)(「弥勒如来感応抄」『東大寺宗性上人之研究並史料』下 二二七頁)で明らかであり、貞慶自身は機縁に応じた信仰を認めている。しかし、信仰の核となるもの、結衆を約した同法達との信仰は、釈迦信仰⇨舍利信仰であった。「弥勒如来感応抄」に

#### 笠置寺

一千日舍利講仏供料事〈毎日十杯合三升〉

右、釈迦大師遺身舍利、於補処慈尊御前、欲展供養、蓋真報仏恩也。若捧少供必為見仏聞法発心得道之勝因矣。仍奉唱如件。

建久七年四月十四日

と、建久七年(一一九六)に一千日にわたる「舍利講」を行っているのだが、それは貞慶達の結衆の修したものであった。なぜなら、「誓願舍利講式」(三段)の奥書に「一此式六人同志一千箇日勤行之 沙門貞慶」(『貞慶講式集』二五三頁)とあり、「六人同志」が結衆だったと推測される。またこの講式の中の割り注

に「一結相共千日敬白」（一結、相共に千日に敬白す）とあり「一結」とは結衆に他ならない。結衆が異口同音に唱えた敬白は、

「伏し願わくは世尊、哀愍して納受したまへ」で始まる三段で、今出だしを引くと、「一に願はくは、舍利の加被に依りて早く菩提心を発さん」「二に願はくは舍利の威力に依りて衆生を濟度せん」「三に願はくは今身より始めて未來際に至るまで生々世々舍利に値遇せん」とある。特に第三の舍利への値遇を願った一段は、

設生安養、雖住知足、釋尊常來、調熟我心。設順次生不堪見佛、若靈鷲山、若白鷺池等、世尊在世跡之中、受清淨身、止住遊戲。漸近佛化、遂生淨土。

設い安養に生じ、知足に住すと雖も、積尊常に來たりて、我が心を調熟したまへ。設い順次生に見仏に堪えずは、若しは靈鷲山、若しは白鷺池等、世尊在世の跡の中に、清淨の身を受け、止住し遊戲せん。漸く佛化に近づき、遂に淨土に生ぜん。

と淨土への往生が述べられるが、まだ靈山淨土は第一義的に欣求されず、弥陀の安養淨土か弥勒の知足淨土が望まれている。これらは先述した化土の共土の淨土を表す。「靈鷲山、若しは白鷺池等、世尊在世の跡」とあるは、靈山淨土ともとれそうであるが、「漸く佛化に近づき、遂に淨土に生ぜん」とあるから共土の穢土のことである。ここで佛化を受けて次の生で淨土に往生しようというのである。

この「誓願舍利講式」（三段）には靈山淨土が第一義的に欣求されていない。次の「靈山講式」、「欣求靈山講式」に至って始めて始めて靈山淨土の欣求が見られるのである。今、この三つの講式を成立順に並べて確認すると、

「誓願舍利講式」 建久七年四月十四日

「靈山講式」 (建久七年夏頃成立か?)

「欣求靈山講式」 建久七年、秋月中旬比

となろう。「靈山講式」は結衆が一千日の舍利講をなし遂げた後に、新たに修していくための講式だったのである。その成立は「欣求靈山講式」より早い。結衆の同法が「靈山講式」を他の人々にも弘めることを勧めたことで「欣求靈山講式」が出来上がったのである。

さて、「誓願舍利講式」が一千日の間、毎日修せられた舍利講だと分かったが、いつ始められたのであろうか。「建久七年四月十四日」は始まりの日ではなく、結願の日に近いのではあるまいか。理由は浄土に靈山浄土が見られず、「設い安養に生じ、知足に住すと雖も、釈尊常に来たりて、我が心を調熟したまへ」と弥陀の安養か、弥陀の知足が挙げられるも釈迦の浄土の靈山浄土に触れていない。故に、「靈山講式」に則った靈山講が始まる前の段階のものである。建久七年四月が結願とすると、そこから遡ること一千日と言え、建久四年七月頃となる。興福寺を離れて笠置に遁世したのは、建久四年秋である。建久四年秋に遁世した頃から、この舍利講を行っていたと推定していいだろう。つまり「誓願舍利講式」の成立はその頃だったのである。三段の中の「一に願はくは、舍利の加被に依りて早く菩提心を発さん」は、遁世当時の発心祈請をする貞慶の姿と一致する。また『愚迷発心集』の「人若し進んで菩提心を遂げば、必ず引導を施し、我若し先んじて菩提心を遂げば、必ず引導を施さん」とする発心重視の契約とも合致する。

また「二に願はくは舍利の威力に依りて衆生を濟度せん」も、『愚迷発心集』の「近より遠に及び、親しきより疎きに至り、面々の恩所一々に利益せんのみ」と符合している。貞慶の思想の特徴づける、父母の救済というテーマでも『愚迷発心集』と「誓願舍利講式」とは合致するのである。

夫至深母悲、尤遠父慈。日日三時割身雖供、猶不能報一日之恩。

夫れ至りて深きは母の悲しみ、尤も遠きは父の慈しみなり。日日の三時に身を割きて供すと雖も、な  
お一日の恩を報ゆること能はず。

と「誓願舍利講式」にあり、『愚迷発心集』に「二親の菩提」を祈るべきことを述べるなど対応関係が見  
られるのである。以上見てきたことより「愚迷発心集」と「誓願舍利講式」は同時期の成立と見なすこと  
ができる。

今一つ貞慶達の結衆が読み取れるが、「琰魔講式」である。次のようにある。

爰一結衆、深守尺迦本師慇懃之勸、久恃弥陀世尊大悲之誓。期積微功、其数幾許。罪障設重、佛力何  
不滅。行願設淺、本誓何不救彼。晨旦國有雄俊者、七遍還俗之沙門也。還俗之罪、過出佛身血。然而  
雄俊信佛語、白聖王言、「我聞、十念阿弥陀佛者、必往生淨土佛土。佛子在生之間、所唱既多、我若  
墮地獄、三世諸佛、可成妄語。干時淨土蓮臺、應聲現空。」佛子所憑、只此先蹤也。

爰に一結衆は、深く釈迦本師の慇懃の勧めを守り、久しく弥陀世尊の大悲の誓いを持つ。微功を積む  
を期するも、其の数、幾許ぞ。罪障、設ひ重くとも、仏力は何ぞ滅せざらん。行願は設ひ浅くとも、  
本誓は何ぞ彼を救はざらん。晨旦國に雄俊といふ者有り、七遍還俗するの沙門なり。還俗の罪は、仏  
身の血を出だすに過ぐ。然るに雄俊、仏語を信じ聖王に白して言く、「我聞く、阿弥陀仏を十念する者  
は、必ず淨土仏土に往生す。仏子、在生の間、唱ふる所既に多し。我若し地獄に墮ちば、三世の諸仏、  
妄語と成るべし。時に淨土の蓮台、声に応じて空に現ず」と。仏子の憑む所は、ただ此の先蹤なり。

とあり、貞慶達の結衆が「深く釈迦本師の慇懃の勧めを守り、久しく弥陀世尊の大悲の誓いを持つ」こと  
が知れる。これは興福寺時代に貞慶が「発遣釈迦、来迎弥陀」という信仰を持っていたことと対応してい  
る。貞慶に阿弥陀信仰があったことはすでに『仏教文化研究所紀要 第八号』の「貞慶の阿弥陀信仰と

『発心講式』について」で論じたので詳細は避けるが、先に引いた「仏舍利身常可奉安置事 解脱上人製」の末尾は、

命終之時、不遇惡縁、不起妄念。勝境感顯善心開發。直義、釋尊發遣、必預彌陀之迎接。敬白

命終の時、悪縁に遇わず、妄念を發さざれば、勝境感顯し、善心開發せん。直義は、釈尊發遣し、必ず弥陀の迎接に預かる、なり。敬白

で結ばれる。病弱だった貞慶は臨終に病魔によって心乱れることを恐れていた。もしも悪縁に遇わず、妄念起こらないならば、聖衆の来迎（勝境）があり、そこで唯識の教理を理解する心（善心）が生じ極楽浄土へ往生する。それを端的に言えば（直義）「発遣釈迦、来迎弥陀」と述べている。一方、「琰魔講式」の弥陀信仰は、それとは異なり万一にも往生に失敗し閻魔庁に召された時に、「雄俊」の「先蹤」の通り、弥陀の十念を唱えているが故に、悪趣に墮ちず浄土へ往生すると言はんがためである。閻魔と弥陀が表裏一体となった信仰のあり方である。必ず阿弥陀の浄土へという強い信仰ではない。そのことは、念仏が阿弥陀念仏ではなく、釈迦念仏だったことでも確認できる。「琰魔講式」には、

適發相似善心、雖捨名利、其名未淨。其利未忘於名利。設雖非深重、出離真道忙然未悟。僅憑釈尊之本願。只入念仏之一門、所持者、南無釈迦牟尼佛之名号。

適ま相似の善心を發こし、名利を捨てると雖も、其の名は未だ浄ならず、其の利は未だ忘れず。名利に於いて、設ひ深重に非ずと雖も、出離の真道は忙然として未だ悟らず。僅かに釈尊の本願を憑み、ただ念仏の一門に入る。持つ所は、南無釈迦牟尼仏の名号なり。

と念仏は「南無釈迦牟尼仏」という名号を唱えるものだったことが分かるのである。「適ま相似の善心を發こし、名利を捨つ」とあるが「相似の善心」を發こすとは、遁世のことを指しているので、これが建久

四年秋の遁世後の作であるのは間違いない。また、

同音唱釈迦名号、其数必滿一百八遍。是擬最後十念、兼存臨終行儀。習心積功者、散乱何不脱。兼又、設漏大悲迎攝、誤預琰王珂嘖於冥路中陰砌、必修高聲念佛、普救受苦衆生、速到安樂寶刹。愚意所志何不納受。

同音に釈迦の名号を唱え、其の数は必ず一百八遍に滿つ。是れ最後の十念に擬し、兼ねて臨終の行儀を存す。心を習はし功を積む者、散乱、何ぞ脱れざらん。兼ねてまた、設ひ漏大悲の迎攝に漏れ、誤りて琰王の珂嘖に預かるも、冥路の中陰の砌に、必ず修高声の念仏を修せば、普く救受苦の衆生を救ひ、速かに安樂の宝刹に到らん。愚意の志す所、何ぞ納受せざらん。

とあり、常日頃は釈迦の名号を唱えていたのである。百八遍の釈迦念仏とは恐らく百八煩惱を消すためであろう。ともかく、貞慶達の結衆は釈迦念仏であり、それは「兼ねて」臨終の行儀つまり臨終の十念に擬するものだったのであり、あくまで中心は釈迦念仏だったのである。それは遁世間もない頃の貞慶の同法達が願ったのは、発心することであり、『愚迷発心集』の末尾には、「仰ぎ願くは、三宝・神祇、愚意を哀愍し。道心を発さしめたまへ。一要、若し成就せば、万事は皆足りぬべし」（龍大本は「一要」は「一念」となっている）道心の一要（あるいは一念）が成就すれば、「万事」が足りるとする、その「万事」とは現世での菩薩道と極樂往生を意味しているよう。建久四年の時点では、貞慶は笠置の地に般若台（板葺六角三間精舎）を勧進している最中であつた。

般若台という精舎は、さまざまな人々の支援を得て建立されたことは、『讚仏乘鈔八』の「笠置寺般若臺供養」に

得一施主。其力稍及助大半。遂巖下開基。山中擇材、知與不知、遠近同志、莫大之功、不期而成。箇



中大木者、當山賀州（伊賀國）專抽其誠。穀帛者兩三知識、殊施其資。

一施主を得る。其の力は稍う大半を助くるに及び、遂に巖下に開基す。山中の択材は、知と不知との、遠近の同志の莫大の功にして、期せずして成る。箇中の大木は、当山の賀州（伊賀國）、専ら其の誠を抽く。穀帛は兩三の知識、殊に其の資を施す。

とあることで知れる。さまざまな人々の期待を背負って般若台を建立し、貞慶も自負するものがあつたに違いない。その貞慶の信仰に共鳴した者達との結果だつた。般若台が建立される際に、養和二年から書写し始めた『大般若経』一部六百巻が建久三年に功を終えるが、それを納める黒漆八角経台を作っている。その中央に安置したのは釈迦仏の仏像で、両側に文殊・弥勒の菩薩をそれぞれ一体づつ配置し、十六粒の仏舍利を納めている。「佛舍利者、弟子殊所歸也」（仏舍利は、弟子の殊に帰する所なり）とあり、釈迦〓舍利信仰を根底に持ったものであることが、八角経台に如実に表れている。また「發心修行、興法利生、推其主要、不如般若」とあるように、般若の智が發心修行、興法利生を生み出すものであつた。

貞慶の結果は、弥勒信仰が強かつた笠置の地に新たに舍利〓釈迦信仰をもたらした。この信仰はやがて笠置の地に十三重塔婆（般若塔）を建立するという新たな展開を生む。「山城笠置山貞慶勸進状」（『弥勒感応抄一』）に、

建立十三重之塔婆、所安置者則仏舍利尔許粒、大般若・法華・心地観等三部大乘、及大聖文殊・四天王等形像也、擬之靈鷲山般若塔矣、

とある。仏舍利塔に『大般若経』『法華経』『心地観経』を納め、それを印度の靈鷲山の般若塔に擬したのであつた（建久九年）。かかる仏舍利塔と結び付いた舍利〓釈迦信仰は、笠置に止まらず、菩提山の正暦寺の正願院でも「請起立十三重塔婆安置百余粒舍利状」（「表諷讚雑集」続真言宗全書第三十一）という

勸進文を貞慶は書いている。遁世の翌年の建久五年のことである。『三箇院家抄三』には、「正願院御塔・御堂御仏事帳」に「御塔不断念仏釈迦宝号番帳」が記され「当番衆四人」を決めて釈迦念仏が唱えられていた。「建久七年十二月四日始之」とある。これも貞慶の影響を受け、仏舍利塔の下での釈迦念仏を唱えるという運動が南都に広がりをもせていたのである。貞慶の釈迦念仏と言えば、建仁三年（一一〇三）の『唐招提寺釈迦念仏願文』が有名であるが、実に遁世時から結果の人々とともに実践していたのであった。

## おわりに

南都焼き討ち前後から、さまざまな結果が作られ浄土への往生を互いに助け合うという運動が盛んになった。東大寺尊勝院の十二人の結果がその代表としてよい。一方、貞慶の結果は阿弥陀信仰を持ちながらも、信仰の中核に般若の智による「発心」をおき、濁世における釈迦の仏道を実践しようという結果だった。閻魔庁に行き三悪道へ堕ちないためには、弥陀の十念でも唱えたものは救済するという誓いを信仰するものの、「一要、若し成就せば、万事は皆可足りぬべし」という道心（発心）をこそ重視したのである。この数人の結果の運動は、やがて南都全体へ展開をしていき法然との思想的対立も生むことになるのである。その辺の事情に付いては既に論述したことがあるので、ここでは触れない。従来視点には、無かった「結果」という点で貞慶の思想を見た時、舍利Ⅱ釈迦信仰と塔崇拜の強さが確認されたのである。

## 執筆者一覽

- 新 倉 和 文 (本研究所客員研究員・  
龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)
- 青 木 新 門
- 蜷 川 祥 美 (本研究所兼任研究員・本学短期大学部教授)
- 河 智 義 邦 (本研究所兼任研究員・本学教育学部准教授)
- 吉 田 哲 (龍谷大学大学院文学研究科)

編 集 委 員

讓 西賢 河智 義邦

城福 雅伸 蜷川 祥美

仏教文化研究所紀要 第11号

平成23年3月25日 印刷

平成23年3月31日 発行

編集・発行

岐阜聖徳学園大学

仏教文化研究所

代表者 讓 西賢

〒501-6194 岐阜県岐阜市柳津町高桑西一丁目1番地

岐阜聖徳学園大学内

TEL 058-279-0804 (内線131)

FAX 058-279-4171

印刷 日本印刷株式会社

をより大幅に発展させたのか。ダルマキールティ自身も述べているように、日常的営為（世俗）に関するプラマーナについてさえ、世間の人々を惑わす者たちがいるので、日常的営為を為す者にとってのプラマーナの性質を論じることが彼らの急務であり、そのためには外界実在論的考察が必要だったといえよう。<sup>32</sup>

---

<sup>32</sup> Cf. PVin I [p. 44, ll. 2-4] : sāmvyavahārikasya caitat pramāṇasya rūpam uktam / atrāpi pare mūḍhā viśaṃvādayanti lokam iti / ; cf. 戸崎宏正「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章 現量（知覚）論の和訳（10）」（『西日本宗教学雑誌』15, 1993, pp. 1 - 13） p. 4 ; 実際、PV III 301-319 におけるダルマキールティの論調は、たとえ仮に外界実在論を承認するとしても、同じく外界実在論に立つ他派の学説には誤謬があり、外界実在論としてさえ成り立たない点を批判するものとなっている。

るディグナーガの論述の仕方にも求められるであろう。ジネーンドラブディなどは、必ずしもディグナーガに常に忠実とは言い難いダルマキールティの学説が成立した後にディグナーガの PS, PSV を注釈せねばならなかったのであり、時としてはディグナーガの意図に反した解釈を行わざるを得なかったであろう<sup>30</sup>。ダルマキールティを始めとする後継者たちが、PS におけるディグナーガの唯識的論述<sup>31</sup>を保持したまま、さらに深化した外界実在論的諸理論を展開すれば、恐らくは上述の錯綜状態は不可避であったのではないだろうか。では、何故彼らが唯識説を保持したまま、むしろそれに反する外界実在論的な理論

<sup>29</sup> PVP [D223a7-b1, P262a3-4] : gang gi phyir de ltar phyi rol gyi don yan gar ba med pa **de'i phyir** / (PV III 337a' : tasmāt) shes pa **gcig la** (PV III 337a' : ekam) ma rig pas bslad pa'i phyir **tshul gnyis yod pa** (PV III 337a' : dvirūpam asti) yul dang rnam par shes pa'i ngo bo dag tu bshad par 'gyur ba [D223b1] [P262a4] yod pa yin no // (以上のように外界の対象は単独では存在しない。「従って」(PV III 337a' : tasmāt) 知という「単一のものに」(PV III 337a' : ekam) 無明による迷乱の故に「二つの形相がある。」(PV III 337a' : dvirūpam asti) [すなわち、] 対境 [の形相] と識の形相と説明されることになるものがあるのである。) ; PVT [D220a5-6, P271b8-272a1] : **de'i phyir** shes pa **gcig la** ma rig pas bslad pa'i phyir **tshul gnyis yod** ces bya ba la sogs pa la / tshul gnyis bzhin du [P272a1] snang ba'i phyir [D220a6] **tshul gnyis yod** ces brjod de / ji ltar 'khrul pa bzhin du rnam par gzhas pa'i phyir ro // shes pa de tshul gnyis pa nyid ni ma yin te gnyis med pa nyid yin pa'i phyir ro // (「従って」知という「単一のものに」無明による迷乱のために「二つの形相がある」云々について。二つの形相のように顕現するから、「二つの形相がある」と述べられたのである。迷乱の通りに確立されるからである。その知は二つの形相をもつのではない。不二だからである。)

<sup>30</sup> Cf. 片岡啓 『集量論』 I 9 解釈の問題点—ディグナーガとジネーンドラブディ— (『印度学仏教学研究』 58-1, 2009, pp. 106-112)

<sup>31</sup> Cf. PS I 10

### 【証因より生じる（＝有分別）の場合】

認識手段＝推理＝能取形相

認識対象＝共相（不明瞭な顕現）＝所取形相

となる。このように見ると、唯識説に立つ場合は、外界実在論に立つ場合に「知が対象の形相をもつこと」が「プラマーナ」すなわち認識手段であるとされた場合とは明らかに「プラマーナ」という術語にもたされている意味が異なっていることが理解される。外界実在論においてはある対象知を他の対象知と区別することを可能ならしめる要因が「プラマーナ」の重要な意味であった。ところが唯識説に立つ場合には、能取形相も所取形相も別個に存在するものではない。迷乱によって能取や所取と誤認されるのであって、単一な知に能取と所取という二つのものがあるのではないのである。<sup>29</sup> 個々の知が限定される要因は特定の知が特定の潜在印象を覚醒させる点に求められ、「貪などの自己認識」についてジネーンドラブッディが述べるように、能取形相は「直接経験を本性とすること」などというように、他の知からその知を区別せしめる機能を全くもたされていない。これは外界実在論に立つ場合と大きく異なる点である。

#### 4. まとめ

少なくとも、比較的初期の仏教論理学派、すなわちデーヴェーンドラブッディやシャーキャブッディの認識論には、外界実在論と唯識説というかなり深刻な相違点を保ったままの二つの認識構造が前提されていることが指摘出来たと思う。外界実在論的な論述が行われている際に、唯識説に立つ場合と一致する理論が現れる場合もあるが、それは外界実在論から唯識説へと移行する過程を示しているとも言い得るし、または、唯識説と共通する点があるが故に、彼らが本来もっている唯識説が外界実在論に立っている場合にも顔を覗かせていると考えることも出来る。しかし、一見このような外界実在論と唯識説とが錯綜しているような状態を来たしている根本的要因は、彼らの派祖であ

によって貪など自身が認識されることがその認識手段の結果であり、認識対象はもちろん貪などである。この「貪などの自己認識」は知覚であるから、ここでは直接経験（anubhava）を本性とする認識ではない推理などは一応除外されていると見る事が出来る。一方、唯識説に立ち、しかも知覚だけではなくて推理をも含めた場合について、ジネーンドラブッディは次のように説明している。

まず、無分別である場合は、能取形相は知覚という分別を欠いた認識手段であり、明瞭に顕現する所取形相は自相という認識対象である。また証因より生じる場合は、能取形相は推理という認識手段であり、特殊な個物に随伴するかの如き不明瞭に顕現する所取形相は共相という認識対象である。<sup>28</sup>

これによれば、

【無分別の場合】

認識手段＝知覚＝能取形相

認識対象＝自相（明瞭な顕現）＝所取形相

---

<sup>27</sup> PST [p. 53, l. 9 - p. 54, l. 9] : **rāgādiṣu ca svasaṃvedanam iti / svasya saṃvedanam svasaṃvedanam / saṃvedyate 'neneti saṃvedanam / grāhakākārasankhyātam anubhavasvabhāvatvam / anubhavasvabhāvatvād eva hi rāgādayo 'nubhavātmatayā prakāśamānā ātmānaṃ saṃvedayante, ātmasaṃvedanā iti ca vyapadiśyante / atas tad-anubhavātmatvam eṣāṃ pramāṇam / yat punar bhāvarūpaṃ saṃvedanam svādhigamātmakam, tat tasya phalaṃ veditavyam / ātmā tu teṣāṃ prameyaḥ /**

<sup>28</sup> PST [p. 74, ll. 11-14] : **nirvikalpe tāvad grāhakākāraḥ kalpanāpoḍhaṃ pratyakṣaṃ pramāṇam, spaṣṭapratibhāso grāhyākāraḥ svalakṣaṇaṃ prameyam / līngaje 'pi grāhakākāro 'numānaṃ pramāṇam, vyaktibhedānuvāyāvīvaspaṣṭapratibhāso grāhyākāraḥ sāmānyalakṣaṇaṃ prameyam iti /**



み込まれているのであるが、その場合、先に述べたように、〈プラマーナ〉に配当されるのは知の「能取形相」(grāhakākāra)であった。しかし、一口に「能取形相」といっても、それが具体的には何を指すのか、ということになるとそれほど容易に理解出来るとは言い難い<sup>26</sup>。しかし、少なくとも次に見るような解釈を見出すことが出来る。

まず、外界実在論においても承認される「貪などの自己認識」に関する説明に見ることが出来るものがある。PSの復注者ジネーンドラブッディは次のように説明している。

「また貪などの自己認識も……」について。「自己」(sva)の「認識」(saṃvedana)が「自己認識」(svasaṃvedana)である。「認識」(saṃvedana)とは認識(saṃ-√vid)するための手段という意味であり、「能取形相」(grāhakākāra)と呼ばれ、直接経験を本性とする。というのも、まさに直接経験を本性とすることによって、貪などは、直接経験を本性として顕現しつつ、自己を認識させるのである。だからまた「自己本性の認識」(ātmasaṃvedana)とも名付けられる。従って、その直接経験を本性とすることが、それら(=貪などの自己認識)にとっての認識手段である。また、およそ自己の理解(sva-adhigama)を本性とするという存在形態(bhāvarūpa)をもつ認識、それはそれ(=直接経験を本性とすること)の結果であると理解すべきである。他方、それら〔貪などの自己認識〕の認識対象(prameya)は〔貪など〕自身である。<sup>27</sup>

ここでは「能取形相」とは、認識の手段であり「直接経験を本性とすること」(anubhavasvabhāvatva)だといわれている。そして、それ

---

<sup>26</sup> 「能取形相」が何を意味するのかについてはチベット仏教においても問題とされたようである。cf. 村上徳樹「所取の形象と能取の形象についてのケドップジェの解釈」(『日本西藏学会会報』52, 京都, 日本西藏学会, 2006, pp. 3-12)

つつ、起こる」というこの〔表現〕と結び付けられる。「それぞれの刹那の各々の能力の本性として」〔とは、すなわち、〕特定の刹那が、次々と他〔の刹那〕を生じさせることによって、である。「転変」とは、結果を生じることを特徴とする。「近接して」とは、阿頼耶という識自体に作用するとき、である。<sup>25</sup>

「転識」(pravṛttivijñāna) とは、唯識説において、潜在的な阿頼耶識に対して顕在的な、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、及び染汚意を指す術語である。またダルマキールティが「内在する潜在印象」(antarvāsanā) と表現したものを「阿頼耶識に存在する能力」と換言する。

### 3. 2 能取形相について

このように、シャーキャブッディの段階では明らかに仏教論理学の中の認識論にも、唯識説に立つ場合には「阿頼耶識縁起」の構造が組

<sup>25</sup> PVT [D220a2-5, P271b4-8] : 'ga' zhig rnam par shes pa ni / [D220 a3] zhes bya ba ni 'jug pa'i rnam par shes pa las gang yang rung ba'o // [P271b5] nang gi bag chags zhes bya ba ni kun gzhi rnam par shes pa la gnas pa'i nus pa'o // rab tu sad par byed pa ni khyad par can gyi rnam par shes pa bskyed par bya ba la nus pa thogs pa med par skyed par byed [P271b6] pa'o // des na shes pa gang gis [D220a4] zhes bya ba ni sngon po la sogs pa'i shes pa skye bar 'dod pa'i lhan cig byed par gyur pa'i shes pa gang yin pa rab tu sad par byed pa 'byung bar 'gyur ba zhes bya ba 'di dang sbyar [P271b7] ro // skad cig ma re re'i nus pa'i rang bzhin gzhan dang gzhan gyis te / skad cig ma khyad par can phyi ma phyi ma gzhan skyed par byed pas [D220a5] so // yongs su gyur pa zhes bya ba ni 'bras bu skyed pa'i mtshan nyid do // [P271b8] nye bar 'gro ba ni kun gzhi zhes bya ba'i rnam par shes pa'i bdag nyid du byed pa na'o //

て次のように述べている。

「**ある**」識が」とは、転識 ('jug pa'i rnam par shes pa : \*pr-avṛttivijñāna) のうちのいずれか一つが、である。「**内在する潜在印象**」とは、阿頼耶識 (kun gzhi rnam par shes pa : \*ālay-avijñāna) に存在する能力である。「**覚醒させるもの**」とは、特殊性をもつ識が生ぜられるとき、能力を妨げなく生ぜしめるものである。「従って、ある知〈甲〉によって」という〔表現〕は、生じようとする青などの知と共に作用するある知〈甲〉を「覚醒させ

---

<sup>24</sup> PVP [D223a2-6, P261b5-262a2] : [P261b5] de ltar ni 'gyur mod kyi / gal te phyi rol [D223a3] gyi don la ltos pa med par shes pa 'di skye bar 'gyur ba de'i tshe / de las gzhan pa'i snang ba la sogs pa'i rkyen thag nye ba na yod na / dkar por snang ba'i ngang tshul can [P261b6] gyi shes pa stong pa'i yul du 'jug pa na 'gyur ba yang ma yin pa de bas na / dkar por snang ba'i ngang tshul can gyi shes pa [D223a4] 'bras bur 'gyur ba de tsam gyis mi 'gyur bas rgyu don yang yod pa yin no zhe na / 'bras bu [P261b7] ldog pa las rgyu gzhan la ltos pa dang bcas pa nyid yin gyi phyi rol gyi don la ltos pa dang bcas pa ni ma yin no // de ltar na 'dir 'ga' zhiḡ gi tshe (PV III 336a' : kasya cit) sngon po la sogs pa mthong ba'i 'ga' zhiḡ (PV III 336a' : kiñ cid eva) [D223a5] rnam par shes pa [P261b8] ni nang gi bag chags rab tu sad par byed pa yin (PV III 336a'b : antarvāsanāyāḡ prabodhakam) gyi thams cad ni ma yin no // des na shes pa gang gis skad cig ma re re la nus pa'i rang bzhin gzhan dang gzhan gyis rnam par shes pa yongs su gyur pa nye bar 'phro ba ni shes pa [P262a1] rab tu sad par byed pa 'byung bar 'gyur ba gang [D223a6] yin pa de'i dbang gis de dang de skye bar 'gyur ba thams cad ni ma yin no // de ltar na rab tu sad par byed pa / de phyir blo ni rnam nges kyi // [P262a2] phyi rol don ltos ma yin no // (PV III 336cd : tato dhi-yāḡ viniyamo na bāhyārthavyapekṣayā)

以下のような〔反論〕があるかもしれない。

【反論】もし、外界の対象に依拠することなくこの知が生じるとすると、〔眼識の場合には、〕それ（＝外界の対象）とは別の、光を始めとする縁（＝補助的原因）が近接するとき〔その対象の知が〕あるとしても、白として顕現すべき性質をもつ知が空なる対境に対してはたらくときは、〔白として顕現する知は〕起こることがない。従って、白として顕現すべき性質を有する知と結果（＝白として顕現する知）それのみでは〔白として顕現する知は〕起こらないから、原因として対象も存在する。

【答論】結果の否定的随伴（\*vyatireka）にもとづいて〔外界対象以外の〕他の原因に依拠するのであって、外界の対象に依拠するのではない。だから、ここでは「ある場合」（PV III 336a' : kasya cit）〔すなわち〕青などが知覚される〔場合〕、「ある」（PV III 336a' : kiñ cid eva）識が、「内在する潜在印象を覚醒させるものである」（PV III 336a'b : antarvāsanāyāḥ prabodhakam）けれども、すべてを〔覚醒させるの〕ではない。従って、ある知〈甲〉によって、それぞれの刹那における、各々の能力の本性として<sup>23</sup>、識が転変して近接し、知を覚醒させつつ起こる場合、その〈甲〉によってそれぞれが生じることになるけれども、すべてが〔生じるの〕ではない。だから、覚醒させるもの、「それによって知は限定を有するけれども、外界の対象に依拠してではない。」（PV III 336cd : tato dhiyāṃ viniyamo na bāhyārthavyapekṣayā）<sup>24</sup>

この中でデーヴェーンドラブッディは「阿頼耶識」という表現を用いてはいない。「識の転変」（\*vijñānapariṇāma）のような表現は、「阿頼耶識」を念頭に置いていることを示唆するものとも考えられようが、決して明確ではない。一方、シャーキャブッディはこの部分を注釈し

---

<sup>23</sup> D, P ともに nus pa'i rang bzhin gzhan dang gzhan gyi であるが、PVT に従って nus pa'i rang bzhin gzhan dang gzhan gyis と読む。

いようである。

しかし、これは外界实在論に含まれる矛盾、もしくは問題点を指摘して批判しているのであって、これだけでは外界实在論を否定することによって消極的に唯識説の妥当性を示唆しているに過ぎない。

次は仏教認識論における、より積極的な唯識説の主張を確認する。

### 3. 1 阿頼耶識について

従来、ダルマキールティの唯識説が「阿頼耶識」(ālayavijñāna)を認めるものなのか否かについては判断の分かれるところである<sup>20</sup>。しかし、少なくともシャーキャブッディは「阿頼耶識」という術語を積極的に用いているようである。その一つは、もし知が外界の対象をもたないとすれば、特定の対象のみが認識され、それ以外の対象は認識されないというような限定がどのようにして可能なのか、という問いに答える部分においてである。ある特定の対象が外界に存在するときにはそれが知覚され、その対象が存在しなければ知覚されない、というように、外界实在論においてはこの限定的な知の生起に関して比較的容易に説明出来るのである。しかし、唯識説の場合には、知の対象がその知自身であることによって、この問題に常識的な方法で答えることは困難である。<sup>21</sup>

ダルマキールティは、ある特定の知がある特定の知に内在する潜在印象 (antarvāsanā) を覚醒させることによって、限定的に知が生じることを説明している<sup>22</sup>。これをデーヴェーンドラブッディは次のように注釈している。

---

<sup>20</sup> Cf. 戸崎 [1985] pp. 19-20, note, 60

<sup>21</sup> これは『唯識二十論』でも対論者から指摘される問題である。

<sup>22</sup> PV III 336 : kasya cit kiñ cid evāntarvāsanāyāḥ prabodhakam / tato dhiyāṃ viniyamo na bāhyārthavyapekṣayā // ; 戸崎 [1985] pp. 19-20

の関係が成り立つことにもとづいて、「〇〇が見えた」という決定があり得るのだとすると、そもそも〈見ること〉が〈見られるもの〉を対象とするという関係はどのようにして成立するのか、というさらなる問いが生じる。その問いに答えようとして「その関係は「これが見えた」という決定にもとづく」と述べるならば、これは明らかに循環に陥ってしまう。デーヴェーンドラブッディやシャーキャブッディが「相互依存」と言っているのはこのことである。

このような唯識説の側からの批判が厳密に言って妥当なものかどうかについては検討の余地があろうが、この議論の興味深い点は、唯識説が外界実在論に対して一種の「懐疑論的批判」を加えているということである。知が外界に実在するものを対象としているのかどうかを確定する根拠を求めようとすれば、上述の如き循環に陥り、それは知の対象を外界に実在するものと仮定することから生じるのだと言いた

---

<sup>18</sup> PVP [D220b6-7, P259a1-3] :

snang dang mthong ba de dag ni // 'brel pa la ni brten nas ni  
// [D220b6] [P259a1] lta ba po yi nges de yin // (PV III 325a'cd  
: dṛśyadarśanayor .... tayoh sambandham āśritya draṣṭur eṣa vini-  
ścayaḥ)

mthong ba dang thos pa 'di yin no zhes bya ba'i nges pa gang yin  
pa de ni mthong ba dang thos pa dag don dang 'brel pa grub pa  
na 'brel pa de la brten nas 'gyur na don [P259a2] yang ma grub  
pa'i mtshan nyid can yin pa de ltar na / de'i yul can gyi mtshan  
nyid mthong ba 'am [D220b7] thos pa ma grub pa yin no zhes bya  
ba gang las dus phyis 'byung ba can gyi nges pa de de'i yul can  
gyi mtshan nyid la brten pa [P259a3] yin / 'dis ni gcig la gcig  
brten pa yin pa bstan to // ; cf. 戸崎 [1985] pp. 7-9

<sup>19</sup> PVT [D219a2-3, P270a8-b1] : gcig la gcig rten yin pa bstan to zhes  
bya ba ni 'di mthong ngo // 'di thos so zhes zhen pa la brten nas  
mthong ba dang thos pa dag yul dang 'brel pa grub pa [P270b1]  
yin te / de la brten nas kyang 'di mthong ngo // 'di thos so zhes  
[D219a3] zhen pa yin no //

れる。それは、外界の対象が知覚されれば、その後で「色が見えた」「音声聞こえた」などというような決定が生じる、ということが現に経験される。しかし「等無間縁が見えた」などというような決定は決して生じない。従って、等無間縁が知の対象であるなどということは実際の経験上否定される、というものである。これに対して、唯識説の側は、そもそも「〇〇が見えた」などの決定は何によって生じるのかという点を問う。デーヴェンドラブッディは、この点に関して次のように述べている。

「〈見られるもの〉と〈見ること〉というその両者の関係にもとづいて、見る者にその決定がある」(PV III 325a'cd : *dr̥śyadarśanayor ... tayoh sambandham āśritya draṣṭur eṣa viniścayaḥ*)。凡そ「これが見えた」とか「〔これが〕聞こえた」という決定が、〈見ること〉や〈聞くこと〉と〔それらの〕対象との関係が成立するときにその関係にもとづいて起こるのであるならば、対象さえ特徴が成立していないから、それ(=対象)を対境とすることを特徴とする〈見ること〉も〈聞くこと〉も成立しない。どうして後で生じるその「これが見えた」とか「これが聞こえた」という決定が、それ(=対象)を対境とするという特徴にもとづくであろうか。これによって相互依存(\**anyonyāśrita*)であることが教示されたのである。<sup>18</sup>

これについてのシャーキャブッディの復注は以下の通りである。

「相互依存であることが教示されたのである」とは、「これが見えた」、「これが聞こえた」という決定にもとづいて〈見ること〉や〈聞くこと〉の対境との関係が成立し、またそれにもとづいて「これが見えた」、「これが聞こえた」と決定される〔ということ〕である。<sup>19</sup>

もし、〈見ること〉と〈見られるもの〉との間に〈見る・見られる〉

は実際には対象となるはずのない「等無間縁」(samanantarapratyaya) すなわち直前に生じた知をも「対象」と認めなければならないことになる。等無間縁は縁 (pratyaya) である以上、直後の知が生じる原因であって、直後の知は「等無間縁から生じる」といわねばならないから、等無間縁は条件 (二) を満足する。またその一方で、直後の知が等無間縁の対象 A と同類の対象 A' の形相をもつとき、条件 (一) を満足する<sup>17</sup>。しかし、これに対して外界実在論の側からも反論がなさ

---

<sup>17</sup> デーヴェンドラブッディは PV III 323 において用いられる「同類の対象」(samānārtha) という表現に注意して次のように注釈する。これによれば、等無間縁とその直後の知とが全く同一の形相をもつのではないとしても、唯識説からの批判は有効である。またこの注釈からは等無間縁は直接経験知 (= 知覚) を、その直後の知は「知覚判断」(smārta) を指していることが分かる。; PVP [D220b1-2, P258b2-4] : de ltar ni 'gyur mod kyi / rnam pa thams cad kyi rjes su byed pa ma yin pa de ltar na de'i rjes su byed pa ma yin no zhe na / de ni ma yin te / [P258b3] gzhan la yang mtshungs pa can nyid kyi phyir ro // nyams su myong ba'i shes pa yang rnam pa thams cad du don gyi rjes [D220b2] su byed pa ma yin no // de lta ma yin na don thams cad kyi rjes su byed pas shes pa nyid don yin pa [P258b4] de ltar na / don zhes bya ba cung cad kyang med par 'gyur ro // der snang ba nyid ni dran pa las byung ba nyid la yang yod pa ma yin pas de ltar na mtshungs so // (以下のような〔反論〕があるかもしれない。【反論】〔直後の知の形相が直前の知の形相に〕全面的に相似するのではない。だから、〔直後の知は〕それ (= 直前の知) に相似するのではない。【答論】それは正しくない。〔全く〕別のものにさえ同類のものがあるからである。直接経験知 (\*anubhavajñāna) でさえ、すべての形相について対象に相似するのではない。さもなければ、対象全体に相似することによって、知は全く対象ということになる。そうすると、「対象」というものが少しもなくなるであろう。それとしてのまさに〔その〕顕現が、知覚判断 (\*smārta) にもあるということではないから、だから、「同類」なのである。)



釈には、この両者の唯識説がどのようなものであるかを垣間見ることが出来る。

デーヴェーンドラブッディやシャーキャブッディが唯識性を主張し外界実在論を批判する部分に、興味深い考え方が披瀝されている。それは、外界実在論における〈知の対象〉の定義に関するものである。

〈知の対象〉の定義とは

- (一) 知がその形相をもつ（もしくは、それに相似する）、
- (二) 知がそれから生じる、

という二つの条件を満足するものこそが〈知の対象〉だ、というものである。これはダルマキールティ自身が述べていることであり<sup>15</sup>、また、それ以前にもディグナーガが『観所縁縁論』(Ālambanaparīkṣā)の中で提示することで有名なものである<sup>16</sup>。条件(一)は、仏教認識論が一貫して有形相認識論の立場に立つことと密接な関係がある。「知が対象を把握する」ということは、有形相認識論においては結局「知が対象の形相をもつ」ということに他ならない。他方、条件(二)は、これも仏教認識論にとって極めて重要なものである。彼らにとっては、〈知の対象〉と〈知〉とは、原因と結果に他ならないのである。

しかしこの〈知の対象〉の定義を援用した批判が唯識説から外界実在論に向けられる。これが対象の定義であるとする、外界実在論者

<sup>15</sup> PV III 247

<sup>16</sup> *Ālambanaparīkṣāvṛtti* [D86a6-7, P 177b6-7] : gang dag mig la sogs pa'i rnam par shes pa'i dmigs pa phyi rol gyi don yin par 'dod pa de dag ni de'i rgyu yin pa'i phyir rdul phra rab dag yin pa'am der snang ba'i shes pa skye ba'i phyir de [S.86a7] 'dus pa yin par rtog grang na / (凡そ、「眼識などの所縁は外界のものである」と主張する者たちは、「それ(=識)の原因であるから、極微[が所縁]である」もしくは「それとして顕現する知が生じるから、集合したそれ(=極微)である」と考えるとすれば、……。) ; 「それとして顕現する」とは、知がその形相をもって顕現することをいう。

ことを述べている。確かに唯識説に立つ場合でも、「能取形相」(grāh-akākāra) すなわち知そのものとしての形相と、「所取形相」(grāhyākāra) すなわち知に現れる対象としての形相という知の二形相は認められるが、唯識説においては「所取形相」ではなくて「能取形相」がプラマーナとされる。これは上の論述と矛盾するように見える。外界実在論に立つ場合と唯識説に立つ場合とでは、外界対象の有無ということだけではなくて、このような相異点も生じるのである。

しかし、外界実在論に立つ場合でも、この「知が対象の形相をもつことがプラマーナである」ということは常に妥当するのではない。それは知が外界に実在するものを対象とする場合に限られる。よく知られているように、ディグナーガやダルマキールティは「貪などの自己認識」や「楽などの自己認識」というものを知覚の中に含める。従って、「水が欲しい」とか「この音楽は楽しい」というとき、その「欲しい」とか「楽しい」ということも認識されているのだが、それらは知の外にあるものを対象としているのではなく、知自身が認識されているのであり、知の自己認識に他ならない。この場合には、唯識説に立つ場合と同様に(三)の「知の能取形相」がプラマーナとされる。<sup>14</sup>

つまり、外界実在論に立つ場合にも唯識説との共通点が含まれて来ることになるのであり、唯識説に立つ場合でも、外界実在論に立って述べられたことのすべてが一挙に否定されるのではない。

### 3. 唯識説の場合

少なくともデーヴェーンドラブッディ、及びシャーキャブッディの注釈によれば、PV III 320 以降においてダルマキールティは唯識説に立って論述していることになる。ダルマキールティ自身の唯識説がどのようなものであったかについては議論のある所であるが、この部分に対するデーヴェーンドラブッディ、及びシャーキャブッディの注

---

<sup>14</sup> Cf. PV III 363, 364 ; 戸崎宏正『仏教認識論の研究』下、東京、大東出版社、1985 (以下、戸崎 [1985]), pp. 48-50

〈甲〉に相似する知が限定的に生起するのであろうか。というのも、対象との相似がなければ、知は限定をもたないのだから、それ（＝知）を生ぜしめる潜勢力も無限定である。だから、どうしてこれ（＝無限定の潜勢力）によってそれぞれの対象について知が区別されるであろうか〔、区別されないのである〕。<sup>13</sup>

デーヴェーンドラブッディは、知が潜勢力を生ぜしめ、その潜勢力からまた知が生じて来るということまでをも否定しているのではない。しかし、知に対象の形相がなく、従って他の知と区別されて限定されていないならば、それから生じる潜勢力も限定がなく、限定されていない潜勢力から生じた知もまた限定されないから、潜勢力は知を限定するものではない、と述べているに過ぎない。従って、知が潜勢力から生じることを認める場合でも、知を相互に区別するものは対象の形相だということである。しかし、後で見るように、唯識説に立って論じる際に、デーヴェーンドラブッディは、ある特定の知がある特定の潜在印象のみを覚醒させるのであって、すべての潜在印象を覚醒させることはないから、外界対象に依拠しなくとも知は限定され得るという

<sup>13</sup> PVP [D218b6-a2, P256b4-7] : gal te 'dus byas yin phyir na / shes pa las skyes pa shes pa'i rgyu 'dus byas [D218b7] pa las don so so la shes pa res 'ga' ba yin no zhe na / **de dang** / de [P256b5] **min te** / 'di ltar / **de dngos min te gzhag med phyir** / gal te yul 'di'i rnam pa la // shes pa 'di rjes su byed pa skye ba de'i tshe yul gang gi rnam pa la rjes su byed pa'i shes pa de ni 'dra ba de las 'di'i 'di yin [D219a1] no [P256b6] zhes nges pa thob par 'gyur ro / / de bas na de 'dra ba'i rnam pa can gyi shes pa skyes pas 'dus byas pa nges par byed pa de 'dra ba skyed par byed na / 'dus byas pa gang las de 'dra ba'i shes pa nges par 'byung bar 'gyur / 'di ltar [P256b7] don dang 'dra ba med na shes pa nges pa med [D219 a2] pa'i phyir de skyed par byed pa'i 'dus byas pa yang ma nges pa yin pa de ltar na gang gis na 'di las don so sor shes pa tha dad pa yin /

判断が可能となる。

ところでこのような考え方に立ってダルマキールティが批判するものの中に「潜勢力」(saṃskāra) というものも挙がっている<sup>11</sup>。ダルマキールティはこの潜勢力をプラマーナとする見解を次のように批判している。

もし「潜勢力から〔知は限定される〕」というならば、そうではない。〔知が〕その形相をもたないときは、それ〔潜勢力〕もまた確立がないから。(PV III 317cd)<sup>12</sup>

これだけではここで「潜勢力」と呼ばれているものが何を指しているのかは不明瞭であるが、次のデーヴェンドラブッディの注釈に従えば、それは唯識説における「潜在印象」(習気, vāsanā) と同じようなものであると考えることが出来る。

「もし「潜勢力から〔知は限定される〕」というならば」(saṃskārāc ced)〔、すなわち〕知から生じた知の原因である潜勢力によって、それぞれの対象に対して、知は〔常に無差別にあるのではなく〕限定的である、というならば、「それも」(PV III 317d' : tasyāpi) そうでは「ない」(na)。というのも、「その形相をもたないときは、確立がないから」(atādrūpye avyavasthiteḥ)。もし、この対境の形相に対してこの知が相似して生じるならば、その場合、対境〈甲〉の形相に相似するその知はその相似によって「これはこの〔対境〈甲〉の知〕である」という限定を得ることになる。従って、〈甲〉に相似する形相をもつ知が生じたことによって、潜勢力が限定を生ぜしめるのであれば、何如なる潜勢力から

---

<sup>11</sup> PV III 317 ; cf. 戸崎宏正『仏教認識論の研究』上、東京、大東出版社、1979 (以下、戸崎 [1979]) pp. 409-411

<sup>12</sup> saṃskārāc ced atādrūpye na tasyāpy avyavasthiteḥ // ; cf. 戸崎 [1979] p. 410

「知の能取形相」とに関しては、(一)とは異なり、(二)は外界実在論の場合にのみ妥当し、他方(三)は唯識説において妥当するものとされる。

## 2. 外界実在論の場合

外界実在論に立つ場合には(二)の「知が対象の形相をもつこと」がプラマーナとされる。ダルマキールティは外界実在論を前提にしてPV III 301-319において正しい知を成立させる「能成者」(sādhana)は何かを考察し、「知が対象の形相をもつこと」以外は正しい知の能成者、すなわちプラマーナではないとして、他派が主張するプラマーナを否定する。その際に、ダルマキールティは前提として知を「行為」とみなしている<sup>9</sup>。つまり「知が成立する」ということは知という「行為」が成し遂げられることであって、その点から知は「結果」ともされる。知が「行為」である以上、行為を成し遂げるための「手段」が必要となり、また、行為が直接及ぼされる所の「対象」もまた必要になる。そして、外界実在論に立つ場合、結果する行為は「外界の対象が知られること」に他ならない。

また、もう一つの重要な点は、当の知を他の知から区別することを可能にするもの、それが知の「能成者」であって、知を生じさせるものではないということである<sup>10</sup>。従って、知が成立するということは、その知が他の知から区別され得るための特殊性をもつということである。如何なる知であっても、また何を対象にしようとも、知であることには変わりがないから、知を相互に区別する根拠は、当の知の対象の形相に求められねばならない。対象の形相を自身の中にもつからこそ、別のものを対象とし、異なる対象の形相をもつ知からの区別が可能となる。そのように他の知から区別されるから、青に対する知は黄に対する知などから区別され、「黄だ」などではなくて「青だ」という

---

<sup>9</sup> PV III 301

<sup>10</sup> PVP [D216a3, P253b1-2] : bskyed par bya ba dang skyed par byed pa'i dngos pos ni [P253b2] ma yin te /

これはプラマーナの真理性 (prāmāṇya) に関連する記述であるが<sup>7</sup>、「プラマーナによって決定された対象である対境がその後のプラマーナの原因であるということ」云々は、例えば火が知覚 (pratyakṣa) される場合、その知覚が「欺かないもの」であるかどうかは、その後の別のプラマーナによって知られるということである。火を知覚した後に、火を求めて行動する者が、その後にその火の「焼く」であるとか「煮る」という火の作用を知覚したとき、先の知覚が正しいプラマーナ、すなわち「欺かない」ものであったことが知られるということである。その際、先に知覚された火が、後に知覚された火や、その火の作用の原因であること、それが「欺かないこと」だと述べているのである<sup>8</sup>。しかしこれは外界实在論に立つ説明である。それでは唯識説においてはこの「欺かない」というプラマーナの定義は妥当しないのかということ、そうではない。唯識説においても妥当するのだとデーヴェンドラブッディは述べている。唯識説に立つ場合は、知が生じる原因を外界の対象に求めることは出来ない。従って、望まれているものとして顕現する知の原因は結局、知以外にない。しかしその場合でも、望まれているものが顕現することに関してプラマーナである知が「欺かない」という点ではちがいが無いのである。外界实在論に立とうとも唯識説に立とうとも、欲求されている対象作用 (arthakriyā) が実際に経験されることに関してちがいが無い以上、「欺かないもの」というプラマーナの定義は妥当するのである。

しかし、(二) と (三) すなわち「知が対象の形相をもつこと」と

---

<sup>7</sup> すでにデーヴェンドラブッディからシャーキャブッディの間にもこの真理性についての解釈に発展が見られる。cf. 稲見 [1993] ; またこの問題はこの両者において解決した訳ではなく、さらに理論の深化が続いたようである。この点に関するブラジュニャーカラグプタの特異な解釈については、小野基氏による「ブラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義の解釈—ブラジュニャーカラグプタの真理論—」(『印度学仏教学研究』42-2, 東京, 日本印度学仏教学会, 1994, pp. (198)-(205)) を参照。

<sup>8</sup> Cf. PVP [D2a2-b3, P2b2-7]

の三つである。<sup>5</sup>

このうち（一）はダルマキールティによるプラマーナの定義として有名であるが、これは外界实在論においても唯識説においても妥当するものだとされる。これについてはデーヴェンドラブッディによって次のように述べられている。

ある者〈甲〉にとって外界の対象が存在しない場合、その〈甲〉にとっては、プラマーナによって決定された対象である対境が、その後のプラマーナの原因であるということが欺かないことなのではない。そうではなくて、望まれた通りの対象作用の顕現をもつ知の原因であること〔が欺かないこと〕である。あるもの〈甲〉にそれ（＝欺かないこと）がないならば、その〈甲〉はプラマーナではない。そうであるから〔外界に対象が存在する場合でも、そうでない場合でも〕矛盾はない。外界の対象が存在しないとしても、そのような顕現をもつ知の生起があるものこそが人間の目的対象である。だから、外界实在論者と〔それに〕反する〔唯識〕論者にとって、勝義として、〈欺かないこと〉に何のちがいがもない。<sup>6</sup>

<sup>5</sup> （一）については不明確な点もあるが、（二）、（三）についてはディグナーガもそのように述べている。cf. PS I 9cd' : viṣayābhāsataivāsyā / pramāṇam ; PS I 10 : yadābhāsaṃ prameyaṃ tat pramāṇaphalate punaḥ / grāhakākārasaṃvittiyos trayaṃ nātaḥ pṛthak kṛtam //

<sup>6</sup> Cf. 稲見 [1993] p. 92 ; PVP [D2b7-3a1, P3a5-8] : gang gi phyi rol gyi don med pa de'i tshad mas yongs su bcad pa'i don gyi yul ni tshad ma phyi ma de'i rgyu nyid yin par mi slu ba ma yin gyi / 'on kyang ji ltar 'dod pa'i don byed par snang ba can gyi shes pa rgyu nyid yin no // gang la de med pa de ni tshad ma ma yin pa de ltar na 'gal med do // phyi rol gyi don yod pa ma yin na yang de ltar snang ba can gyi shes pa skye ba can nyid ni skyes bu'i don yin pa de ltar na / phyi rol gyi don yod pa dang / cig shos smra ba dag gi don dam par mi slu ba la bye brag ci yang med do //

でもないと思う。しかし、まずは仏教認識論の中でこの二つの立場がどのように取り扱われているのかについて若干の記述について確認することにする。

以上を目的として、本稿では『プラマーナヴァールティカ』(*pramāṇavārttika*, 以下 PV) に対する最初期の注釈であるデーヴェーンドラブッディの『プラマーナヴァールティカパンジカー』(*pramāṇavārttikapañjikā*, デルゲ版 (D) No.4217, Che ; 北京版 (P) No.5717 (b), Che, 以下 PVP)、及び、PVP に対する復注であるシャーキャブッディの『プラマーナヴァールティカティーカー』(*Pramāṇavārttikaṭīkā*, デルゲ版, No.4220, Ñe ; 北京版, No.5718, Ñe, 以下 PVT) の中で知覚説を扱う部分を中心に見ることとする<sup>3</sup>。

### 1. 三種の異なる「プラマーナ」の意味内容

ダルマキールティは「プラマーナ」に対して相異なる三種の意味内容を与えていると考えられる。それは、

- (一) 欺くことがなく、未知の対象を知らしめる知、<sup>4</sup>
- (二) 知が対象の形相をもつこと、
- (三) 知の能取形相、

---

<sup>3</sup> 岩田孝氏による「Sākyamatiの知識論」(早稲田大学哲学会編『PHILOSOPHIA』69, 東京, 早稲田大学哲学会, 1981, pp. 143-164), 同じく「Devendrabuddhiの知識論」(仏教学研究會編『仏教学』13, 東京, 山喜房仏書林, 1982, pp. (1)-(36))において、シャーキャブッディ、デーヴェーンドラブッディの唯識説に関する研究が、特に「多様不二 (citrādvaita) 説」を中心になされている。

<sup>4</sup> PV II 1, 5 ; このプラマーナの定義、特に「欺かないもの」(avisamvādin) という点についてのデーヴェーンドラブッディ、及びシャーキャブッディの解釈については、稲見正弘氏による「仏教論理学派の真理論—デーヴェーンドラブッディとシャーキャブッディ—」(『渡邊文麿博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教』下, 京都, 永田文昌堂, 1993, pp. 85, 118) (以下, 稲見 [1993]) に訳出されて研究されている。



rākārajñānavāda) に対して、知は対象の形相 (ākāra) を伴うとするものである。この「有形相認識論」は仏教認識論に一貫して見られるものである。しかしそれとはまた別に、仏教認識論には外界实在論に立つ理論と、唯識性 (vijñaptimātratā) を認める立場に立つ理論とが並存している観がある。そして両者それぞれの立場に立つ場合に、当然のことながら認識論上の様々な相違点が生じる。外界対象の有無という点は勿論であるが、その他にも、例えば仏教認識論・論理学において最も重要な主題であるプラマーナ (pramāṇa) すなわち認識手段に関する考察においても、外界实在論における場合と唯識説に立つ場合とでは相異が生じる。つまり、外界实在論に立つ場合、そして対象が外的なものの場合には知が「対象の形相をもつこと」(arthasārūpya) がプラマーナとされる。それに反して唯識説に立つ場合には知の「能取形相」(grāhakākāra) がプラマーナであるとされる。このように相互に異なる二つの立場が一つの知識体系の中ではたして矛盾なく共存出来るものなのであろうか。これは従来より関心を集める問題でもあり<sup>2</sup>、また、筆者の如き者が本稿において解答を与えられるような問題

<sup>1</sup> Cf: 梶山雄一『仏教における存在と知識』, 紀伊國屋書店, 1983

<sup>2</sup> 外界实在論と唯識説とは、そのままではあからさまな矛盾であるといわざるを得ない。しかしこの矛盾は「世俗」(saṃvṛti) と「勝義」(paramārtha) といういわば次元を異にする複数の真理を認めることも合わせて考察される必要がある。仏教論理学派における「世俗・勝義」については、松本史朗氏による「佛教論理学派の二諦説 (上)」(南都佛教研究會編『南都佛教』45, 奈良, 東大寺図書館, 1980, pp. 101-118), 「同 (中)」(『同』46, 1981, pp. 39-54), 「同 (下)」(『同』47, 1981, pp. 44-62) においてデーヴェーンドラブッディ、及びシャーキャブッディの見解が挙げられている。また、稲見正弘氏による「astu yathā tathā」(『戸崎宏正博士古稀記念論文集 インドの文化と論理』, 九州大学出版会, 2000, pp. 359-397) は PV III 4 中の「astu yathā tathā」という文言に対するデーヴェーンドラブッディ、シャーキャブッディ、プラジュニャーカラグプタ、ジュニャーナシュリーミトラの解釈が検討され、彼らの「世俗・勝義」に関する見解が紹介されている。

# 仏教認識論において前提される認識の構造

— 外界实在論と唯識説 —

龍谷大学大学院博士後期課程三年 吉田 哲

## 【要旨】

仏教論理学派の認識論中には、外界实在論に立った理論と唯識説に立った理論とが並存する。両者は必ずしも常に整合的ではなく、時として相反する。ダルマキールティの『プラマーナヴァールティカ』知覚章の構成は、この両立場が錯綜して一見複雑なものとなっている。これに対する注釈者デーヴェンドラブッディ、及びその復注者シャーキャブッディの解釈をみると、確かに外界实在論と唯識説が並存していることが理解される。これらの中で述べられている外界实在論的記述と唯識的記述とに備わるいくつかの特徴を見ると、彼らとその論述の前提としているこれら相反する認識の構造を再確認することが出来る。特に外界实在論に立つ場合と唯識説に立つ場合とは、それぞれの場合に「プラマーナ」とされるもの、すなわち前者においては「知が対象形相をもつこと」、後者においては「知の能取形相」がプラマーナとされる点は特に大きな相異と言えよう。

## 0. はじめに

仏教認識論・論理学はディグナーガの『プラマーナサムッチャヤ』(Pramāṇasamuccaya, 以下 PS) によって本格的な知識体系へと踏み出し、ダルマキールティによって理論的に整備された。その中には特徴的な認識論が見られる。それは所謂「有形相認識論」(sākārajñānavāda) といわれるものである<sup>1</sup>。知は無色透明なレンズのようにその本性を変化させることなく対象を認識するという「無形相認識論」(ni

生が3学部合計で25.7%から43.5%に増加している。本学では入学直後に新入生を対象とした本願寺参拝を行っているが、本願寺到着までのバスの中で、仏教行事の意味などを説明し、御影堂での入学奉告式に参加させており、宗教学の授業でも、繰り返し仏教行事の意義についての理解を促している。授業を受けて、宗教の必要性について認識する学生が増加したことは、特に仏教行事に参加した後に、その意義について授業で理解を深め、感動を覚えた学生が増加したことと関連があることを意味しよう。

授業中に感想を求めると、当初は「宗教は何でも同じだ」「宗教は怖い」という考えをもつ学生も多かったのだが、宗教にはさまざまなものがあり、古来から人類が培ってきたものであるということを説明し、特に仏教精神についての理解が深まると、「信者にはならないかもしれないが、仏教精神を学ぶことによって、人生に対する態度が変わった」「仏教精神を胸に自身をふり返って生きていきたい」などの感想を寄せてくれる学生が多くなることも事実である。

また、建学の精神や授業内容の理解度調査では、理解の不十分な項目も数ヶ所にわたって発見できた。これからの課題である。

\*本研究は、浄土真宗本願寺派教学助成財団教学研究資金によるものである。謝意を表す。

\*宗教学アンケートの設問作成に際して、龍谷大学社会学部 舟橋和夫先生の助言をいただいた。謝意を表す。

回答の変化を見ると以下のような結果が得られた。

設問15	第1回授業 (①+②)	最終回授業 (①+②)
教 育 学 部	22名/79名	23名/79名
外 国 語 学 部	7名/32名	5名/32名
短 期 大 学 部	16名/80名	9名/80名
3 学 部 合 計	45名/191名	37名/191名

設問15	第1回授業 (①+②)	最終回授業 (①+②)
教 育 学 部	27.8%	29.1%
外 国 語 学 部	21.9%	15.6%
短 期 大 学 部	20.0%	11.3%
3 学 部 合 計	23.6%	19.4%

設問22	第1回授業 (①+②)	最終回授業 (①+②)
教 育 学 部	21名/79名	30名/79名
外 国 語 学 部	9名/32名	15名/32名
短 期 大 学 部	19名/80名	38名/80名
3 学 部 合 計	49名/191名	83名/191名

設問22	第1回授業 (①+②)	最終回授業 (①+②)
教 育 学 部	26.6%	38.0%
外 国 語 学 部	28.1%	46.9%
短 期 大 学 部	23.8%	47.5%
3 学 部 合 計	25.7%	43.5%

まず、設問15に関しては、第1回授業と最終回授業との比較において、短期大学部では仏にたよって物質的な利益を期待する学生が若干減少するという傾向が見られるが、教育学部と外国語学部、さらには3学部合計のデータでは大きな変化はみられなかった。

しかし、設問22に関しては、寺院の行事に参加して感動を覚えた学

でも浄土真宗以外の宗派の信者の方もいらっしゃる。本学には、そうした方々に、仏教、特に浄土真宗への信仰を勧めたりする意図はない。

大学は、学問研究の場であることが基本だが、人間としての理想のあり方を学ぶ情操教育をも重視し、その方向性の指針として仏教の精神を尊重することが、本学の目指す教育なのである。

仏教の精神を具体的にあらわす言葉として、本学では聖徳太子の十七条憲法の第1条の「以和為貴（和をもって貴しとなす）」や、「平等」「寛容」「利他」を掲げている。

これらは、自己中心的で頑ななところを離れた「やわらかなところ」（以和為貴）で、あらゆる生命には、個々に性質の差のあることを認めつつ（寛容）、みなかけがえのない尊いいのちをもつこと（平等）に気づいて、他者のための行い（利他）に励むことこそ、人間として目指すべき理想であるといった精神である。

本学の宗教行事では、こうした精神を聞いて自身を省みつつ、理想を追求する積極的な心を養うこと、即ち聞法（もんぽう 教えを聞く）の精神を大切にしているのである。

今回の「宗教学」受講生に対する「建学の精神」の理解度調査では、授業内容の理解度を測るとともに、学生の宗教観についての調査も行った。その結果、授業内容の理解度の深まりによって、宗教観にも変化のあることが判明した。

設問2「人類にとって、宗教は必要であると思いますか」について、第1回授業と最終回授業について回答の変化を分析する。無回答や欠席者がいたため、教育学部では398名、外国語学部では113名、短期大学部では222名、3学部合計733名について比較できた。

第1回授業で、③あまりそう思わない、④そう思わないと答えた学生のうち、最終回授業での回答が、①そう思う、②どちらかといえばそう思うに変化した学生は、教育学部79名（19.8%）、外国語学部32名（28.3%）、短期大学部80名（36.0%）、3学部合計191名（26.1%）であった。

そのうち、設問15、「仏にたよれば試験に受かったり、お金が儲かったり、病気が治ったりするような善いことが起きる」についてと、設問22、「寺院の行事や儀式に参加すると強い感動を受ける」についての

本学では、仏教精神である建学の精神をあらわす言葉として、「以和為貴」「平等」「寛容」「利他」を用いているので、②、④、⑥、⑧、⑩の回答を期待していた。

最終回授業において、外国語学部ではすべて77%以上の回答があり、短期大学部でも80%以上の回答があった。教育学部では④⑥⑧の回答が増加しなかった点は反省点であるが、その後に実施した建学の精神についての論述を課した定期試験においては、80%以上の学生が②④⑥⑧⑩全ての項目について言及する解答を寄せていた。もう少し授業内での周知ができるよう課題としたい。

しかし、当初の目的はほぼ達成できたのではないかと考える。

28. 本学の入学式や、入学奉告本山参拝などでは仏教の儀式を取り入れています。参加した感想を書いて下さい。

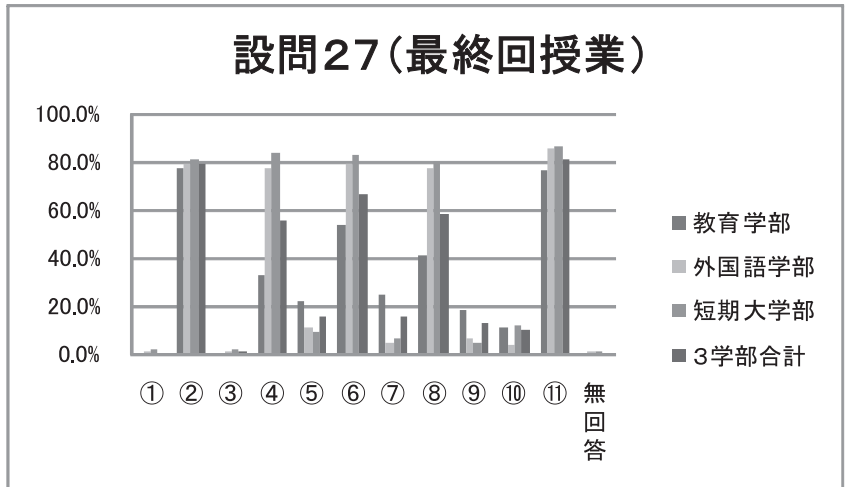
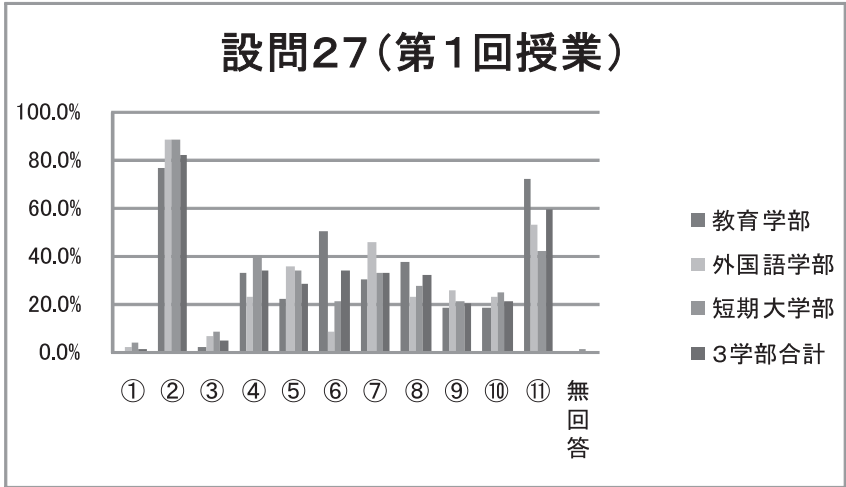
各学部共通して、第1回授業の感想では、「初めての経験だったので驚いた」「正座がきつかった」「あまり理解できなかった」「厳かな儀式に感動した」などの意見が見受けられた。最終回の授業の感想では、「不思議でしたがとても感動しましたし、鳥肌がたちました」「初めてこういう儀式に参加したが、経験できてよかったと思う」というものの他、「初めは驚いたが、宗教学を学んで建学の精神が分かり、行事の意味も理解できた」「最初はすごくびっくりしたけれど、仏教について知った今は、全く変に思わなくなりました。むしろ、今の自分を振り返れる仏教は、自分を成長させるためにいいものだと思います」等といった意見もあった。

## 結び

本学では、設立当初より仏教の儀式（特に浄土真宗の儀式）を取り入れてさまざまな行事を行い、必修授業「宗教学」を開講し、特に仏教精神についての理解を求めてきた。

しかし、本学の学生や教職員には、仏教徒でない方や、仏教徒であっ

設問27 (最終回授業)	⑨	⑩	⑪	無回答
教 育 学 部	18.9%	10.8%	77.0%	0.0%
外 国 語 学 部	6.7%	4.2%	85.8%	0.8%
短 期 大 学 部	4.8%	11.8%	86.9%	0.9%
3 学 部 合 計	12.7%	10.0%	81.4%	0.4%



設問27 (第1回授業)	①	②	③	④
教 育 学 部	0.0%	77.0%	2.0%	32.9%
外 国 語 学 部	2.3%	88.5%	6.9%	23.1%
短 期 大 学 部	3.7%	88.2%	9.0%	40.4%
3 学 部 合 計	1.5%	82.4%	5.0%	33.6%

設問27 (第1回授業)	⑤	⑥	⑦	⑧
教 育 学 部	21.8%	50.0%	30.0%	37.9%
外 国 語 学 部	36.2%	8.5%	45.4%	23.1%
短 期 大 学 部	34.3%	21.6%	32.7%	27.8%
3 学 部 合 計	28.1%	34.1%	33.4%	32.2%

設問27 (第1回授業)	⑨	⑩	⑪	無回答
教 育 学 部	18.8%	18.8%	71.8%	0.0%
外 国 語 学 部	26.2%	23.1%	53.1%	0.0%
短 期 大 学 部	21.2%	25.3%	42.4%	0.8%
3 学 部 合 計	20.8%	21.6%	59.4%	0.3%

設問27 (最終回授業)	①	②	③	④
教 育 学 部	0.0%	77.9%	0.5%	32.8%
外 国 語 学 部	0.8%	79.2%	0.8%	77.5%
短 期 大 学 部	1.7%	81.7%	1.7%	83.8%
3 学 部 合 計	0.7%	79.3%	0.9%	55.4%

設問27 (最終回授業)	⑤	⑥	⑦	⑧
教 育 学 部	21.8%	53.9%	25.0%	40.9%
外 国 語 学 部	10.8%	79.2%	5.0%	77.5%
短 期 大 学 部	9.2%	83.0%	6.6%	80.3%
3 学 部 合 計	16.2%	66.7%	16.2%	58.7%



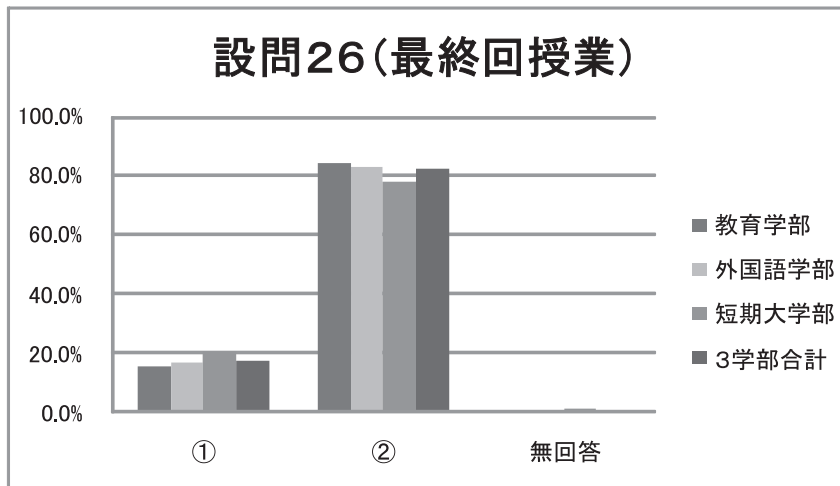
設問27 (第1回授業)	⑤	⑥	⑦	⑧
教 育 学 部	88	202	121	153
外 国 語 学 部	47	11	59	30
短 期 大 学 部	84	53	80	68
3 学 部 合 計	219	266	260	251

設問27 (第1回授業)	⑨	⑩	⑪	無回答
教 育 学 部	76	76	290	0
外 国 語 学 部	34	30	69	0
短 期 大 学 部	52	62	104	2
3 学 部 合 計	162	168	463	2

設問27 (最終回授業)	①	②	③	④
教 育 学 部	0	318	2	134
外 国 語 学 部	1	95	1	93
短 期 大 学 部	4	187	4	192
3 学 部 合 計	5	600	7	419

設問27 (最終回授業)	⑤	⑥	⑦	⑧
教 育 学 部	89	220	102	167
外 国 語 学 部	13	95	6	93
短 期 大 学 部	21	190	15	184
3 学 部 合 計	123	505	123	444

設問27 (最終回授業)	⑨	⑩	⑪	無回答
教 育 学 部	77	44	314	0
外 国 語 学 部	8	5	103	1
短 期 大 学 部	11	27	199	2
3 学 部 合 計	96	76	616	3



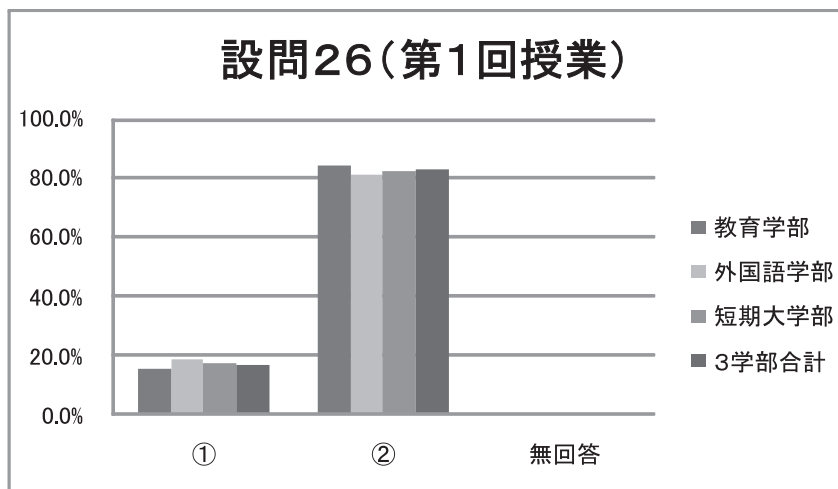
入学前の状況を尋ねているので、第1回授業と最終回授業で数値に大きな変化はない。本学では、大学案内のパンフレットやホームページにおいて「建学の精神」を表記しているが、認知度は低いようである。さらなる工夫が必要であろう。

27. 以下の言葉の中から、本学の建学の精神と関連するものを選んで○印をしてください。(複数回答可)
- ①キリスト教の精神    ②仏教の精神    ③神道の精神  
 ④平等    ⑤感謝    ⑥利他    ⑦精進    ⑧寛容    ⑨忍耐  
 ⑩平和    ⑪以和為貴(和を以て貴しとなす)

設問27(第1回授業)	①	②	③	④
教 育 学 部	0	311	8	133
外 国 語 学 部	3	115	9	30
短 期 大 学 部	9	216	22	99
3 学 部 合 計	12	642	39	262

設問26 (第1回授業)	①	②	無回答
教 育 学 部	15.6%	84.4%	0.0%
外 国 語 学 部	18.5%	81.5%	0.0%
短 期 大 学 部	17.6%	82.4%	0.0%
3 学 部 合 計	16.7%	83.3%	0.0%

設問26 (最終回授業)	①	②	無回答
教 育 学 部	15.4%	84.6%	0.0%
外 国 語 学 部	16.7%	83.3%	0.0%
短 期 大 学 部	20.5%	78.2%	1.3%
3 学 部 合 計	17.2%	82.4%	0.4%



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部83.7%、外国語学部79.2%、短期大学部81.6%であるのに対し、最終回授業では、教育学部76.5%、外国語学部84.1%、短期大学部85.6%と変化した。教育学部では減少し、外国語学部、短期大学部では若干の増加傾向を示した。教育学部では形式化する葬儀のあり方をやや批判的に講義したことが反映されたかも知れない。

外国語学部、短期大学部では、特に浄土真宗での葬儀の意義や、僧侶の役割について話をしたが、受講前から必要性を感じる学生が多いことが示されている。

### ③本学の建学の精神について

26. 入学前から岐阜聖徳学園大学の「建学の精神」について知っていましたか？あてはまるものに一つ○印をしてください。

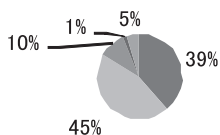
①知っていた

②知らなかった

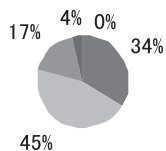
設問26（第1回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	63	341	0
外 国 語 学 部	24	106	0
短 期 大 学 部	43	202	0
3 学 部 合 計	130	649	0

設問26（最終回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	63	345	0
外 国 語 学 部	20	100	0
短 期 大 学 部	47	179	3
3 学 部 合 計	130	624	3

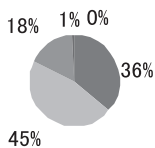
**教育学部  
(第1回授業)**



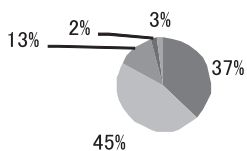
**外国語学部  
(第1回授業)**



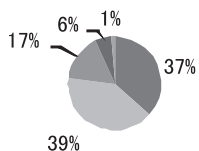
**短期大学部  
(第1回授業)**



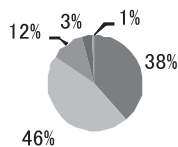
**3学部合計  
(第1回授業)**



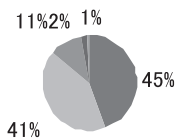
**教育学部  
(最終回授業)**



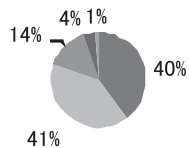
**外国語学部  
(最終回授業)**



**短期大学部  
(最終回授業)**



**3学部合計  
(最終回授業)**



- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

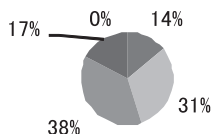
設問25 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	157	181	40	5	21
外 国 語 学 部	44	59	22	5	0
短 期 大 学 部	89	111	43	2	0
3 学 部 合 計	290	351	105	12	21

設問25 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	150	162	68	24	4
外 国 語 学 部	46	55	14	4	1
短 期 大 学 部	103	93	26	5	2
3 学 部 合 計	299	310	108	33	7

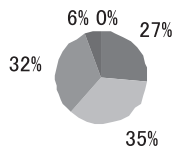
設問25 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	38.9%	44.8%	9.9%	1.2%	5.2%
外 国 語 学 部	33.8%	45.4%	16.9%	3.8%	0.0%
短 期 大 学 部	36.3%	45.3%	17.6%	0.8%	0.0%
3 学 部 合 計	37.2%	45.1%	13.5%	1.5%	2.7%

設問25 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	36.8%	39.7%	16.7%	5.9%	1.0%
外 国 語 学 部	38.3%	45.8%	11.7%	3.3%	0.8%
短 期 大 学 部	45.0%	40.6%	11.4%	2.2%	0.9%
3 学 部 合 計	39.5%	41.0%	14.3%	4.4%	0.9%

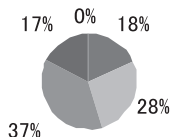
### 教育学部 (最終回授業)



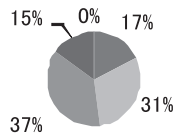
### 外国語学部 (最終回授業)



### 短期大学部 (最終回授業)



### 3学部合計 (最終回授業)



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部59.9%、外国語学部58.5%、短期大学部60.4%であるのに対し、最終回授業では、教育学部45.1%、外国語学部61.7%、短期大学部45.8%と変化した。教育学部では大きくポイントが減少した。神社参拝、占いなどの呪術、験担ぎやお守りお札に頼る行為の内実を原始宗教観との関連で説明した結果によるものと思われる。外国語学部はわずかに増加、短期大学部は減少傾向を示した。

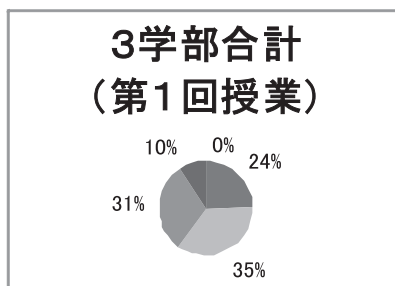
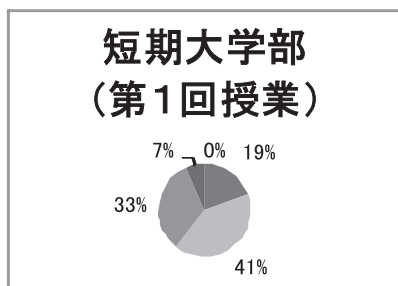
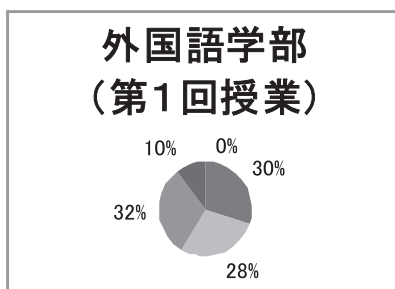
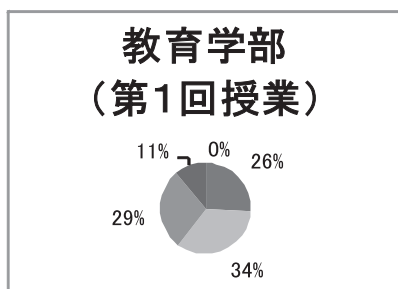
授業では、神社へ初詣に行ったりすることも宗教行為であることを説明したが、自覚的な信者であるものは少ないかもしれない。

これも、宗教理解が深まった学生であっても判断の困難な設問であったかもしれない。

25. 宗教的な儀式によって葬儀をすることは大切だと思う。あてはまらぬと思うものに一つ○印をしてください。

設問24 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	25.7%	34.2%	29.2%	10.9%	0.0%
外国語学部	30.0%	28.5%	31.5%	10.0%	0.0%
短期大学部	19.2%	41.2%	32.7%	6.9%	0.0%
3学部合計	24.4%	35.4%	30.7%	9.5%	0.0%

設問24 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	14.0%	31.1%	37.7%	17.2%	0.0%
外国語学部	26.7%	35.0%	32.5%	5.8%	0.0%
短期大学部	18.3%	27.5%	36.7%	17.0%	0.4%
3学部合計	17.3%	30.6%	36.6%	15.3%	0.1%





第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部90.9%、外国語学部89.3%、短期大学部78.8%であるのに対し、最終回授業では、教育学部82.1%、外国語学部83.4%、短期大学部89.5%と変化した。教育学部、外国語学部はわずかに減少、短期大学部はわずかに増加傾向を示した。

さまざまな宗教の教理を理解しているものは減少傾向にあるかと思われるが、依然として新興宗教が多く生まれている日本の現状も説明した。

宗教理解が深まった学生であっても判断の困難な設問であったかもしれない。

24. 日本人の多くは無宗教者だと思う。あてはまると思うものに一つ

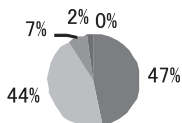
○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

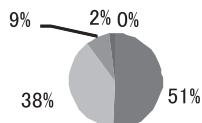
設問24（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	104	138	118	44	0
外 国 語 学 部	39	37	41	13	0
短 期 大 学 部	47	101	80	17	0
3 学 部 合 計	190	276	239	74	0

設問24（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	57	127	154	70	0
外 国 語 学 部	32	42	39	7	0
短 期 大 学 部	42	63	84	39	1
3 学 部 合 計	131	232	277	116	1

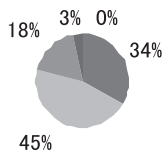
**教育学部  
(第1回授業)**



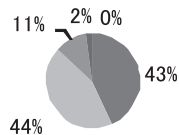
**外国語学部  
(第1回授業)**



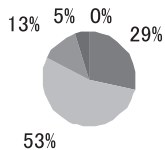
**短期大学部  
(第1回授業)**



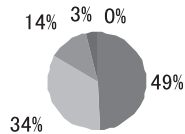
**3学部合計  
(第1回授業)**



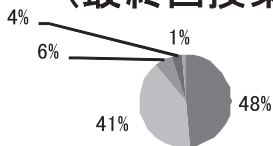
**教育学部  
(最終回授業)**



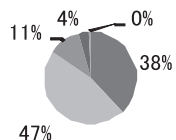
**外国語学部  
(最終回授業)**



**短期大学部  
(最終回授業)**



**3学部合計  
(最終回授業)**



③あまりそう思わない

④そう思わない

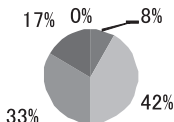
設問23 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	189	178	28	9	0
外 国 語 学 部	66	50	11	3	0
短 期 大 学 部	82	111	45	7	0
3 学 部 合 計	337	339	84	19	0

設問23 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	118	217	54	19	0
外 国 語 学 部	59	41	16	4	0
短 期 大 学 部	111	94	14	8	2
3 学 部 合 計	288	352	84	31	2

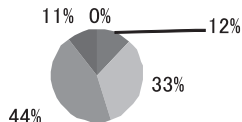
設問23 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	46.8%	44.1%	6.9%	2.2%	0.0%
外 国 語 学 部	50.8%	38.5%	8.5%	2.3%	0.0%
短 期 大 学 部	33.5%	45.3%	18.4%	2.9%	0.0%
3 学 部 合 計	43.3%	43.5%	10.8%	2.4%	0.0%

設問23 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	28.9%	53.2%	13.2%	4.7%	0.0%
外 国 語 学 部	49.2%	34.2%	13.3%	3.3%	0.0%
短 期 大 学 部	48.5%	41.0%	6.1%	3.5%	0.9%
3 学 部 合 計	38.0%	46.5%	11.1%	4.1%	0.3%

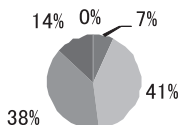
### 教育学部 (最終回授業)



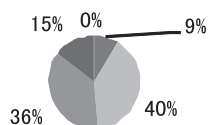
### 外国語学部 (最終回授業)



### 短期大学部 (最終回授業)



### 3学部合計 (最終回授業)



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部47.8%、外国語学部34.6%、短期大学部33.0%であるのに対し、最終回授業では、教育学部50.2%、外国語学部45.0%、短期大学部48.5%と変化した。教育学部、外国語学部、短期大学部とも若干ではあるが、増加傾向を示した。

観光等で寺院を訪れる学生は多いが、本学の入学奉告参拝のように、法話を聴聞するという経験がなかった学生から、「僧侶の方の法話に感動した」という感想が寄せられた。寺院の役割についての理解が深まったのかもしれない。

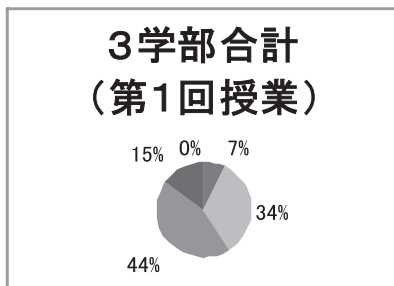
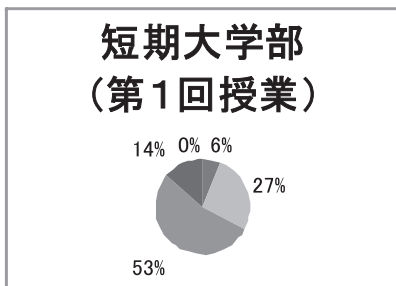
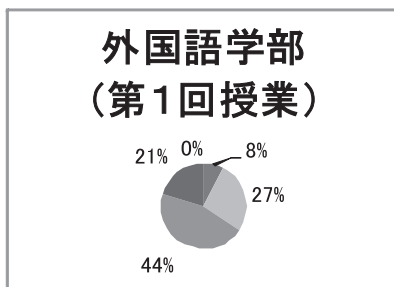
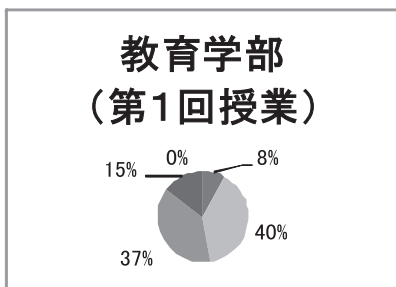
23. 科学が進歩しても、神や仏に対する信仰はなくなる。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

① そう思う

② どちらかと言えばそう思う

設問22 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	7.7%	40.1%	37.4%	14.9%	0.0%
外国語学部	7.7%	26.9%	44.6%	20.8%	0.0%
短期大学部	5.7%	27.3%	53.1%	13.5%	0.0%
3学部合計	7.1%	33.9%	43.5%	15.4%	0.0%

設問22 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	8.3%	41.9%	32.8%	16.9%	0.0%
外国語学部	11.7%	33.3%	44.2%	10.8%	0.0%
短期大学部	7.0%	41.5%	37.6%	13.5%	0.4%
3学部合計	8.5%	40.4%	36.1%	14.9%	0.1%



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部48.7%、外国語学部37.7%、短期大学部34.7%であるのに対し、最終回授業では、教育学部54.4%、外国語学部47.5%、短期大学部47.4%と変化した。教育学部、外国語学部、短期大学部とも増加傾向を示した。

授業中に、「これまで、何も考えずに神社へ行っていたが、これからは参拝の仕方が変わると思います」との感想を寄せた学生がいた。日本古来の宗教である神道についての理解が深まったと思う。

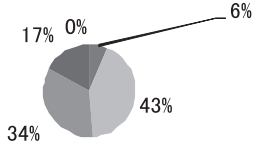
22. 寺院の行事や儀式に参加すると強い感動を受ける。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

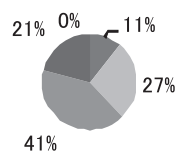
設問22（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	31	162	151	60	0
外国語学部	10	35	58	27	0
短期大学部	14	67	130	33	0
3学部合計	55	264	339	120	0

設問22（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	34	171	134	69	0
外国語学部	14	40	53	13	0
短期大学部	16	95	86	31	1
3学部合計	64	306	273	113	1

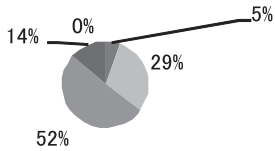
**教育学部  
(第1回授業)**



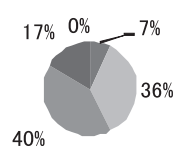
**外国語学部  
(第1回授業)**



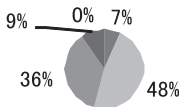
**短期大学部  
(第1回授業)**



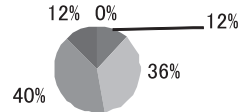
**3学部合計  
(第1回授業)**



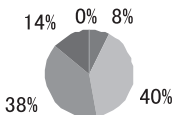
**教育学部  
(最終回授業)**



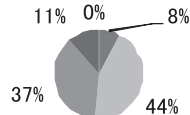
**外国語学部  
(最終回授業)**



**短期大学部  
(最終回授業)**



**3学部合計  
(最終回授業)**



設問21（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	26	171	135	70	0
外 国 語 学 部	14	35	54	27	0
短 期 大 学 部	13	72	127	33	0
3 学 部 合 計	53	278	316	130	0

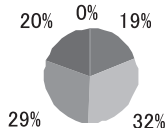
設問21（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	27	195	147	39	0
外 国 語 学 部	14	43	48	15	0
短 期 大 学 部	18	91	88	31	1
3 学 部 合 計	59	329	283	85	1

設問21（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	6.4%	42.3%	33.4%	17.3%	0.0%
外 国 語 学 部	10.8%	26.9%	41.5%	20.8%	0.0%
短 期 大 学 部	5.3%	29.4%	51.8%	13.5%	0.0%
3 学 部 合 計	6.8%	35.7%	40.6%	16.7%	0.0%

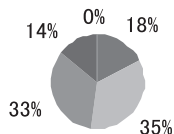
設問21（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	6.6%	47.8%	36.0%	9.6%	0.0%
外 国 語 学 部	11.7%	35.8%	40.0%	12.5%	0.0%
短 期 大 学 部	7.7%	39.7%	38.4%	13.5%	0.4%
3 学 部 合 計	7.8%	43.5%	37.4%	11.2%	0.1%



### 短期大学部 (最終回授業)



### 3学部合計 (最終回授業)



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部52.5%、外国語学部57.7%、短期大学部69.8%であるのに対し、最終回授業では、教育学部50.2%、外国語学部61.7%、短期大学部51.1%と変化した。外国語学部では増加傾向を示し、教育学部、短期大学部では減少傾向を示した。

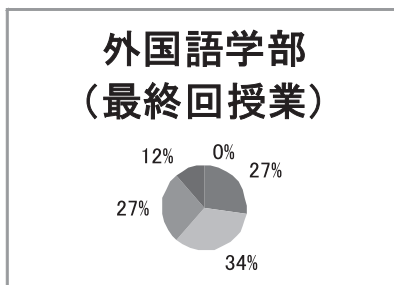
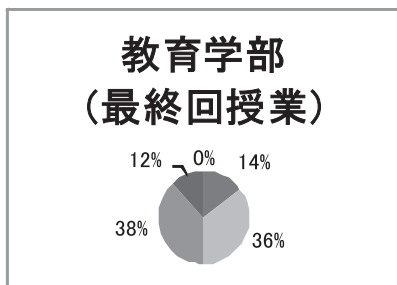
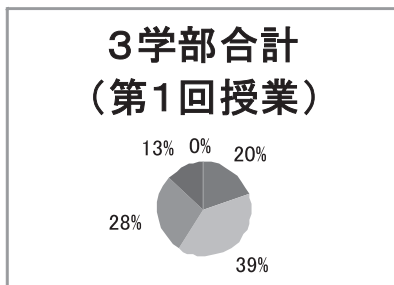
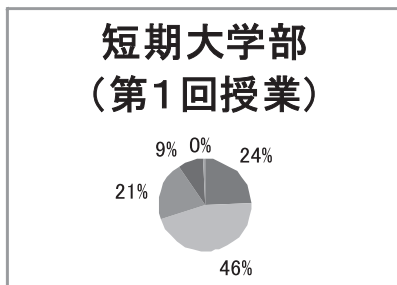
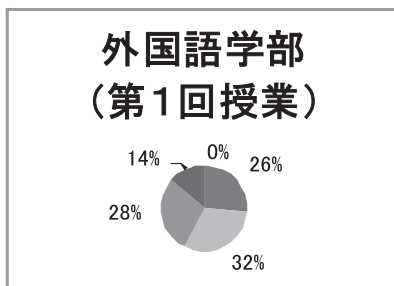
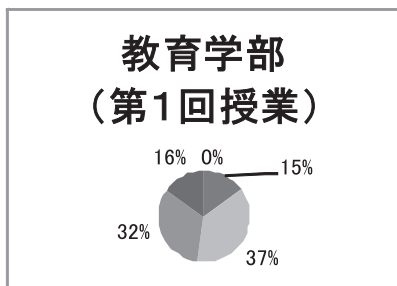
神・仏の存在論については、さまざまな解釈が存在すると思う。仏を変わらぬ真理と考える場合、物理的な力をはたらかせないものであるという信仰をもつ場合もあるかと思うが、神・仏は物理的な力をはたらかす場合もあるという信仰も存在しているのである。

時間の制約もあり、なかなか授業で充分には説明できないことである。学部によって回答に違いのものであることも当然であろうか。

21. 社社の行事や儀式に参加すると強い感動を受ける。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

設問20 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	14.2%	36.0%	38.0%	11.8%	0.0%
外 国 語 学 部	27.5%	34.2%	26.7%	11.7%	0.0%
短 期 大 学 部	19.2%	31.9%	28.8%	19.7%	0.4%
3 学 部 合 計	17.8%	34.5%	33.4%	14.1%	0.1%



の浄土信仰の意義を詳細に説明できたのに対し、短期大学部では不十分であったことが影響を与えたかもしれない。

20. 神や仏は目には見えないが、実際には存在する。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

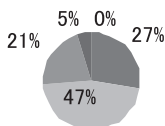
- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

設問20 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	61	151	129	63	0
外 国 語 学 部	34	41	37	18	0
短 期 大 学 部	59	112	51	22	1
3 学 部 合 計	154	304	217	103	1

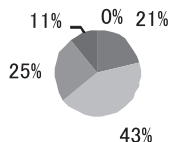
設問20 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	58	147	155	48	0
外 国 語 学 部	33	41	32	14	0
短 期 大 学 部	44	73	66	45	1
3 学 部 合 計	135	261	253	107	1

設問20 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	15.1%	37.4%	31.9%	15.6%	0.0%
外 国 語 学 部	26.2%	31.5%	28.5%	13.8%	0.0%
短 期 大 学 部	24.1%	45.7%	20.8%	9.0%	0.4%
3 学 部 合 計	19.8%	39.0%	27.9%	13.2%	0.1%

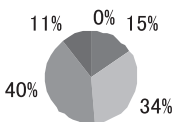
### 短期大学部 (第1回授業)



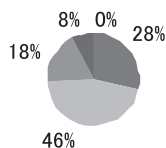
### 3学部合計 (第1回授業)



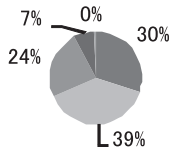
### 教育学部 (最終回授業)



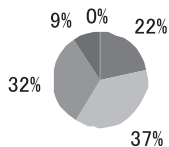
### 外国語学部 (最終回授業)



### 短期大学部 (最終回授業)



### 3学部合計 (最終回授業)



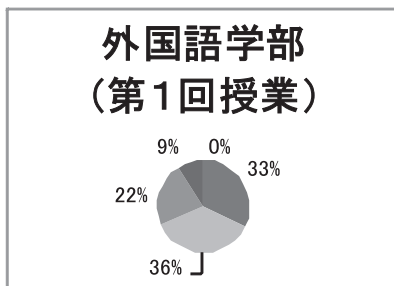
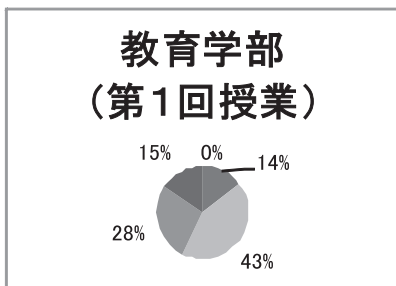
第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部57.2%、外国語学部68.5%、短期大学部73.8%であるのに対し、最終回授業では、教育学部48.8%、外国語学部74.1%、短期大学部68.6%と変化した。教育学部では減少し、外国語学部では増加傾向を示し、短期大学部では若干ではあるが減少傾向を示した。

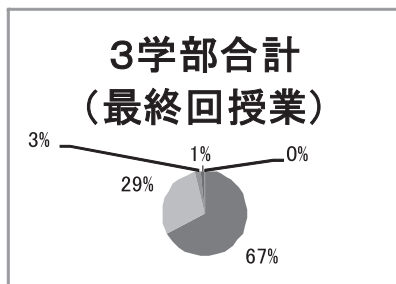
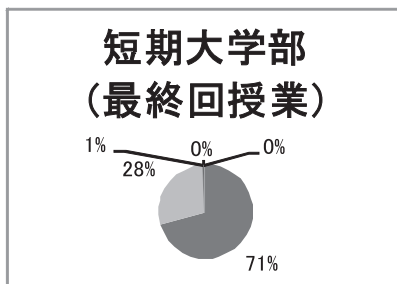
教育学部では縁起思想に基づく「いのち観」の説明に時間をかけた結果といえる。外国語学部については、キリスト教の天国信仰、仏教

設問19 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	62	137	164	45	0
外 国 語 学 部	34	55	22	9	0
短 期 大 学 部	68	89	55	16	1
3 学 部 合 計	164	281	241	70	1

設問19 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	14.4%	42.8%	27.5%	15.3%	0.0%
外 国 語 学 部	32.3%	36.2%	22.3%	9.2%	0.0%
短 期 大 学 部	27.3%	46.5%	21.2%	4.9%	0.0%
3 学 部 合 計	21.4%	42.9%	24.6%	11.0%	0.0%

設問19 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	15.2%	33.6%	40.2%	11.0%	0.0%
外 国 語 学 部	28.3%	45.8%	18.3%	7.5%	0.0%
短 期 大 学 部	29.7%	38.9%	24.0%	7.0%	0.4%
3 学 部 合 計	21.7%	37.1%	31.8%	9.2%	0.1%





第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部96.6%、外国語学部96.2%、短期大学部96.4%であるのに対し、最終回授業では、教育学部95.9%、外国語学部94.1%、短期大学部98.6%であった。おおむね変化は少ない。

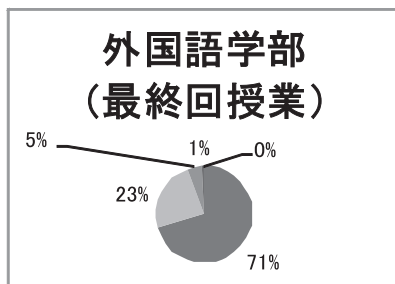
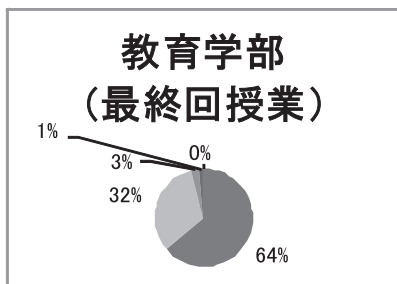
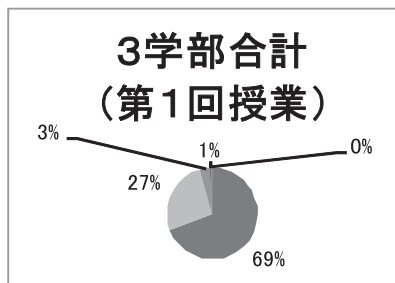
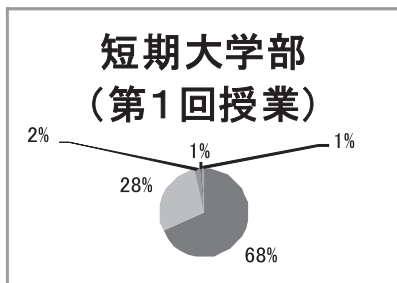
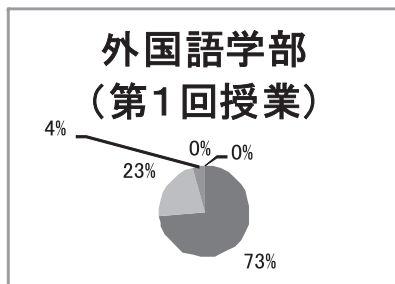
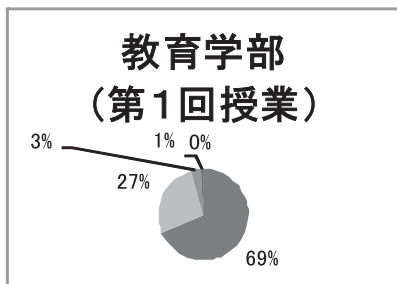
祖先崇拝を重視する日本人の傾向が学生にもあらわれているようである。

19. 死によってすべてが終わるのではなく、肉体は死んでも魂はほろびない。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

設問19 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	58	173	111	62	0
外 国 語 学 部	42	47	29	12	0
短 期 大 学 部	67	114	52	12	0
3 学 部 合 計	167	334	192	86	0

設問18 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	64.0%	31.9%	2.7%	1.5%	0.0%
外 国 語 学 部	70.8%	23.3%	5.0%	0.8%	0.0%
短 期 大 学 部	70.7%	27.9%	0.4%	0.4%	0.4%
3 学 部 合 計	67.1%	29.3%	2.4%	1.1%	0.1%



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部76.7%、外国語学部66.9%、短期大学部58.4%であるのに対し、最終回授業では、教育学部では76.2%、外国語学部60.0%、短期大学部54.1%と変化した。おおむね変化は少ない。

自然崇拝を感じる日本人の傾向が学生にもあらわれているようである。

18. 祖先を敬い、供養することは大事なことである。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

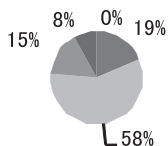
設問18（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	277	109	14	4	0
外国語学部	95	30	5	0	0
短期大学部	167	69	6	2	1
3学部合計	539	208	25	6	1

設問18（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	261	130	11	6	0
外国語学部	85	28	6	1	0
短期大学部	162	64	1	1	1
3学部合計	508	222	18	8	1

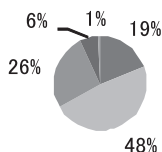
設問18（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	68.6%	27.0%	3.5%	1.0%	0.0%
外国語学部	73.1%	23.1%	3.8%	0.0%	0.0%
短期大学部	68.2%	28.2%	2.4%	0.8%	0.4%
3学部合計	69.2%	26.7%	3.2%	0.8%	0.1%



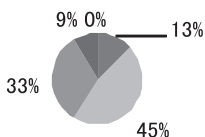
**教育学部  
(第1回授業)**



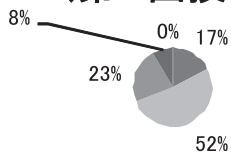
**外国語学部  
(第1回授業)**



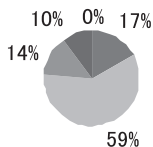
**短期大学部  
(第1回授業)**



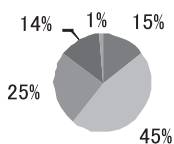
**3学部合計  
(第1回授業)**



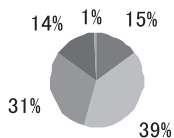
**教育学部  
(最終回授業)**



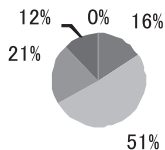
**外国語学部  
(最終回授業)**



**短期大学部  
(最終回授業)**



**3学部合計  
(最終回授業)**



④そう思わない

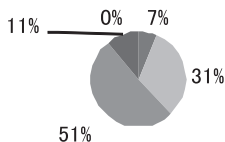
設問17（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	76	234	60	34	0
外 国 語 学 部	25	62	34	8	1
短 期 大 学 部	32	111	81	21	0
3 学 部 合 計	133	407	175	63	1

設問17（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	69	242	56	41	0
外 国 語 学 部	18	54	30	17	1
短 期 大 学 部	34	90	70	33	2
3 学 部 合 計	121	386	156	91	3

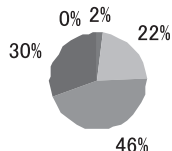
設問17（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	18.8%	57.9%	14.9%	8.4%	0.0%
外 国 語 学 部	19.2%	47.7%	26.2%	6.2%	0.8%
短 期 大 学 部	13.1%	45.3%	33.1%	8.6%	0.0%
3 学 部 合 計	17.1%	52.2%	22.5%	8.1%	0.1%

設問17（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	16.9%	59.3%	13.7%	10.0%	0.0%
外 国 語 学 部	15.0%	45.0%	25.0%	14.2%	0.8%
短 期 大 学 部	14.8%	39.3%	30.6%	14.4%	0.9%
3 学 部 合 計	16.0%	51.0%	20.6%	12.0%	0.4%

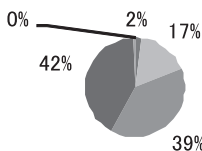
### 教育学部 (最終回授業)



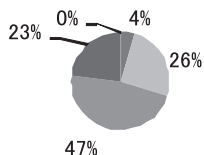
### 外国語学部 (最終回授業)



### 短期大学部 (最終回授業)



### 3学部合計 (最終回授業)



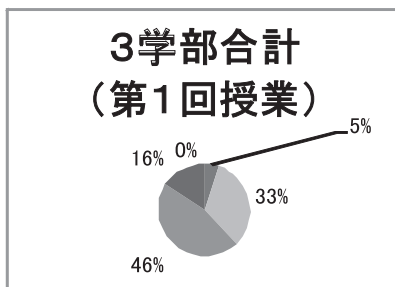
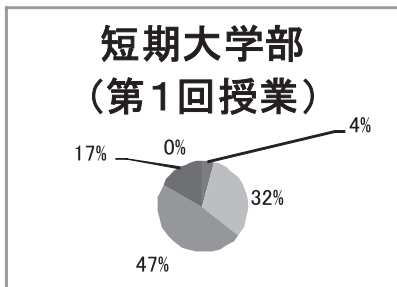
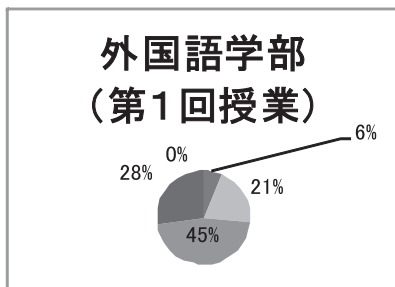
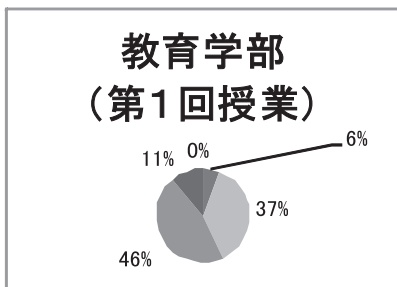
第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部では42.8%、外国語学部27.0%、短期大学部35.5%であるのに対し、最終回授業では、外国語学部24.2%、短期大学部18.8%と変化した。特に短期大学部が大きく減少している。教育学部では特に教員志望者が多いことも考慮して、他者依存的な姿勢、不合理な迷信的信仰によって物事を解決することについて批判的に捉えることの重要性を講義してきたが、あまりポイントが減少しなかったことは反省点である。

17. 高い山に登ったり、奥深い木立の中にいると、何か神々しいものにふれて心が清められるような気がする。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない

設問16 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	5.9%	36.9%	45.8%	11.4%	0.0%
外 国 語 学 部	6.2%	20.8%	45.4%	27.7%	0.0%
短 期 大 学 部	3.7%	31.8%	47.3%	17.1%	0.0%
3 学 部 合 計	5.3%	32.6%	46.2%	15.9%	0.0%

設問16 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	6.4%	31.4%	51.2%	11.0%	0.0%
外 国 語 学 部	1.7%	22.5%	45.8%	30.0%	0.0%
短 期 大 学 部	2.2%	16.6%	39.3%	41.5%	0.4%
3 学 部 合 計	4.4%	25.5%	46.8%	23.2%	0.1%



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部32.7%、外国語学部20.8%、短期大学部25.7%であるのに対し、最終回授業では、教育学部17.7%、外国語学部10.9%、短期大学部7.0%と変化した。教育学部、外国語学部、短期大学部とも大きく減少している。

仏教、特に浄土真宗では、自身の欲望をかなえようとする祈願は行っていないこと、仏を信仰することは、理想の心を学ぶことであると説明したことが影響しているように思われる。

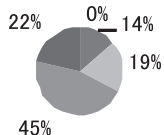
16. 迷っているときは、おみくじや占いなどに頼って決断するのが良い。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

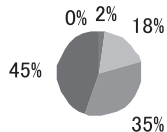
設問16（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	24	149	185	46	0
外国語学部	8	27	59	36	0
短期大学部	9	78	116	42	0
3学部合計	41	254	360	124	0

設問16（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	26	128	209	45	0
外国語学部	2	27	55	36	0
短期大学部	5	38	90	95	1
3学部合計	33	193	354	176	1

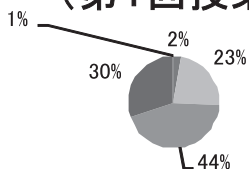
**教育学部  
(第1回授業)**



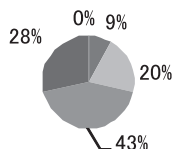
**外国語学部  
(第1回授業)**



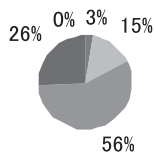
**短期大学部  
(第1回授業)**



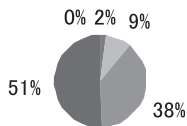
**3学部合計  
(第1回授業)**



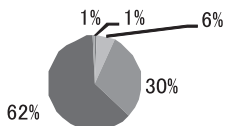
**教育学部  
(最終回授業)**



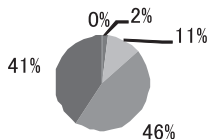
**外国語学部  
(最終回授業)**



**短期大学部  
(最終回授業)**



**3学部合計  
(最終回授業)**



③あまりそう思わない

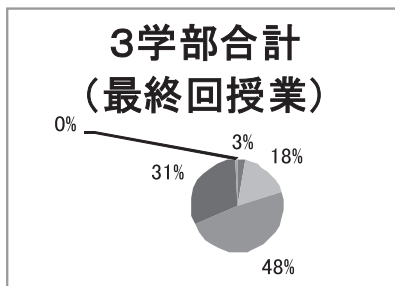
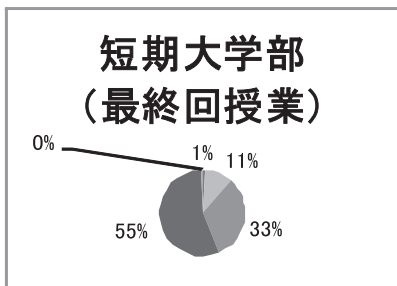
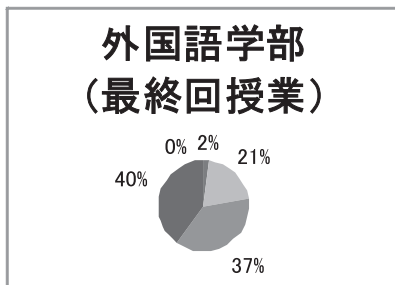
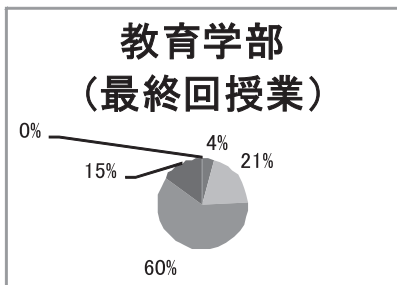
④そう思わない

設問15 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	56	76	184	88	0
外 国 語 学 部	3	24	45	58	0
短 期 大 学 部	6	57	108	73	1
3 学 部 合 計	65	157	337	219	1

設問15 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	11	61	231	105	0
外 国 語 学 部	2	11	46	61	0
短 期 大 学 部	2	14	69	142	2
3 学 部 合 計	15	86	346	308	2

設問15 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	13.9%	18.8%	45.5%	21.8%	0.0%
外 国 語 学 部	2.3%	18.5%	34.6%	44.6%	0.0%
短 期 大 学 部	2.4%	23.3%	44.1%	29.8%	0.4%
3 学 部 合 計	8.3%	20.2%	43.3%	28.1%	0.1%

設問15 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	2.7%	15.0%	56.6%	25.7%	0.0%
外 国 語 学 部	1.7%	9.2%	38.3%	50.8%	0.0%
短 期 大 学 部	0.9%	6.1%	30.1%	62.0%	0.9%
3 学 部 合 計	2.0%	11.4%	45.7%	40.7%	0.3%



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部42.8%、外国語学部25.4%、短期大学部31.4%であるのに対し、最終回授業では、教育学部24.7%、外国語学部22.5%、短期大学部11.4%と変化した。

外国語学部では若干の減少、教育学部や短期大学部では大きく減少している。

祈願とは、変わらぬ存在である神に、欲望充足、願望実現の決意を表すものであるという意もあると説明したことが影響を与えたかもしれない。

15. 仏にたよれば試験に受かったり、お金が儲かったり、病気が治ったりするような善いことが起きる。あてはまるものと思うものに一つ○印をしてください。

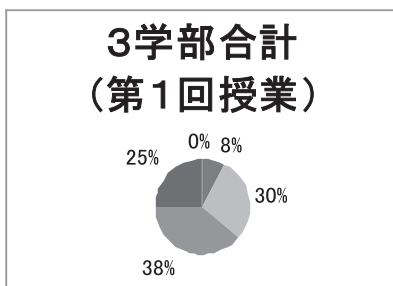
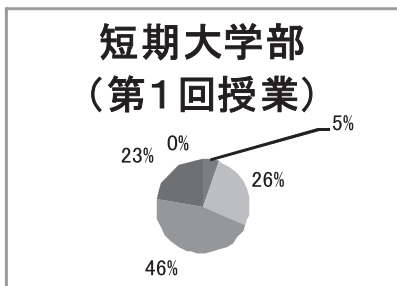
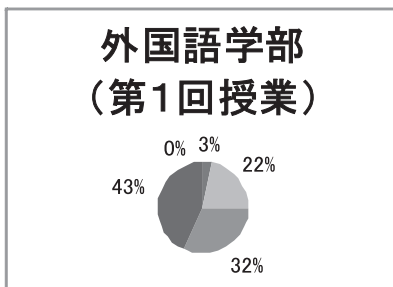
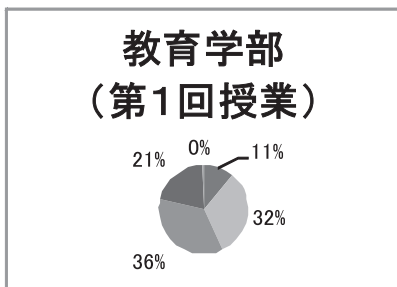
① そう思う

② どちらかと言えばそう思う



設問14 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	10.9%	31.9%	35.9%	21.0%	0.2%
外 国 語 学 部	3.1%	22.3%	31.5%	43.1%	0.0%
短 期 大 学 部	5.3%	26.1%	45.7%	22.9%	0.0%
3 学 部 合 計	7.8%	28.5%	38.3%	25.3%	0.1%

設問14 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	3.9%	20.8%	60.0%	15.0%	0.2%
外 国 語 学 部	1.7%	20.8%	37.5%	40.0%	0.0%
短 期 大 学 部	0.9%	10.5%	32.8%	55.5%	0.4%
3 学 部 合 計	2.6%	17.7%	48.2%	31.2%	0.3%



第1回授業では、そう思う学生（①②の合計）は、教育学部では56.2%、外国語学部57.0%、短期大学部55.9%であるのに対し、最終回授業では、教育学部91.2%、外国語学部82.5%、短期大学部85.6%と変化した。各宗教で説かれる理想の人物像の説明や、各民族の思考方法に宗教が密接に影響を与えていることを説明したことが影響しているように思われる。尚、こうした変化の要因については、結びで考察をした。

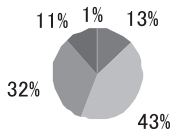
14. 神にたよれば試験に受かったり、お金が儲かったり、病気が治ったりするような善いことが起きる。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ①そう思う
- ②どちらかと言えばそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④そう思わない

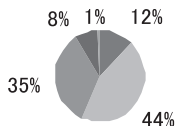
設問14（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	44	129	145	85	1
外 国 語 学 部	4	29	41	56	0
短 期 大 学 部	13	64	112	56	0
3 学 部 合 計	61	222	298	197	1

設問14（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	16	85	245	61	1
外 国 語 学 部	2	25	45	48	0
短 期 大 学 部	2	24	75	127	1
3 学 部 合 計	20	134	365	236	2

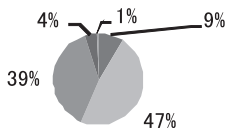
**教育学部  
(第1回授業)**



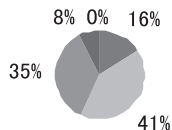
**3学部合計  
(第1回授業)**



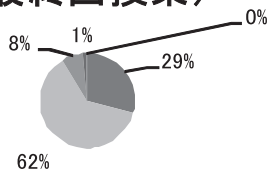
**短期大学部  
(第1回授業)**



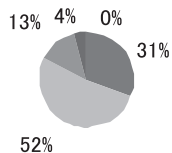
**外国語学部  
(第1回授業)**



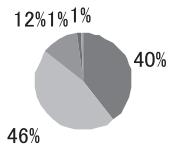
**教育学部  
(最終回授業)**



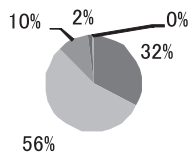
**外国語学部  
(最終回授業)**



**短期大学部  
(最終回授業)**



**3学部合計  
(最終回授業)**



2. 人類にとって、宗教は必要であると思いますか？（一つ〇印）

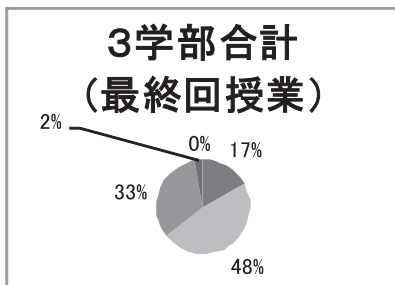
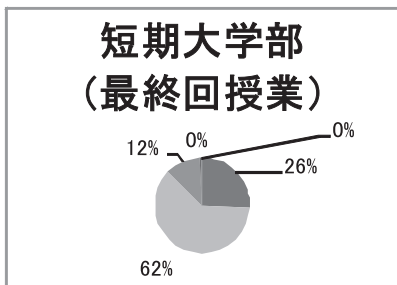
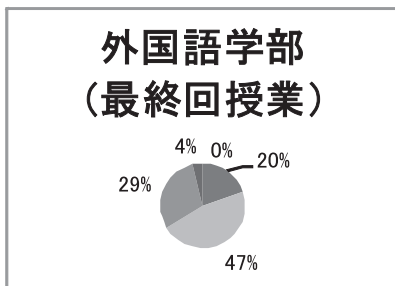
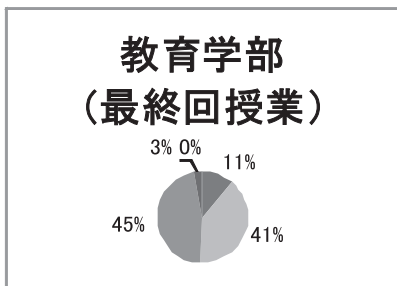
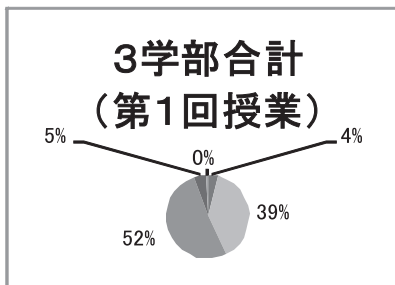
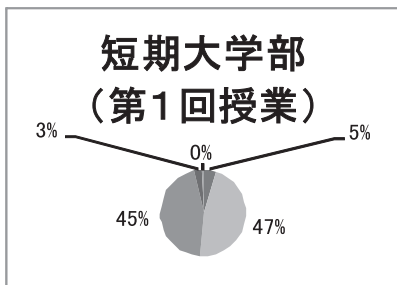
- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

設問2（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	53	174	130	45	2
外 国 語 学 部	21	53	46	10	0
短 期 大 学 部	22	115	96	10	2
3 学 部 合 計	96	342	272	65	4

設問2（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	119	253	32	4	1
外 国 語 学 部	37	62	16	5	0
短 期 大 学 部	90	106	28	3	2
3 学 部 合 計	246	421	76	12	3

設問2（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	13.1%	43.1%	32.2%	11.1%	0.5%
外 国 語 学 部	16.2%	40.8%	35.4%	7.7%	0.0%
短 期 大 学 部	9.0%	46.9%	39.2%	4.1%	0.8%
3 学 部 合 計	12.3%	43.9%	34.9%	8.3%	0.5%

設問2（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	29.2%	62.0%	7.8%	1.0%	0.2%
外 国 語 学 部	30.8%	51.7%	13.3%	4.2%	0.0%
短 期 大 学 部	39.3%	46.3%	12.2%	1.3%	0.9%
3 学 部 合 計	32.5%	55.6%	10.0%	1.6%	0.4%

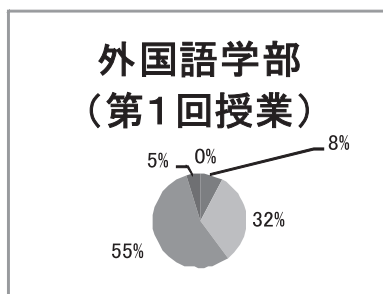
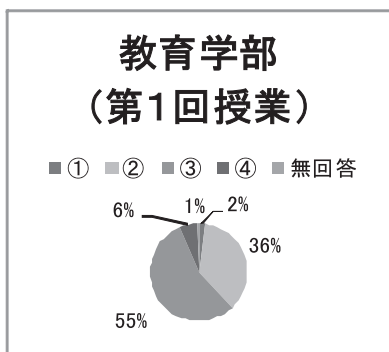


第1回授業では、よい印象をもっている学生（①②の合計）は、教育学部では38.1%、外国語学部40.0%、短期大学部52.4%であるのに対し、最終回授業では、教育学部51.2%、外国語学部66.7%、短期大学部87.4%と変化した。宗教に諸種あることに対する理解の深まりや、世界的に広まりがある各宗教で説かれる理想の人物像を説明したことが影響しているように思われる。

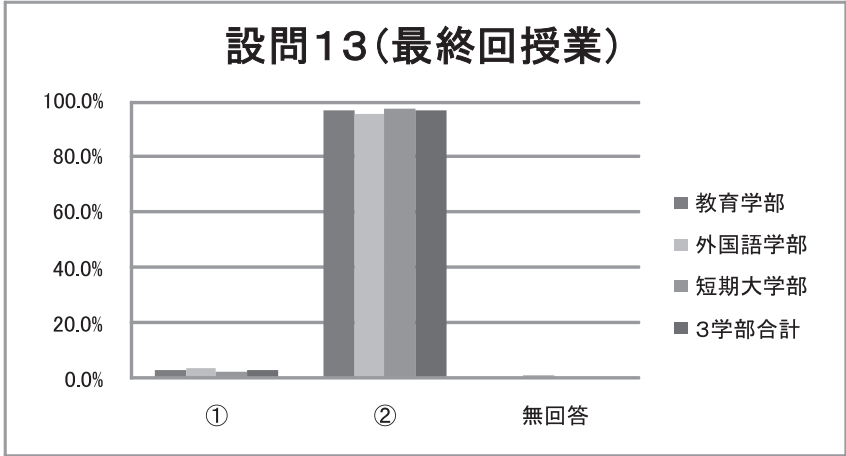
設問1 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	44	165	185	13	1
外国語学部	24	56	35	5	0
短期大学部	59	141	27	1	1
3学部合計	127	362	247	19	2

設問1 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	2.0%	36.1%	55.4%	5.9%	0.5%
外国語学部	7.7%	32.3%	55.4%	4.6%	0.0%
短期大学部	4.5%	46.9%	44.9%	3.3%	0.4%
3学部合計	3.7%	38.9%	52.1%	4.9%	0.4%

設問1 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	10.8%	40.4%	45.3%	3.2%	0.2%
外国語学部	20.0%	46.7%	29.2%	4.2%	0.0%
短期大学部	25.8%	61.6%	11.8%	0.4%	0.4%
3学部合計	16.8%	47.8%	32.6%	2.5%	0.3%



以下の円グラフの項目は同様であるため省略した。



正解は②である。教育学部、外国語学部、短期大学部とも当初より正解率が多い。①の表現があまりにも反道徳的であったためであろう。

## ②学生の宗教観について

1. 宗教を信じる人々について、どのような印象をもっていますか？

(一つ〇印)

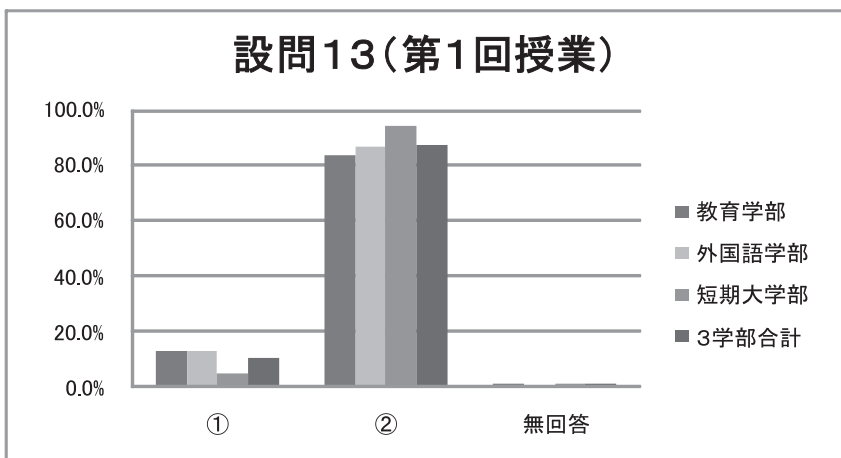
- ①よい印象をもっている
- ②どちらかと言えばよい印象をもっている
- ③あまりよい印象をもっていない
- ④よい印象をもっていない

設問1 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	8	146	224	24	2
外国語学部	10	42	72	6	0
短期大学部	11	115	110	8	1
3学部合計	29	303	406	38	3

設問13 (最終回授業)	①	②	無回答
教 育 学 部	11	394	3
外 国 語 学 部	4	115	1
短 期 大 学 部	5	223	1
3 学 部 合 計	20	732	5

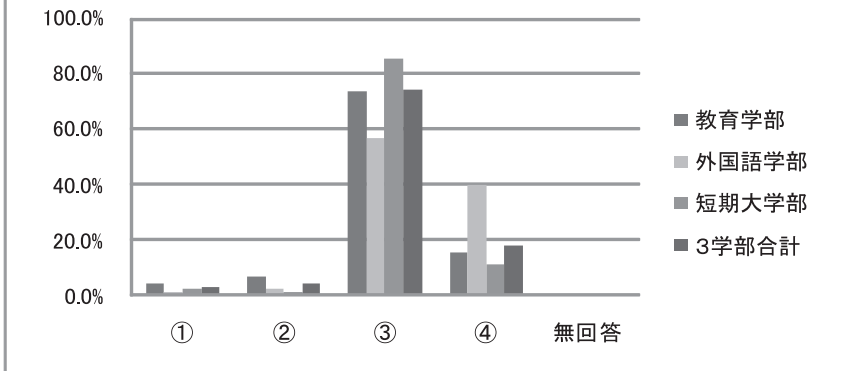
設問13 (第1回授業)	①	②	無回答
教 育 学 部	12.9%	83.9%	1.2%
外 国 語 学 部	13.1%	86.9%	0.0%
短 期 大 学 部	4.9%	94.3%	0.8%
3 学 部 合 計	10.4%	87.7%	0.9%

設問13 (最終回授業)	①	②	無回答
教 育 学 部	2.7%	96.6%	0.7%
外 国 語 学 部	3.3%	95.8%	0.8%
短 期 大 学 部	2.2%	97.4%	0.4%
3 学 部 合 計	2.6%	96.7%	0.7%





## 設問12(最終回授業)



正解は③聖徳太子である。教育学部では30.4%から73.8%へ、外国語学部は37.7%から56.7%へ、短期大学部は49.0%から85.6%へ正答率が向上した。

ただし、最終回授業でも、④法然上人と回答する学生が、教育学部では15.2%、外国語学部40.0%、短期大学部10.9%もあったことは、親鸞聖人の師が法然上人であったことが影響しているように思う。授業中の説明方法を考慮する必要があるだろう。

13. 親鸞聖人の仏教思想を示す用語に「悪人正機」があります。その意味としてもっとも適切だと思うものに一つ○印をしてください。

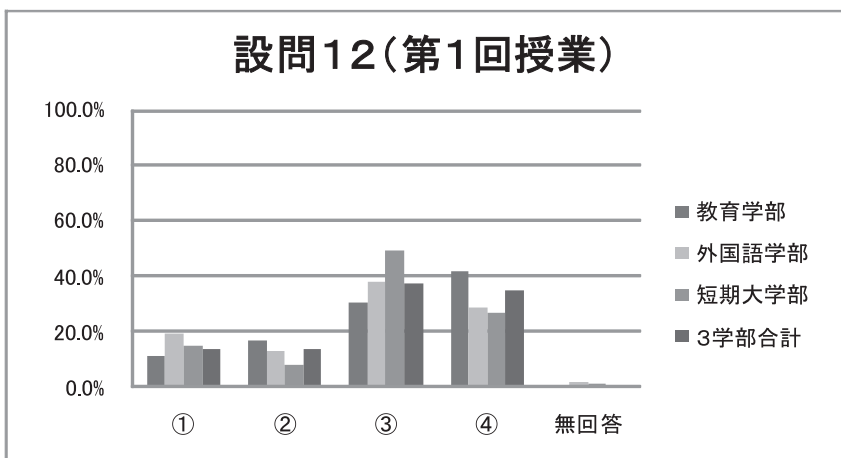
- ① 罪を犯したものでも救われるので、悪の限りをつくしてもよい
- ② 仏の心につつまれ、自身の罪悪性に気づいたものが救われる

設問13 (第1回授業)	①	②	無回答
教育学部	52	339	5
外国語学部	17	113	0
短期大学部	12	231	2
3学部合計	81	683	7

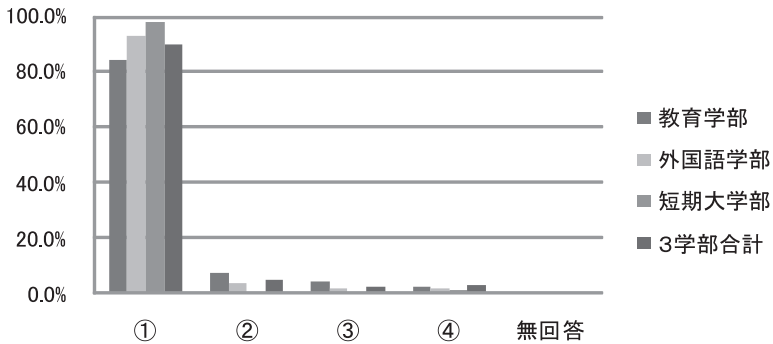
設問12（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	16	28	301	62	1
外 国 語 学 部	1	3	68	48	0
短 期 大 学 部	5	2	196	25	1
3 学 部 合 計	22	33	565	135	2

設問12（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	10.9%	16.8%	30.4%	41.8%	0.0%
外 国 語 学 部	19.2%	13.1%	37.7%	28.5%	1.5%
短 期 大 学 部	15.1%	8.2%	49.0%	26.9%	0.8%
3 学 部 合 計	13.6%	13.5%	37.5%	34.9%	0.5%

設問12（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	3.9%	6.9%	73.8%	15.2%	0.2%
外 国 語 学 部	0.8%	2.5%	56.7%	40.0%	0.0%
短 期 大 学 部	2.2%	0.9%	85.6%	10.9%	0.4%
3 学 部 合 計	2.9%	4.4%	74.6%	17.8%	0.3%



## 設問11(最終回授業)



正解は①十七条憲法である。教育学部では75.9%から84.6%へ、外国語学部は66.9%から93.3%へ、短期大学部は62.9%から98.3%へ正答率が向上した。教育学部ではポイントが大きく増加しなかったことは反省点である。

12. 浄土真宗を開いた親鸞聖人が「和国の教主（日本の釈尊）」として仰いだ人物名として正しいものに一つ○印をしてください。

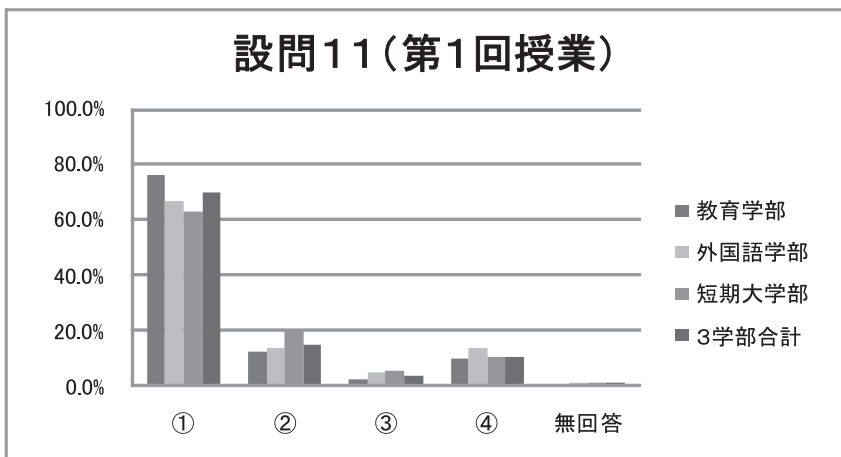
- ①鑑真和上    ②空也上人    ③聖徳太子    ④法然上人

設問12(第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	44	68	123	169	0
外国語学部	25	17	49	37	2
短期大学部	37	20	120	66	2
3学部合計	106	105	292	272	4

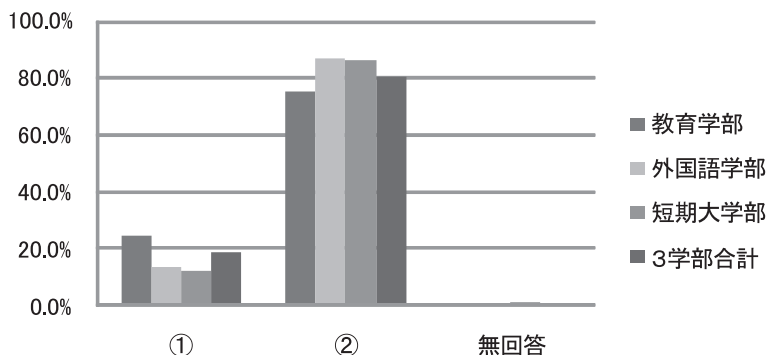
設問11（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	345	30	17	16	0
外 国 語 学 部	112	4	2	2	0
短 期 大 学 部	225	1	0	2	1
3 学 部 合 計	682	35	19	20	1

設問11（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	75.9%	12.1%	2.0%	9.9%	0.5%
外 国 語 学 部	66.9%	13.8%	4.6%	13.8%	0.8%
短 期 大 学 部	62.9%	20.0%	5.7%	10.2%	1.2%
3 学 部 合 計	70.1%	14.9%	3.6%	10.7%	0.8%

設問11（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	84.6%	7.4%	4.2%	2.1%	0.0%
外 国 語 学 部	93.3%	3.3%	1.7%	1.7%	0.0%
短 期 大 学 部	98.3%	0.4%	0.0%	0.9%	0.4%
3 学 部 合 計	90.1%	4.6%	2.5%	2.6%	0.1%



## 設問10(最終回授業)



正解は②である。教育学部は68.1%から75.5%へ、外国語学部は59.2%から86.7%へ、短期大学部は57.1%から86.5%へ正答率が向上した。

11. 最初期は呪術的・政治的な思想のもとで展開していった仏教でしたが、信仰の面から仏教を捉え、国を治めていくのに援用したのが聖徳太子（厩戸王）でした。その精神をあらわす言葉として「和をもって貴しとなす」がありますが、この言葉の出典として正しいものに○印をしてください。

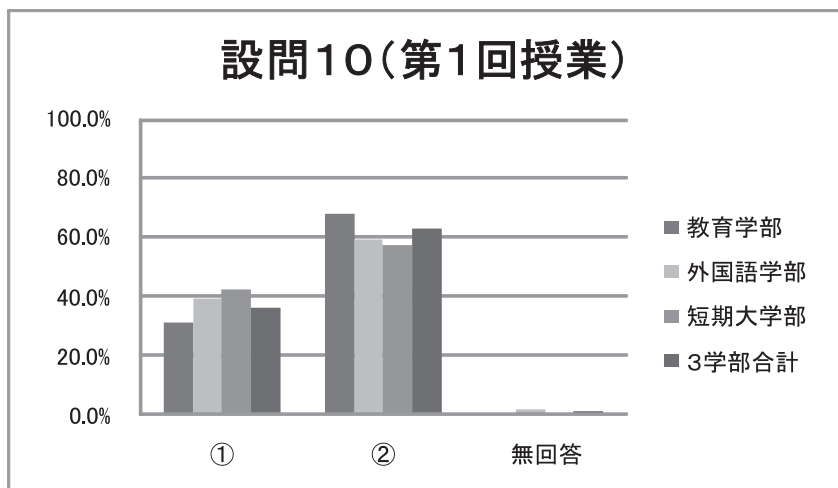
- ①十七条憲法    ②法華義疏    ③往生要集    ④歎異抄

設問11 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	305	49	8	40	2
外 国 語 学 部	87	18	6	18	1
短 期 大 学 部	154	49	14	25	3
3 学 部 合 計	546	116	28	83	6

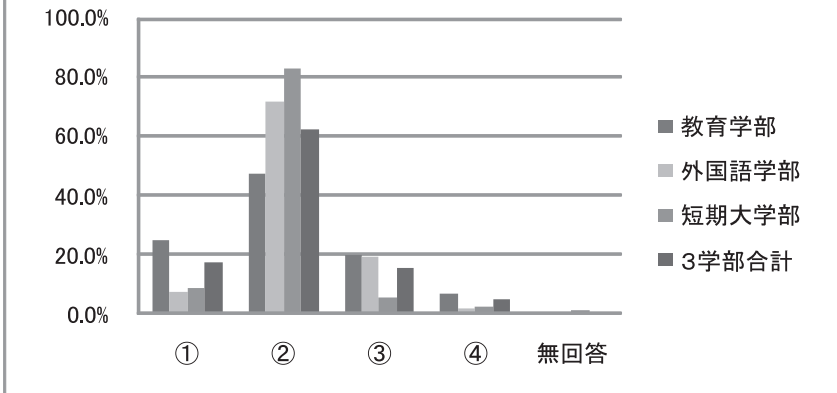
設問10（最終回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	99	308	1
外 国 語 学 部	16	104	0
短 期 大 学 部	28	198	3
3 学 部 合 計	143	610	4

設問10（第1回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	31.2%	68.1%	0.7%
外 国 語 学 部	39.2%	59.2%	1.5%
短 期 大 学 部	42.4%	57.1%	0.4%
3 学 部 合 計	36.1%	63.2%	0.8%

設問10（最終回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	24.3%	75.5%	0.2%
外 国 語 学 部	13.3%	86.7%	0.0%
短 期 大 学 部	12.2%	86.5%	1.3%
3 学 部 合 計	18.9%	80.6%	0.5%



## 設問9(最終回授業)



正解は② 6世紀である。外国語学部は46.2%から71.7%へ、短期大学部は39.6%から83.4%へ正答率が向上した。教育学部でポイントが変わらなかったのは反省点である。

10. 仏教(仏像)が伝わったとき、日本ではこれを「異国の神」「他国の神」として、日本にもともとあった神祇信仰と同じような心持ちで受け止めました。このとき、有力豪族たちの間では崇仏派と排仏派に立場が分かれました。その組み合わせとして正しいと思う番号に一つ○印をしてください。

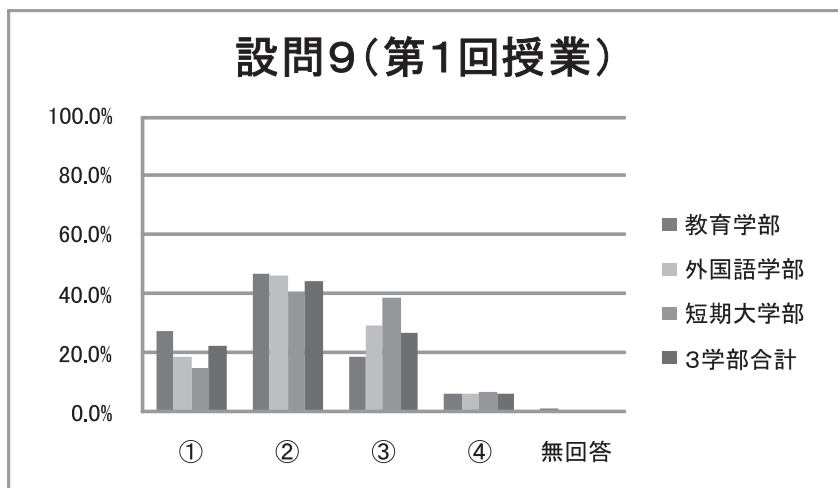
- ①崇仏派・物部氏 — 排仏派・蘇我氏  
 ②崇仏派・蘇我氏 — 排仏派・物部氏

設問10(第1回授業)	①	②	無回答
教育学部	126	275	3
外国語学部	51	77	2
短期大学部	104	140	1
3学部合計	281	492	6

設問9（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	102	194	81	28	3
外国語学部	9	86	23	2	0
短期大学部	19	191	12	5	2
3学部合計	130	471	116	35	5

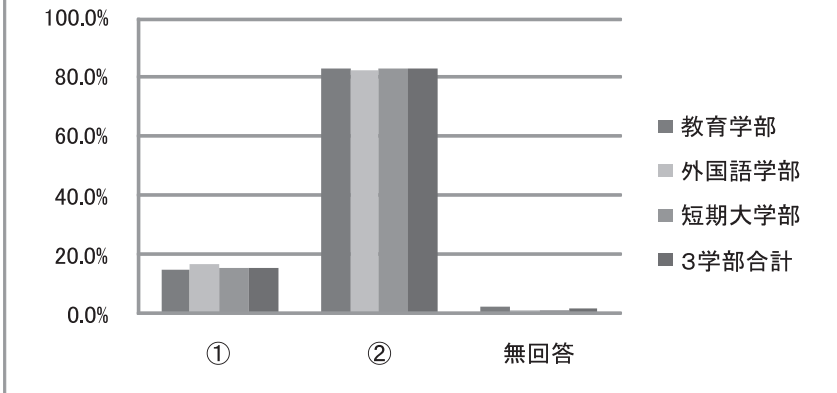
設問9（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	27.5%	46.8%	18.8%	5.9%	1.0%
外国語学部	18.5%	46.2%	29.2%	6.2%	0.0%
短期大学部	15.1%	39.6%	38.4%	6.5%	0.4%
3学部合計	22.1%	44.4%	26.7%	6.2%	0.6%

設問9（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	25.0%	47.5%	19.9%	6.9%	0.7%
外国語学部	7.5%	71.7%	19.2%	1.7%	0.0%
短期大学部	8.3%	83.4%	5.2%	2.2%	0.9%
3学部合計	17.2%	62.2%	15.3%	4.6%	0.7%





## 設問8(最終回授業)



正解は②である。おおむね正解数が多数を占めるのだが、短期大学部では、第1回授業が89.4%であるのに対し、最終回授業が83.0%と、正解率が減少していることが反省点である。半期授業であるため、大乘仏教の伝播についての説明がほとんどできなかったことが原因であろう。

9. 日本に仏教が伝来したことについては、『日本書紀』や『元興寺縁起』、『上宮聖徳法王帝説』などに記されています。伝来の正式年代については記述が異なりますが、時代はほぼ一致しています。次の中から正しいと思うものを選んで一つ○印をしてください。

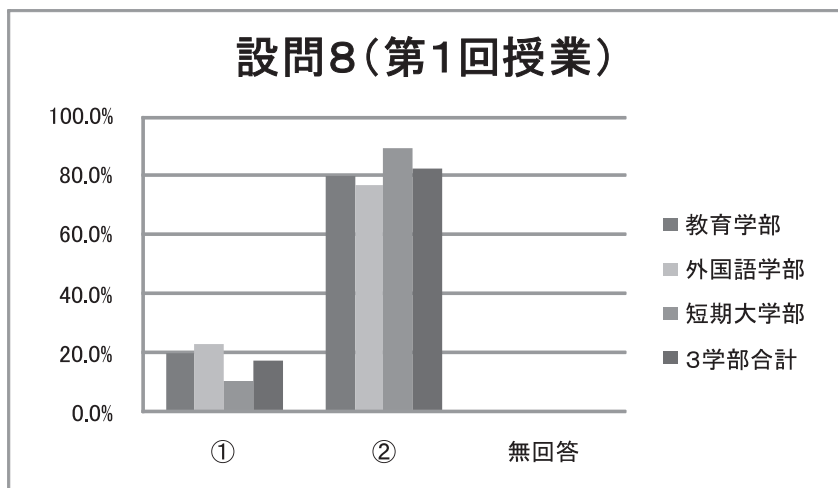
- ① 5世紀      ② 6世紀      ③ 7世紀      ④ 8世紀

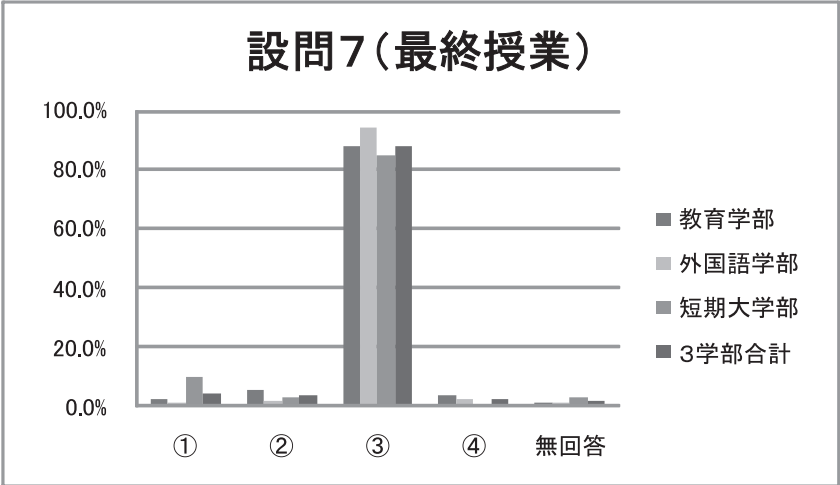
設問9(第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	111	189	76	24	4
外国語学部	24	60	38	8	0
短期大学部	37	97	94	16	1
3学部合計	172	346	208	48	5

設問8（最終回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	61	338	9
外 国 語 学 部	20	99	1
短 期 大 学 部	36	190	3
3 学 部 合 計	117	627	13

設問8（第1回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	19.8%	80.0%	0.2%
外 国 語 学 部	23.1%	76.9%	0.0%
短 期 大 学 部	10.2%	89.4%	0.4%
3 学 部 合 計	17.3%	82.4%	0.3%

設問8（最終回授業）	①	②	無回答
教 育 学 部	15.0%	82.8%	2.2%
外 国 語 学 部	16.7%	82.5%	0.8%
短 期 大 学 部	15.7%	83.0%	1.3%
3 学 部 合 計	15.5%	82.8%	1.7%





授業において、お経とは、釈尊の説法を書き記したものであると説明をした。正解の③経典（お経）と答える学生が割合が増加している。ただし、短期大学部において、最終回授業に①聖書と答えた学生が9.6%存在したことは、反省点であろう。

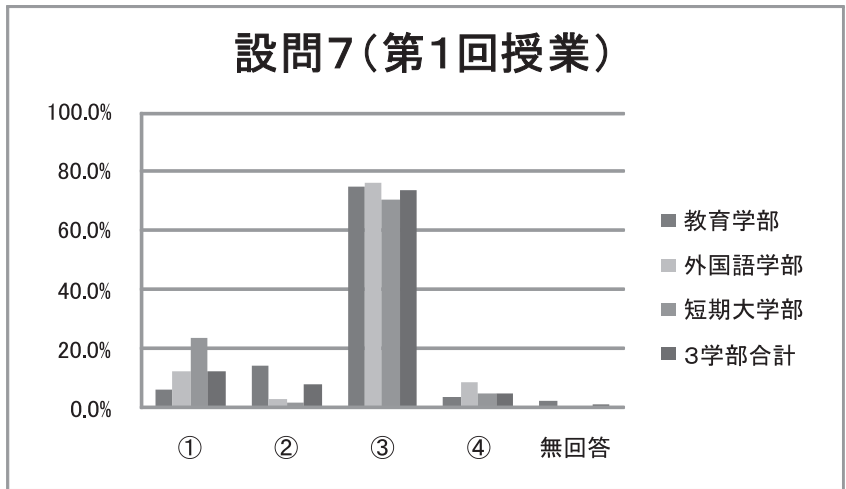
8. 紀元前後に登場する仏教をとくに大乘仏教といいます。それが伝わった経路として正しいと思う番号に一つ○印をしてください。

- ①インド→セイロン島→東南アジア
- ②インド→西域（シルクロード）→中国→日本

設問8 (第1回授業)	①	②	無回答
教 育 学 部	80	323	1
外 国 語 学 部	30	100	0
短 期 大 学 部	25	219	1
3 学 部 合 計	135	642	2

設問7 (第1回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	5.9%	13.9%	74.8%	3.5%	2.0%
外国語学部	12.3%	3.1%	76.2%	8.5%	0.0%
短期大学部	23.3%	1.6%	70.6%	4.5%	0.0%
3学部合計	12.5%	8.2%	73.7%	4.6%	1.0%

設問7 (最終回授業)	①	②	③	④	無回答
教育学部	2.2%	5.1%	88.2%	3.4%	1.2%
外国語学部	0.8%	1.7%	94.2%	2.5%	0.8%
短期大学部	9.6%	2.6%	84.7%	0.4%	2.6%
3学部合計	4.2%	3.8%	88.1%	2.4%	1.6%



第1回授業の教育学部では、④人々を救うもの39.9%、①真理に目覚めたもの29.7%、⑦神14.9%、同様に外国語学部でも、④46.2%、①31.5%、⑦25.4%、短期大学部も、④43.7%、⑦30.2%、①26.1%が多数を占める回答であった。

授業では、仏の定義として、①と②変わらぬ真理を強調したため、最終回授業では、教育学部では①72.1%、②16.2%、外国語学部は、①61.7%、②65.8%となり、短期大学部では、①88.2%、②79.9%となり、⑦は、教育学部4.9%、外国語学部5.8%、短期大学部3.9%となった。神と仏の相違点についての理解度が向上したように思う。

また、⑥霊魂については、教育学部では、第1回授業と最終回授業の比較において、6.9%から5.9%に減少し、外国語学部でも11.5%から5.0%に減少し、短期大学部も、12.2%から2.2%に減少した。

授業では、釈尊（ゴータマ・シッダールタ）が、霊魂を説かなかったことを説明したが、その影響であろうと思われる。

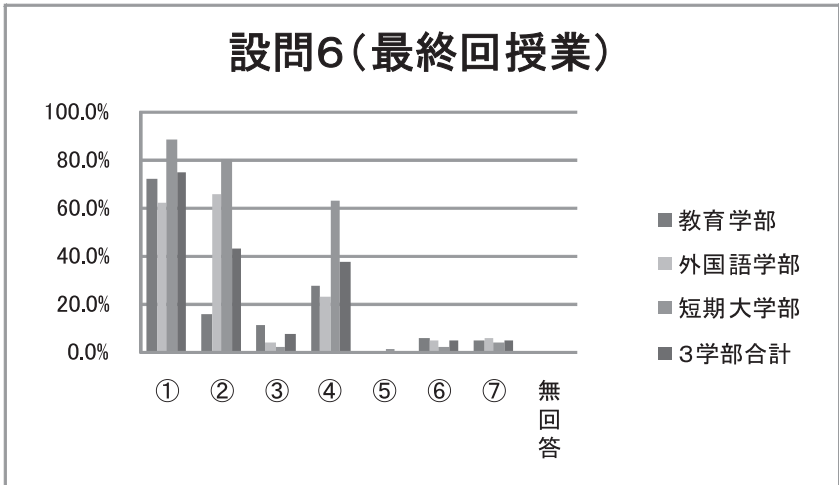
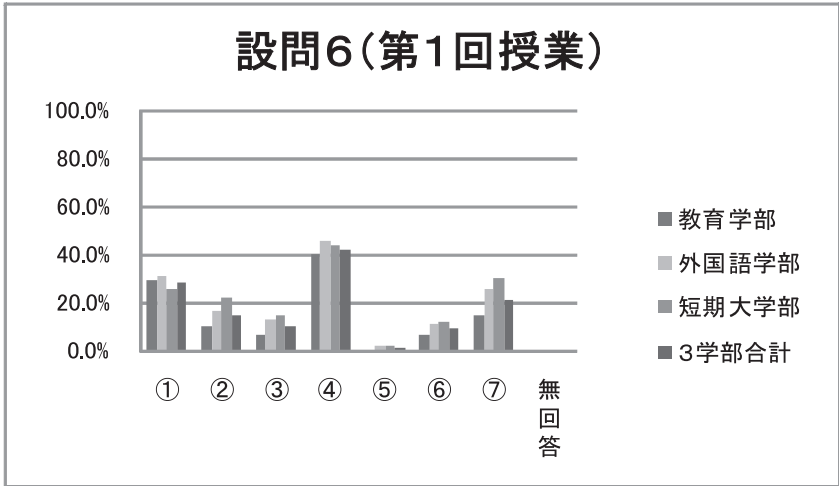
7. 仏教の教えを記した書物の名前として正しいものに一つ○印をしてください。

①聖書      ②クルアーン      ③経典（お経）      ④論語

設問7（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	24	56	302	14	8
外国語学部	16	4	99	11	0
短期大学部	57	4	173	11	0
3学部合計	97	64	574	36	8

設問7（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教育学部	9	21	360	14	5
外国語学部	1	2	113	3	1
短期大学部	22	6	194	1	6
3学部合計	32	29	667	18	12

設問6（最終回授業）	⑤	⑥	⑦	無回答
教 育 学 部	0.0%	5.9%	4.9%	0.2%
外 国 語 学 部	0.0%	5.0%	5.8%	0.0%
短 期 大 学 部	0.9%	2.2%	3.9%	0.4%
3 学 部 合 計	0.3%	4.6%	4.8%	0.3%



設問6（最終回授業）	①	②	③	④
教 育 学 部	294	66	45	111
外 国 語 学 部	74	79	5	28
短 期 大 学 部	202	183	6	144
3 学 部 合 計	570	328	56	283

設問6（最終回授業）	⑤	⑥	⑦	無回答
教 育 学 部	0	24	20	1
外 国 語 学 部	0	6	7	0
短 期 大 学 部	2	5	9	1
3 学 部 合 計	2	35	36	2

設問6（第1回授業）	①	②	③	④
教 育 学 部	29.7%	9.9%	6.9%	39.9%
外 国 語 学 部	31.5%	16.9%	13.1%	46.2%
短 期 大 学 部	26.1%	22.4%	14.7%	43.7%
3 学 部 合 計	28.9%	15.0%	10.4%	42.1%

設問6（第1回授業）	⑤	⑥	⑦	無回答
教 育 学 部	0.0%	6.9%	14.9%	0.0%
外 国 語 学 部	2.3%	11.5%	25.4%	0.0%
短 期 大 学 部	2.0%	12.2%	30.2%	0.4%
3 学 部 合 計	1.0%	9.4%	21.4%	0.1%

設問6（最終回授業）	①	②	③	④
教 育 学 部	72.1%	16.2%	11.0%	27.2%
外 国 語 学 部	61.7%	65.8%	4.2%	23.3%
短 期 大 学 部	88.2%	79.9%	2.6%	62.9%
3 学 部 合 計	75.3%	43.3%	7.4%	37.4%

第1回授業では、③ゴータマ・シッダータと回答した学生が、教育学部77.0%、外国語学部62.3%、短期大学部43.7%と多数を占めたが、④孔子と回答した学生も、教育学部9.9%、外国語学部19.2%、短期大学部29.4%とかなりの割合を占めた。

これは、仏教を日本特有の宗教と考えていた学生が少なからず存在し、「漢字」で表記された人名を選んだ可能性も考えられるのではないかと思う。

6. 仏教の究極の目標は「仏と成る」ことにあると言われていますが、「仏」とはどのようなものだと思いますか？あてはまるものに○印をしてください。(複数回答可)

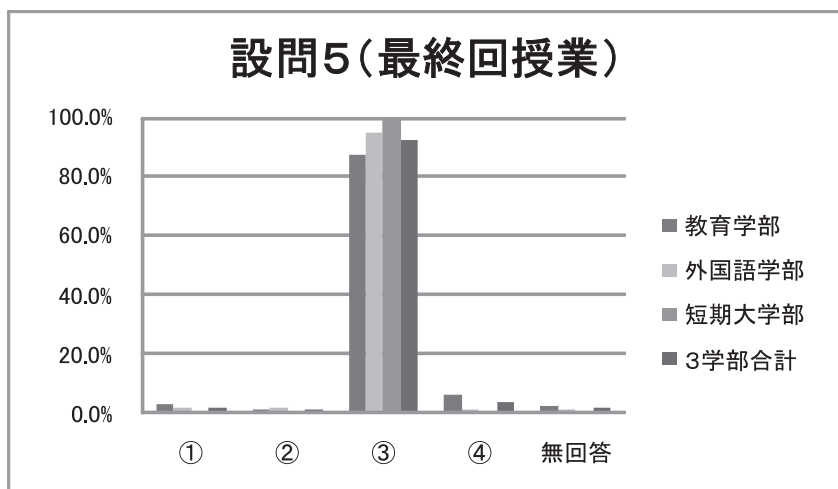
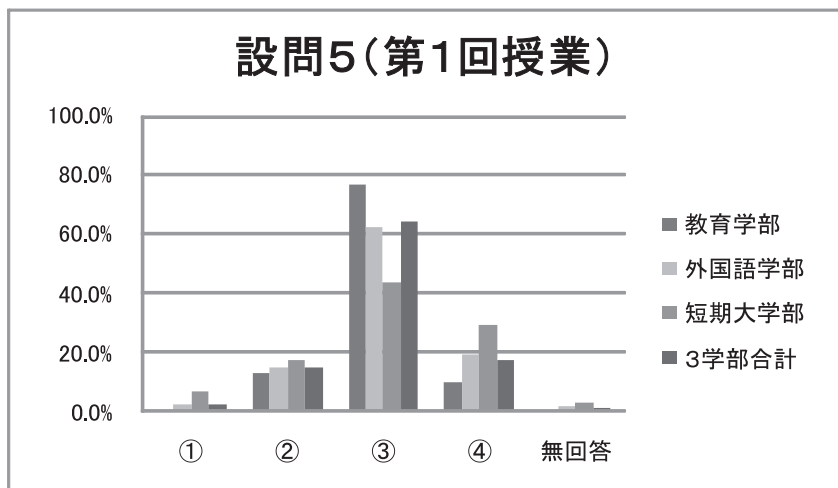
- ①真理に目覚めたもの
- ②変わらぬ真理そのもの
- ③亡くなった人
- ④人々を救うもの
- ⑤人々に災いをもたらすもの
- ⑥靈魂
- ⑦神

設問6 (第1回授業)	①	②	③	④
教育学部	120	40	28	161
外国語学部	41	22	17	60
短期大学部	64	55	36	107
3学部合計	225	117	81	328

設問6 (第1回授業)	⑤	⑥	⑦	無回答
教育学部	0	28	60	0
外国語学部	3	15	33	0
短期大学部	5	30	74	1
3学部合計	8	73	167	1



設問5（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	2.9%	1.0%	87.7%	5.9%	2.5%
外 国 語 学 部	1.7%	1.7%	95.0%	0.8%	0.8%
短 期 大 学 部	0.0%	0.4%	99.6%	0.0%	0.0%
3 学 部 合 計	1.8%	0.9%	92.5%	3.3%	1.5%



原始宗教から民族宗教へ発展したものであると述べたが、原始宗教の印象が強く残っていたのかもしれない。

5. 仏教を開いた人物名として正しいものに○印をしてください。

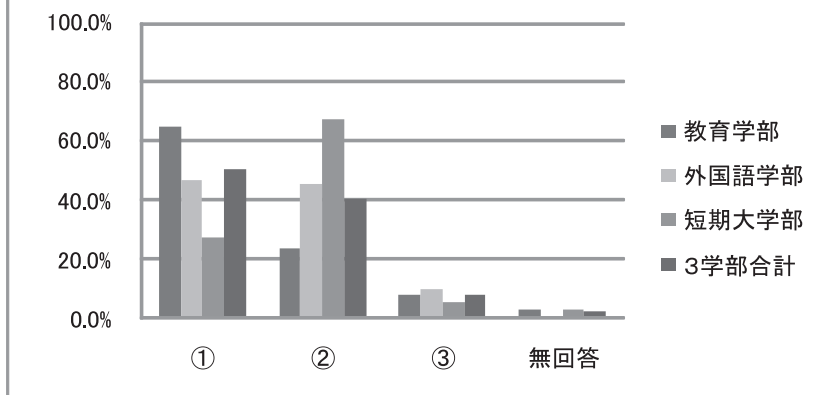
- ① イエス・キリスト
- ② ムハンマド
- ③ ゴータマ・シッダールタ
- ④ 孔子

設問5（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	0	52	311	40	1
外 国 語 学 部	3	19	81	25	2
短 期 大 学 部	16	43	107	72	7
3 学 部 合 計	19	114	499	137	10

設問5（最終回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	12	4	358	24	10
外 国 語 学 部	2	2	114	1	1
短 期 大 学 部	0	1	228	0	0
3 学 部 合 計	14	7	700	25	11

設問5（第1回授業）	①	②	③	④	無回答
教 育 学 部	0.0%	12.9%	77.0%	9.9%	0.2%
外 国 語 学 部	2.3%	14.6%	62.3%	19.2%	1.5%
短 期 大 学 部	6.5%	17.6%	43.7%	29.4%	2.9%
3 学 部 合 計	2.4%	14.6%	64.1%	17.6%	1.3%

## 設問4-6(最終回授業)



授業では、4-1ユダヤ教は②、4-2キリスト教は③、4-3イスラム教は③、4-4ヒンドゥー教は②、4-5仏教は③、4-6神道は②を正解としている。ユダヤ教、キリスト教、ヒンドゥー教に関しては、第1回授業、最終回授業とも正解を回答する学生が多数である。

しかし、イスラム教に関しては、最終回授業には、世界宗教と回答する学生が多数を占めたが、第1回授業の際には、民族宗教と回答する学生が多数を占めていた。日本人にとってなじみがないことが影響しているのかもしれない。

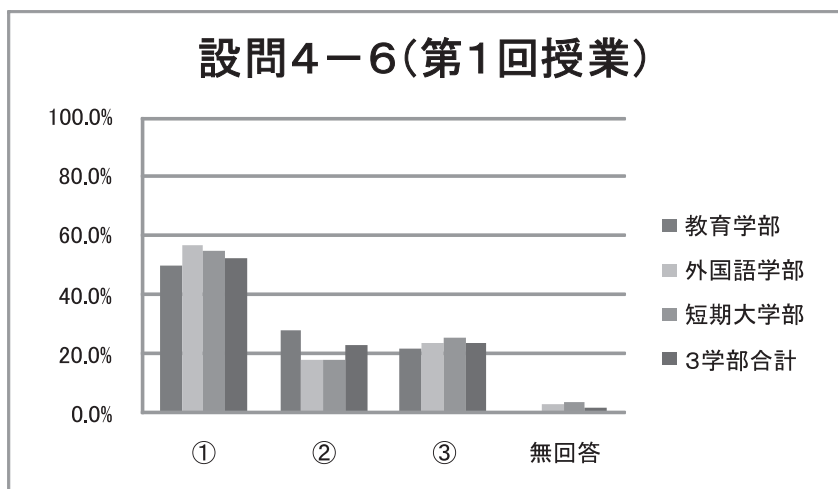
また、仏教に関しては、最終回授業には、それぞれ回答割合は減少するが、第1回授業には、原始宗教と回答する学生が、教育学部17.8%、外国語学部29.2%、短期大学部32.2%、民族宗教と回答する学生が教育学部29.0%、外国語学部19.2%、短期大学部20.4%と、比較的多いことが特筆されよう。仏教を日本特有の宗教であると考えていた学生が少なからずいるように思われる。

神道に関しては、第1回授業では、原始宗教と回答する学生の割合が、教育学部50.0%、外国語学部56.9%、短期大学部54.7%と最も多く、教育学部や外国語学部については、最終回授業でも65.0%、46.7%と、民族宗教の23.8%、45.8%を超えてしまった。授業では神道の歴史を、

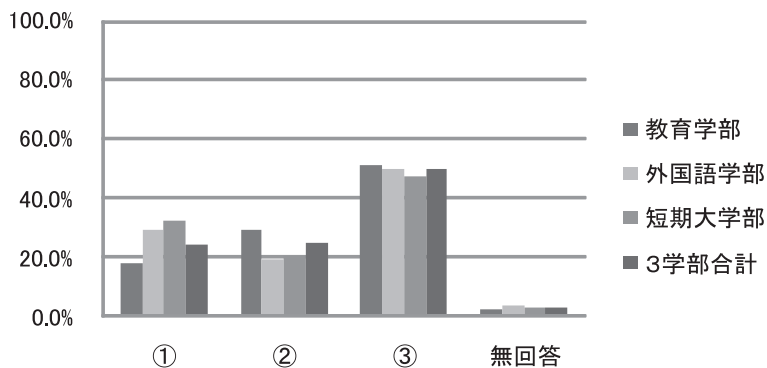
設問4-6 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	265	97	33	13
外国語学部	56	55	12	0
短期大学部	62	154	13	6
3学部合計	383	306	58	19

設問4-6 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	50.0%	28.0%	21.8%	0.2%
外国語学部	56.9%	17.7%	23.8%	3.1%
短期大学部	54.7%	18.0%	25.7%	3.7%
3学部合計	52.6%	23.1%	23.4%	1.8%

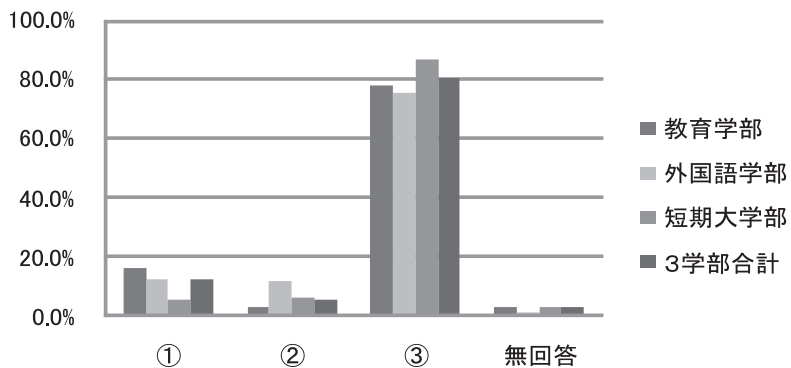
設問4-6 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	65.0%	23.8%	8.1%	3.2%
外国語学部	46.7%	45.8%	10.0%	0.0%
短期大学部	27.1%	67.2%	5.7%	2.6%
3学部合計	50.6%	40.4%	7.7%	2.5%



### 設問4-5(第1回授業)



### 設問4-5(最終回授業)



設問4-6 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	202	113	88	1
外国語学部	74	23	31	4
短期大学部	134	44	63	9
3学部合計	410	180	182	14

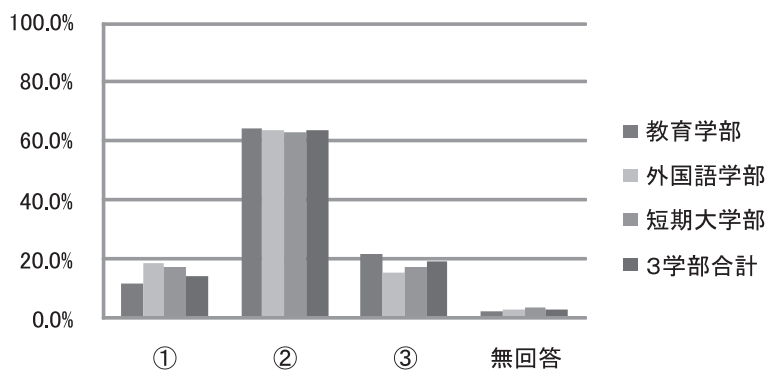
設問4-5 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	72	117	206	9
外 国 語 学 部	38	25	65	5
短 期 大 学 部	79	50	116	7
3 学 部 合 計	189	192	387	21

設問4-5 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	65	12	318	13
外 国 語 学 部	15	14	91	1
短 期 大 学 部	13	14	199	6
3 学 部 合 計	93	40	608	20

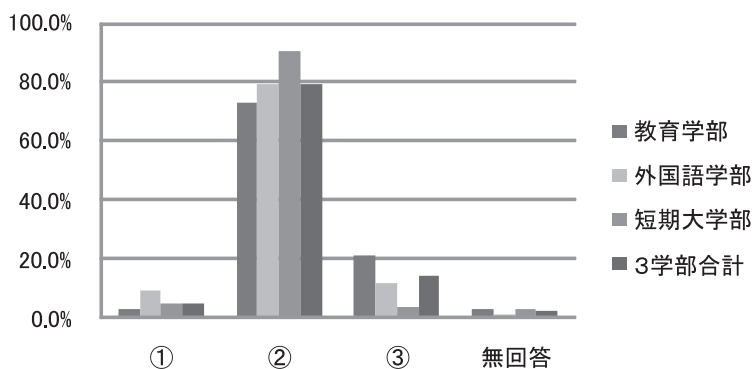
設問4-5 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	17.8%	29.0%	51.0%	2.2%
外 国 語 学 部	29.2%	19.2%	50.0%	3.8%
短 期 大 学 部	32.2%	20.4%	47.3%	2.9%
3 学 部 合 計	24.3%	24.6%	49.7%	2.7%

設問4-5 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	15.9%	2.9%	77.9%	3.2%
外 国 語 学 部	12.5%	11.7%	75.8%	0.8%
短 期 大 学 部	5.7%	6.1%	86.9%	2.6%
3 学 部 合 計	12.3%	5.3%	80.3%	2.6%

### 設問4-4(第1回授業)



### 設問4-4(最終回授業)



設問4-4 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	46	259	88	10
外 国 語 学 部	24	83	20	4
短 期 大 学 部	42	155	43	9
3 学 部 合 計	112	497	151	23

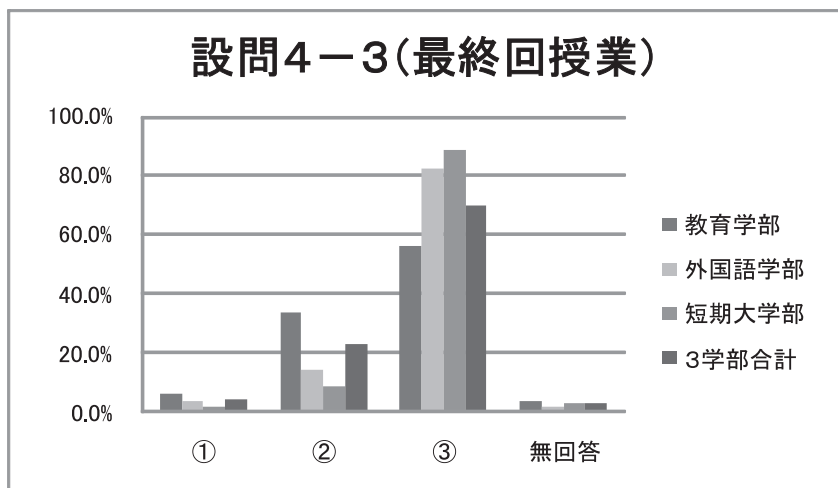
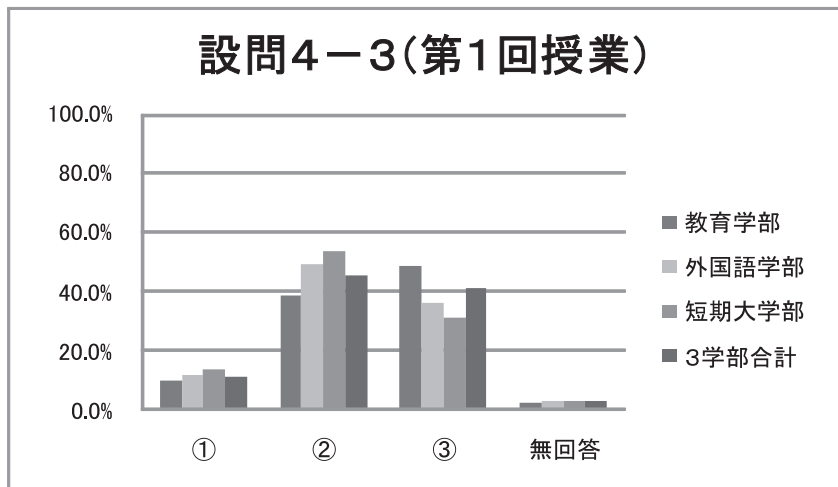
設問4-4 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	13	298	86	11
外 国 語 学 部	11	95	14	1
短 期 大 学 部	11	208	8	6
3 学 部 合 計	35	601	108	18

設問4-4 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	11.4%	64.1%	21.8%	2.5%
外 国 語 学 部	18.5%	63.8%	15.4%	3.1%
短 期 大 学 部	17.1%	63.3%	17.6%	3.7%
3 学 部 合 計	14.4%	63.8%	19.4%	3.0%

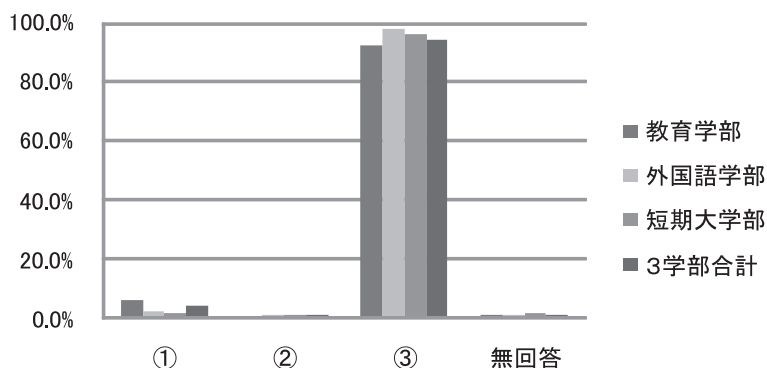
設問4-4 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	3.2%	73.0%	21.1%	2.7%
外 国 語 学 部	9.2%	79.2%	11.7%	0.8%
短 期 大 学 部	4.8%	90.8%	3.5%	2.6%
3 学 部 合 計	4.6%	79.4%	14.3%	2.4%



設問4-3 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	5.9%	33.8%	55.9%	3.4%
外国語学部	3.3%	14.2%	82.5%	1.7%
短期大学部	1.7%	8.7%	88.6%	2.6%
3学部合計	4.2%	23.1%	70.0%	2.9%



## 設問4-2(最終回授業)



設問4-3 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	40	157	197	10
外国語学部	15	64	47	4
短期大学部	33	132	76	7
3学部合計	88	353	320	21

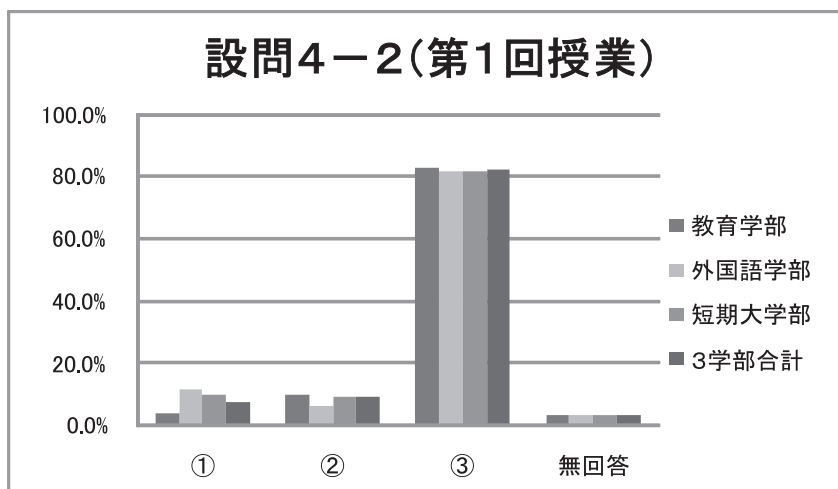
設問4-3 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	24	138	228	14
外国語学部	4	17	99	2
短期大学部	4	20	203	6
3学部合計	32	175	530	22

設問4-3 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	9.9%	38.9%	48.8%	2.5%
外国語学部	11.5%	49.2%	36.2%	3.1%
短期大学部	13.5%	53.9%	31.0%	2.9%
3学部合計	11.3%	45.3%	41.1%	2.7%

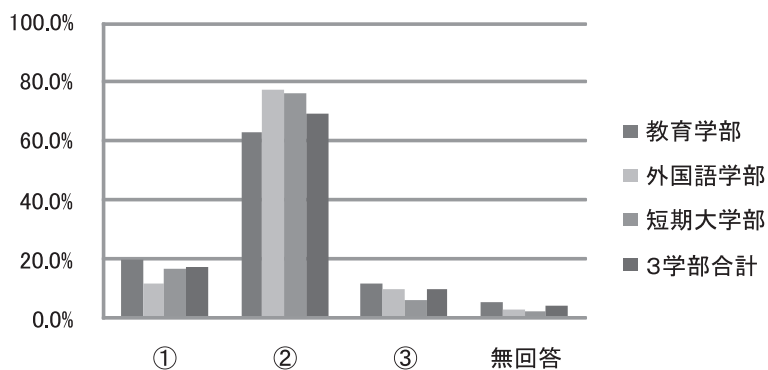
設問4-2 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	24	2	377	5
外国語学部	3	1	118	1
短期大学部	4	3	221	4
3学部合計	31	6	716	10

設問4-2 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	4.0%	9.9%	82.9%	3.2%
外国語学部	11.5%	6.2%	81.5%	3.1%
短期大学部	9.8%	9.0%	81.6%	2.9%
3学部合計	7.1%	9.0%	82.3%	3.1%

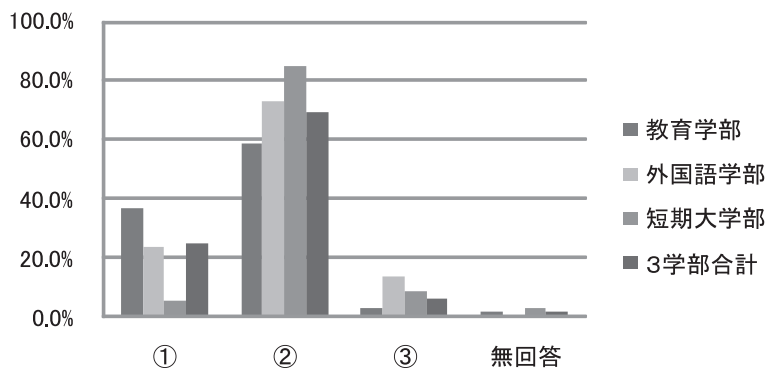
設問4-2 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	5.9%	0.5%	92.4%	1.2%
外国語学部	2.5%	0.8%	98.3%	0.8%
短期大学部	1.7%	1.3%	96.5%	1.7%
3学部合計	4.1%	0.8%	94.6%	1.3%



### 設問4-1(第1回授業)



### 設問4-1(最終回授業)



設問4-2(第1回授業)	①	②	③	無回答
教育学部	16	40	335	13
外国語学部	15	8	106	4
短期大学部	24	22	200	7
3学部合計	55	70	641	24

- 1) ユダヤ教・・・①原始宗教 ②民族宗教 ③世界宗教  
 2) キリスト教・・・①原始宗教 ②民族宗教 ③世界宗教  
 3) イスラム教・・・①原始宗教 ②民族宗教 ③世界宗教  
 4) ヒンドゥー教・・・①原始宗教 ②民族宗教 ③世界宗教  
 5) 仏教・・・・・・・・①原始宗教 ②民族宗教 ③世界宗教  
 6) 神道・・・・・・・・①原始宗教 ②民族宗教 ③世界宗教

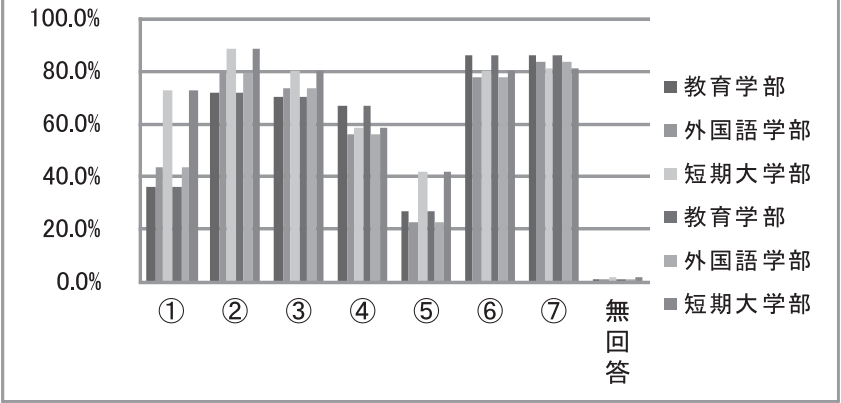
設問4-1 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	80	254	48	22
外 国 語 学 部	15	101	13	4
短 期 大 学 部	41	187	15	6
3 学 部 合 計	136	542	76	32

設問4-1 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	149	240	12	7
外 国 語 学 部	28	88	16	0
短 期 大 学 部	13	194	19	7
3 学 部 合 計	190	522	47	14

設問4-1 (第1回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	19.8%	62.9%	11.9%	5.4%
外 国 語 学 部	11.5%	77.7%	10.0%	3.1%
短 期 大 学 部	16.7%	76.3%	6.1%	2.4%
3 学 部 合 計	17.5%	69.6%	9.8%	4.1%

設問4-1 (最終回授業)	①	②	③	無回答
教 育 学 部	36.5%	58.8%	2.9%	1.7%
外 国 語 学 部	23.3%	73.3%	13.3%	0.0%
短 期 大 学 部	5.7%	84.7%	8.3%	3.1%
3 学 部 合 計	25.1%	69.0%	6.2%	1.8%

### 設問3(最終回授業)



全学部の傾向として、第1回授業の回答において認知度が高かったのが、②民族宗教⑥一神教⑦多神教である。それが最終回授業時のアンケートにおいては、他の回答に対する認知度も増えていることがわかる。これは、「宗教」についての基本的知識の理解が深まったことを表しているといえる。また日本人の無宗教観の内実や、世界情勢の動向を、自然宗教・原始宗教と創唱宗教との対比、多神教と一神教との対比によって講義してきたことの反映として伺うことができる。

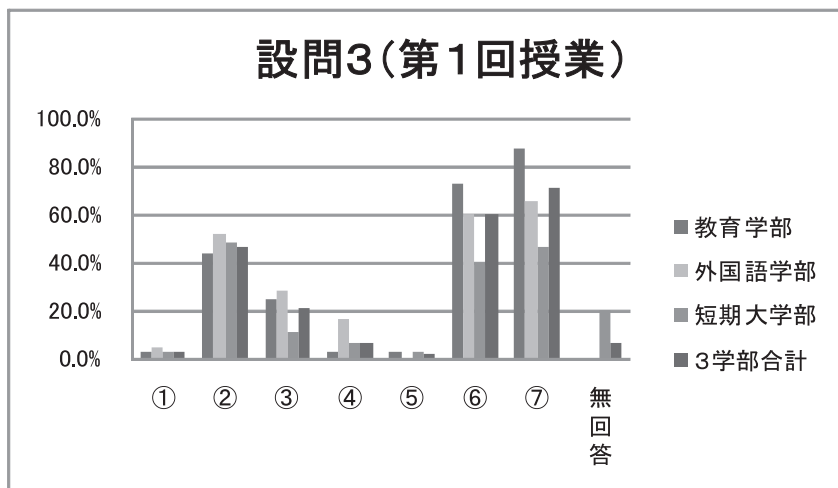
最終回授業の回答では、どの言葉も認知度が進んだといえるが、教育学部、外国語学部とも⑤創唱宗教についての認知度が、短期大学部の41.9%と比較して、20%台と少ないという傾向が見受けられる。これは、『宗教学ノート』において、創唱宗教についての記述が少なく、授業2週目という比較的初期において学習したことも影響しているかと思われる。これは、短期大学部が第1回授業と最終回授業の期間が4ヶ月間なのに対し、外国語学部は、10ヶ月間であることも理由の1つであろう。

4. 以下に示す宗教は、3で挙げたどの類型に分類されると思いますか？あてはまるものに○印をしてください。(複数回答可)

設問3 (最終回授業)	①	②	③	④
教育学部	35.8%	71.8%	69.9%	66.9%
外国語学部	43.3%	79.2%	73.3%	55.8%
短期大学部	72.9%	88.2%	80.3%	58.5%
3学部合計	48.2%	77.9%	73.6%	62.6%

設問3 (最終回授業)	⑤	⑥	⑦	無回答
教育学部	27.0%	85.8%	85.8%	1.2%
外国語学部	22.5%	77.5%	83.3%	0.8%
短期大学部	41.9%	80.3%	80.8%	1.3%
3学部合計	30.8%	82.8%	83.9%	0.4%

\* 回答学生数と各学部、及び3学部調査対象学生総数に対する%表示である。%表示は小数点以下第2位を四捨五入した。



設問3（第1回授業）	⑤	⑥	⑦	無回答
教 育 学 部	12	294	355	2
外 国 語 学 部	0	79	85	0
短 期 大 学 部	7	100	115	50
3 学 部 合 計	19	473	555	52

設問3（最終回授業）	①	②	③	④
教 育 学 部	146	293	285	273
外 国 語 学 部	52	95	88	67
短 期 大 学 部	167	202	184	134
3 学 部 合 計	365	590	557	474

設問3（最終回授業）	⑤	⑥	⑦	無回答
教 育 学 部	110	350	350	5
外 国 語 学 部	27	93	100	1
短 期 大 学 部	96	184	185	3
3 学 部 合 計	233	627	635	9

設問3（第1回授業）	①	②	③	④
教 育 学 部	3.0%	43.8%	25.0%	3.0%
外 国 語 学 部	4.6%	52.3%	28.5%	16.9%
短 期 大 学 部	2.9%	48.2%	11.4%	6.5%
3 学 部 合 計	3.2%	46.6%	21.3%	6.4%

設問3（第1回授業）	⑤	⑥	⑦	無回答
教 育 学 部	3.0%	72.8%	87.9%	0.5%
外 国 語 学 部	0.0%	60.8%	65.4%	0.0%
短 期 大 学 部	2.9%	40.8%	46.9%	20.4%
3 学 部 合 計	2.4%	60.7%	71.2%	6.7%



28. 本学の入学式や、入学奉告本山参拝などでは仏教の儀式を取り入れています。参加した感想を書いて下さい。

学籍番号【                      】

これは回答がよく分からないときに再度お聞きするためのものです。成績評価とは全く関係がありませんので、正確にお書きください。

お疲れ様でした(^ ^)

### 3、「宗教学アンケート」の分析

#### ①宗教学の授業内容に関する理解度について

以下の設問の回答結果を記す。

3. 宗教には諸類型ありますが、次の中で、知っている言葉に○印をしてください。(複数回答可)

- ①原始宗教      ②民族宗教      ③世界宗教      ④自然宗教  
⑤創唱宗教      ⑥一神教      ⑦多神教

設問3 (第1回授業)	①	②	③	④
教 育 学 部	12	177	101	12
外 国 語 学 部	6	68	37	22
短 期 大 学 部	7	118	28	16
3 学 部 合 計	25	363	166	50

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

24. 日本人の多くは無宗教者だと思う。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

25. 宗教的な儀式によって葬儀をすることは大切だと思う。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

26. 入学前から岐阜聖徳学園大学の「建学の精神」について知っていましたか？あてはまるものに一つ○印をしてください。

- ① 知っていた
- ② 知らなかった

27. 以下の言葉の中から、本学の建学の精神と関連するものを選んで○印をしてください。(複数回答可)

- ① キリスト教の精神    ② 仏教の精神    ③ 神道の精神
- ④ 平等    ⑤ 感謝    ⑥ 利他    ⑦ 精進    ⑧ 寛容    ⑨ 忍耐
- ⑩ 平和    ⑪ 以和為貴 (和を以て貴しとなす)

19. 死によってすべてが終わるのではなく、肉体は死んでも魂はほろびない。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

20. 神や仏は目には見えないが、実際には存在する。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

21. 神社の行事や儀式に参加すると強い感動を受ける。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

22. 寺院の行事や儀式に参加すると強い感動を受ける。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

23. 科学が進歩しても、神や仏に対する信仰はなくなる。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

15. 仏にたよれば試験に受かったり、お金が儲かったり、病気が治ったりするような善いことが起きる。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

16. 迷っているときは、おみくじや占いなどに頼って決断するのが良い。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

17. 高い山に登ったり、奥深い木立の中にいると、何か神々しいものにふれて心が清められるような気がする。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

18. 祖先を敬い、供養することは大事なことである。あてはまると思うものに一つ○印をしてください。

- ① そう思う
- ② どちらかと言えばそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ そう思わない

心持ちで受け止めました。このとき、有力豪族たちの間では崇  
仏派と排仏派に立場が分かれました。その組み合わせとして正  
しいと思う番号に一つ○印をしてください。

①崇仏派・物部氏 — 排仏派・蘇我氏

②崇仏派・蘇我氏 — 排仏派・物部氏

11. 最初期は呪術的・政治的な思想のもとで展開していった仏教  
でしたが、信仰の面から仏教を捉え、国を治めていくのに援用  
したのが聖徳太子（厩戸王）でした。その精神をあらわす言葉  
として「和をもって貴しとなす」がありますが、この言葉の出  
典として正しいものに○印をしてください。

①十七条憲法      ②法華義疏      ③往生要集      ④歎異抄

12. 浄土真宗を開いた親鸞聖人が「和国の教主（日本の釈尊）」と  
して仰いだ人物として正しいものに一つ○印をしてください。

①鑑真和上      ②空也上人      ③聖徳太子      ④法然上人

13. 親鸞聖人の仏教思想を示す用語に「悪人正機」があります。  
その意味としてもっとも適切だと思うものに一つ○印をしてく  
ださい。

①罪を犯したものでも救われるので、悪の限りをつくしてもよい

②仏の心につつまれ、自身の罪悪性に気づいたものが救われる

14. 神にたよれば試験に受かったり、お金が儲かったり、病気が  
治ったりするような善いことが起きる。あてはまると思うもの  
に一つ○印をしてください。

①そう思う

②どちらかと言えばそう思う

③あまりそう思わない

④そう思わない

6. 仏教の究極の目標は「仏と成る」ことにあると言われていますが、「仏」とはどのようなものだと思いますか？あてはまるものに○印をしてください。(複数回答可)

- ①真理に目覚めたもの
- ②変わらぬ真理そのもの
- ③亡くなった人
- ④人々を救うもの
- ⑤人々に災いをもたらすもの
- ⑥霊魂
- ⑦神

7. 仏教の教えを記した書物の名前として正しいものに一つ○印をしてください。

- ①聖書      ②クルアーン      ③経典(お経)      ④論語

8. 紀元前後に登場する仏教をとくに大乘仏教といいます。それが伝わった経路として正しいと思う番号に一つ○印をしてください。

- ①インド→セイロン島→東南アジア
- ②インド→西域(シルクロード)→中国→日本

9. 日本に仏教が伝来したことについては、『日本書紀』や『元興寺縁起』、『上宮法王帝説』などに記されています。伝来の正式年代については記述が異なりますが、時代はほぼ一致しています。次の中から正しいと思うものを選んで一つ○印をしてください。

- ①5世紀      ②6世紀      ③7世紀      ④8世紀

10. 仏教(仏像)が伝わったとき、日本ではこれを「異国の神」「他国の神」として日本にもともとあった神祇信仰と同じような

- ①よい印象をもっている
- ②どちらかと言えばよい印象をもっている
- ③あまりよい印象をもっていない
- ④よい印象をもっていない

2. 人類にとって、宗教は必要であると思いますか？（一つ○印）

- ①そう思う
- ②どちらかと言えばそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④そう思わない

3. 宗教には諸類型ありますが、次の中で、知っている言葉に○印をしてください。（複数回答可）

- ①原始宗教      ②民族宗教      ③世界宗教      ④自然宗教
- ⑤創唱宗教      ⑥一神教          ⑦多神教

4. 以下に示す宗教は、3で挙げたどの類型に分類されると思いますか？あてはまるものに○印をしてください。（複数回答可）

- 1) ユダヤ教・・・①原始宗教    ②民族宗教    ③世界宗教
- 2) キリスト教・・・①原始宗教    ②民族宗教    ③世界宗教
- 3) イスラム教・・・①原始宗教    ②民族宗教    ③世界宗教
- 4) ヒンドゥー教・・・①原始宗教    ②民族宗教    ③世界宗教
- 5) 仏教・・・・・・・①原始宗教    ②民族宗教    ③世界宗教
- 6) 神道・・・・・・・①原始宗教    ②民族宗教    ③世界宗教

5. 仏教を開いた人物名として正しいものに○印をしてください。

- ①イエス・キリスト
- ②ムハンマド
- ③ゴータマ・シッダールタ
- ④孔子

調査対象者は、本学教育学部（河智義邦担当）、外国語学部、短期大学部（蜷川祥美担当）の全学生である。ただし、本学では、教育学部、外国語学部の学生は、宗教学Ⅰ（前期15回開講）、宗教学Ⅱ（後期15回開講）が必修であるのに対し、短期大学部は宗教学（半期15回開講）のみが必修となっている。短期大学部の学生に対しては、先述の目次のうち下線を付した箇所のみを授業内容としている。

「宗教学アンケート」の調査対象者数は以下の通りである。

	第1回授業時	最終回授業時
教育学部1年生	404名	408名
外国語学部1年生	130名	120名
短期大学部1年生	245名	229名
計	779名	757名

教育学部では、2年次以上の学生の再履修等のため、若干調査対象学生数が増加しており、外国語学部や短期大学部では、最終回の授業時にはインフルエンザの流行や天候不良が重なり、欠席者がでたため、第1回授業時より調査対象者数が減少している。

「宗教学アンケート」は、以下の28項目にわたって調査を行った。

このうち、1、2、14～25は、学生の宗教観についての調査であり、3～13は、宗教学の授業内容に関する理解度についての調査、26～27は、本学の建学の精神についての調査である。

なお、3～13、27、28については、『宗教学ノート』の「授業のポイント」欄に記載し、理解度の向上を図った。

以下が「宗教学アンケート」の実際の項目である。

### 宗教学 アンケート

このアンケートは、宗教学の理解度を調査するためのもので、成績評価とは無関係です。

1. 宗教を信じる人々について、どのような印象をもっていますか？（一つ○印）



<u>信心・称名</u>	・・・138頁
<u>悪人正機</u>	・・・138頁
<u>往生浄土・正定聚</u>	・・・142頁
⑧室町期以降の日本仏教の展開	・・・150頁
⑨現代人と浄土真宗	・・・156頁
参考文献	・・・160頁

本学は、設立当初より浄土真宗本願寺派の宗門関係学校であり、建学の精神である仏教精神の周知を図る必要性から、必修授業である「宗教学」の講義内容に、仏教思想、特に浄土真宗の精神に対する比重が多いことが特徴となっている。

また、本研究で行った「宗教学アンケート」に於ける建学の精神の理解度向上を図るため、本文を奇数頁のみとし、偶数頁には、「メモ欄」と「授業のポイント」を設定した。「授業のポイント」には、下記の例のように、「宗教学アンケート」の項目をクイズ形式で示し、授業中に学生に記入させた。

\* 「授業のポイント」例

<b>授業のポイント</b>		
以下の言葉の中から、本学の建学の精神と関連するものを選んで○印をしてください。(複数回答可)		
1、キリスト教の精神	2、仏教の精神	3、神道の精神
4、平等	5、感謝	6、利他
7、精進	8、寛容	
9、忍耐	10、平和	11、以和為貴

2、「宗教学アンケート」の実施について

平成22年度の宗教学の授業の第1回と最終回に30分間で「宗教学アンケート」を行った。

③カルトや原理主義	・ ・ ・ ・ 18頁
II 仏教の歴史と思想	
①仏教以前のインド思想	・ ・ ・ ・ 22頁
②釈尊の生涯（誕生～求道）	・ ・ ・ ・ 28頁
③釈尊の生涯（成道～伝道）	・ ・ ・ ・ 36頁
④釈尊の生涯（晩年～入滅）	・ ・ ・ ・ 48頁
⑤仏教の中心思想	
縁起の教え	・ ・ ・ ・ 54頁
四法印（三法印）	・ ・ ・ ・ 54頁
四諦八正道	・ ・ ・ ・ 60頁
十二縁起	・ ・ ・ ・ 66頁
⑥釈尊入滅後の仏教教団	・ ・ ・ ・ 70頁
⑦大乘仏教の興起とその特色	・ ・ ・ ・ 76頁
⑧大乘仏教の伝播	・ ・ ・ ・ 82頁
⑨中国への伝播	・ ・ ・ ・ 84頁

## 宗教学 II

### I 日本古来の宗教

①神道の思想	・ ・ ・ ・ 90頁
②日本人の神概念	・ ・ ・ ・ 94頁

### II 日本仏教の歴史と思想

①日本への仏教の伝播	・ ・ ・ ・ 96頁
②聖徳太子の仏教信仰	・ ・ ・ 100頁
③律令期～鎌倉期の仏教	・ ・ ・ 104頁
④親鸞聖人の生涯（誕生～回心）	・ ・ ・ 112頁
⑤親鸞聖人の生涯（流罪～『教行信証』の撰述）	・ ・ ・ 118頁
⑥親鸞聖人の生涯（帰洛～往生）	・ ・ ・ 124頁
⑦浄土真宗の中心思想	・ ・ ・ 132頁
他力本願	・ ・ ・ 134頁

大学・短期大学部が、専門の学問研究の場であることはいうまでもないことであるが、建学の精神にのっとった宗教的情操を重視するの  
が、本学の特徴である。

そこで、本学では全学部において必修授業である「宗教学Ⅰ・Ⅱ」  
(教育学部・外国語学部・経済情報学部)「宗教学」(短期大学部)を開  
講し、学生に、古来より人類が培ってきた諸宗教の思想、特に仏教の  
思想が示す理想の人間像を学んでもらってきた。

本研究は、平成20年12月1日から平成23年3月31日までの2年4ヶ  
月間、浄土真宗本願寺派教学助成財団の教学研究資金助成を用いて行っ  
た。まず、平成21年度は、第1回目の授業時に、予備調査として宗教  
学アンケートを行い、その傾向を分析しつつ、テキスト『岐阜聖徳学  
園大学宗教学ノート』の作成期間にあてた。そして、平成22年度は、  
『岐阜聖徳学園大学宗教学ノート』を配布し、第1回目の授業時と、最  
終授業時に「宗教学アンケート」を行い、建学の精神についての理解  
度の調査分析を行った。

## 1、『岐阜聖徳学園大学宗教学ノート』について

平成21年度の予備調査を承けて、平成22年3月31日に『岐阜聖徳学  
園大学宗教学ノート』を発行、本学教育学部、外国語学部、短期大学  
部学生に配布し、必修授業「宗教学」のテキストとした。

その目次は、以下の通りである。

<u>はじめに</u>	・・・1頁
目次	・・・2頁
宗教学Ⅰ	
<u>本学の建学の精神について</u>	・・・4頁
<u>Ⅰ 宗教の意義</u>	
① <u>宗教の語義</u>	・・・12頁
② <u>原始宗教、民族宗教と世界宗教</u>	・・・12頁

# 建学の精神の理解度と教育方法の調査研究

－ 岐阜聖徳学園大学・短期大学部必修科目「宗教学」受講生を対象として －

蜷 川 祥 美  
河 智 義 邦

## はじめに

昭和37年（1962）12月に設置された学校法人聖徳学園の建学の精神（設置目的）は「仏教精神を基調として学校教育を行う」ことである。この精神は、昭和41年（1966）1月の岐阜南女子短期大学（現在は岐阜聖徳学園大学短期大学部に名称変更）の開学、昭和47年（1972）4月の聖徳学園岐阜教育大学（現在は岐阜聖徳学園大学に名称変更）の開学にも受け継がれており、現在では以下のように表記を行って、周知を図っている。

### 建学の精神

学校法人聖徳学園の設立趣旨は、仏教精神を基調として学校教育を行うところにある。

本学は、この仏教精神とりわけ大乘仏教の精神を建学の精神とし、浄土真宗の宗祖親鸞聖人が、和国の教主と敬慕された聖徳太子の「以和為貴」（和をもって貴しとなす）の聖句をその具現化として象徴的に掲げ、「平等」「寛容」「利他」の大乘仏教の精神を体する人格の形成をめざしている。

また、学則第1章総則第1条には、「本学は教育基本法及び学校教育法の定めるところにより、建学の精神にのっとり宗教的情操を基調として、教養を培い、広く知識を授けるとともに、深く専門の諸学科を教授研究し、それぞれの学部の特徴を発揮し、もって現代社会における有為な人材を育成することを目的とする」とある。

とう」の一言でも言って亡くなっていくという形にできないのか、と制作委員会に伝えました。それが「いのちのバトンタッチ」なのだからと。いくら言っても駄目でした。それでは伝わらない。ここに私が根本的にこだわった理由があるということを、みなさんに申し上げて終わりにさせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所開所10周年記念式典  
記念講演 2010年10月27日（水）  
於岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス 多目的ホール

見た時、おばあちゃんの目はにっこりとほほ笑んで、そのまま息を引き取られました。今まで病気を診ていたけれど、人間を見ていなかった。私はハッと思い、辞表を書き、大学病院を辞めて、故郷郡上八幡へと戻り往診医をしています、と目に涙を浮かべて話されました。郡上八幡でそんな立派な先生にお会いしました。

やはり現場というのは大事なんです。生と死の現場に立たない限り本当の真実は分からないと、私はお伝えしたいわけです。

最後に井村先生が大学ノートに書き遺された文章を読み上げて終わりにしたいと思います。

みなさん、どうもありがとうございます。北陸の冬は静かです。長い冬の期間を耐え忍べば、雪解けのあと芽を吹き出す、チューリップの季節がやってきます。ありがとうございます、みなさん。人の心はいいものですね。思いやりと思いやり、それらが重なり合う波間に、私は幸福に漂い、眠りにつこうとしています。幸せです。ありがとうございます、みなさん。ほんとうにありがとうございます。

ありがとうございます、ありがとうございますを連発して井村先生はお亡くなりになりました。親鸞聖人は、『教行信証』の後書きに、道綽禅師の『安楽集』を引用して、「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ、連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す」とあります。先にあらゆるものが差別なく輝いている世界へと往った人、お浄土へと往った人が、後に残った人を導くのですよ、だからそちらをお訪ねなさいと、きちっと書き押さしておられます。

最後になりましたが、映画を通して、最終場面は何なのかと。私は「おくりびと」の最終場面が死後硬直した主人公の父親の手に石が握られていたことが問題だと思うのです。そのようなことでは困るのです。そのような状況では、「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ」ということが伝わらないわけです。このことを制作委員会に伝えても理解されない。息絶え絶えでもいいから、そのお父さんが生きている形で、納棺夫に成り下がった息子の手でも握って「ありが

場から生まれた詩が今日の『いのちのバトンタッチ』という演題になっているわけです。

『いのちのバトンタッチ』

人は必ず死ぬのだから  
いのちのバトンタッチがあるのです

死に臨んで先に往く人が  
「ありがとう」と云えば  
残る人が  
「ありがとう」と応える  
そんなバトンタッチがあるのです

死から目をそむけている人は  
見そこなうかもしれませんが  
目と目で交わす一瞬の  
いのちのバトンタッチがあるのです

「ありがとう」と言えない場合もあります。しかし、現場に行ったら目が「ありがとう」と言っているんです。この間、岐阜県の郡上八幡にあるお寺さんへ講演に行ってきました。講演が終わって控室へ行ったら一人の立派な紳士が入ってこられました。私は医師ですけれど、東京の大学病院に30年間勤めておりました。その時、教授や先輩から一分一秒でも命を延ばすのが、医者使命であると教育され、私もそれを信じて30年間やってきました。ところがある日、3日前から口も利かなくなっておばあちゃんを担当しました。3日前から口も利けないし、もうそろそろだなあと思って私はモニターを見ていました。すると何か呼びかけられたような気がしましたので、振り返って近づくと、2・3日、口も利くことがなかった老婆が「先生、こっち見て」と言ったのです。はっと私は自分を振り返って、おばあちゃん目を

の臨終の場にいたということです。死というものを五感で認識しているということです。この五感で認識するという世界が大事なんです。本木くんがインドのベナレスに行ったからこそ、ここでは生と死が繋がっているのではないかとことを五感で認識したわけです。だからこそいえる文章があります。「その時、おじいちゃんは僕に本当の人のいのちの尊さを教えて下さったように思います。それに最後に、どうしても忘れられないことがあります。それはおじいちゃんの顔です。それはおじいちゃんの遺体の笑顔です。」という文章は、その場にいた子でなければかけないものです。なぜならば、2日後の葬祭場でお棺の蓋を開けて顔を見たときは、それはデスマスクですから、おじいちゃんの遺体の笑顔です、などという文章は出てこないのです。これは生と死が交差する死の瞬間にしか死の実相はないです。死の実相というのは、生の実相でもあります。

例えば、アメリカのエリザベス・キューブラー・ロスという方が著した『死の瞬間』という書物があります。あの方がなぜ医学から宗教的になったかと申しますと、死ぬ瞬間ばかり見ていたわけです。死んだ後のデスマスクばかり見ていたわけではないのです。ですから『死の瞬間』という本が世界的ベストセラーになりましたね。あるいは、マザー・テレサなども死に行く人を腕の中で抱えて見ていたわけです。宮沢賢治もそうです。妹トシが死ぬ時、腕の中で死んでいるわけです。「あめゆじゅとてちてけんじゃ」と言って死んでいった妹トシ。「あめゆ」というのは、みぞれのことです。みぞれを取って来て賢治兄ちゃん、と何回も繰り返す素晴らしい詩があります。「永訣の朝」という詩です。そのような死の現場から生まれた宮沢賢治最高傑作と言われている「永訣の朝」や、「無声慟哭」、「松の針」に続く一連の挽歌です。

### いのちのバトンタッチ

最初に申しました。オバマ大統領がハワイのおばあちゃんのもとへ、現場へ行ったということはすごいことだと。もし私が叔父の臨終の場に行っていなかったら、今でも叔父を憎んでいると思います。その現



このように当時の彼は警察で供述しております。もしこの供述があ  
の事件の根っこにある動機ならば、大人社会が少年たちに死の現場を見  
せまい、死の事は語るまい、苦しみや悲しみを与えまいとして育てる  
ことが、親の役目のような社会を構築したからではないだろうかと思  
いました。このように私は思えてなりません。もっと分かり易くお伝  
えするために、別の例をお伝えしたいと思います。

九州のあるお寺へ講演に出かけました。二日市にあるお寺です。出  
光の会長を務められた石田さんのご長男が養子に入られ、住職をなさ  
ておられるお寺です。ちょうど行きました時に、石田さんの一周忌で  
した。帰り際に、石田さんの奥様と住職より一冊の小冊子を頂きました。  
それはどのような冊子かと申しますと、17人の親族が石田さんの  
臨終の場において、その時の感想文を書かれたものでした。その中で一  
番素晴らしいのが、14歳のお孫さんの作文でした。14歳と言えば、先  
ほどの酒鬼薔薇聖斗の少年と同じ年です。

僕はおじいちゃんからいろんなことを教えてもらいました。特に  
大切なことを教えてもらったのは、おじいちゃんが亡くなる前の  
3日間でした。今までテレビなどで人が死ぬと、周りの人があま  
りにも辛そうに泣いているのを見て、なんでそこまで悲しいのだ  
ろうかと思っていました。しかし、いざ僕のおじいちゃんが亡く  
なろうとしているところに、そばにいて僕はとても寂しく、悲し  
く、辛くて涙が止まりませんでした。その時、おじいちゃんは僕  
に本当の人のいのちの尊さを教えて下さったように思います。そ  
れに最後に、どうしても忘れられないことがあります。それはお  
じいちゃんの顔です。それはおじいちゃんの遺体の笑顔です。と  
てもおらかな笑顔でした。いつまでも僕を見守って下さるこ  
とを約束しておられるような笑顔でした。おじいちゃん、ありが  
とございました。

こんな作文です。私が何を申し上げたいのかといいますと、この2人  
の14歳の少年の違いを申し上げたいわけです。どこが違うのか。実  
に単純なことです。九州の石田少年の場合、おじいちゃんが亡くなるそ

動物もそうなんです。動物が亡くなった直後の顔というのも微笑んでいるような顔です。先日、京都大学の霊長類研究所の所長さんと対談した時にもこの話題になりました。すぐさま所長は、そりゃそうですよ、とおっしゃっておられました。ゴリラとか、サルとか動物というのは、死の瞬間まで死の概念が頭がないから、死に対する不安は生じないそうです。なるほどと思いました。人間の子供というのは、死の概念がまだ確立していませんから、大自然の摂理に随って受け入れていくのだそうです。ところが、私が納棺したおばあちゃん、おじいちゃんの中にはこういう人がおられました。「ようやく阿弥陀さまがお迎えに来られた。有り難いことです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言って死を迎えていかれる。この方々は、100パーセント死を受け入れています。ですからそのお顔も実にいい顔をしておられます。硬直してもなおいい顔をしておられます。死を受容するのか、しないのかということは、大変大きな問題です。その一つの例をご紹介しますと思います。

みなさんをご存知だと思いますが、平成9年に酒鬼薔薇聖斗事件がありました。14歳の少年が大事件を起こしました。日本中を震撼させました。その次の年に文芸春秋という会社が、警察の調べた供述調書をすっぱ抜きました。それをちょっとコピーして持ってきました。

君はなぜ人を殺そうなどと思ったのですか、という調査官の質問に対して、少年は次のように答えています。

僕は家族のことなどなんとも思っていなかったのですが、おばあちゃんだけは大事な人だったのです。そのおばあちゃんは、僕が小学校の時に死んでしまったのです。僕からおばあちゃんを奪い取っていったのは、死というものです。だから僕は死とは何かと思うようになったのです。だから僕は死とは何かをどうしても知りたくなり、最初はナメクジやカエルを殺していたのですが、その後は猫を殺していたのですが、町内の猫を何匹殺しても死とは何か分からないのです。やはり人間を殺してみなければ、本当のことは分からないと思うようになっていったのです。

父は目に涙を溜めて流し、顔は柔和な顔をして、光顔巍巍として、ありがとうと言った。叔父もあの時、井村先生と同じように、あらゆるものが輝いて見えていたのではないかと思います。看護婦さんも、叔母も、納棺夫に成り下がった私をも差別なく見えていた。そのように考えるしか理解できないわけです。私はそう信じるようになりました。私は、そのような世界を自分自身が見れなくとも、ジェット雲が見えさえすれば空にジェット機が飛んでいるのが分かるように、叔父の顔からそのような世界のあることを知らされたのです。

それからというもの、納棺夫をしていてお顔ばかりが気になりました。今まであれだけの死者に接しておりながら、全然記憶がありません。といいますのは、人間は毎日接しておりながら、何も気づかずに生きています。あるいは目を背けて仕事をしていたのではないかと思います。そのような思いに至りました。それからお顔ばかりを気にしながら見ているうちに、死者のお顔は、みんな清らかで安らかなお顔をしておられることに気がつきました。よっぽど生きた人の方がおどろおどろしい目つきをしています。特に、亡くなってすぐの方のお顔というのは、どのような死に方をされていても、みなさんいいお顔をしておられます。しかし、生き物は死んだ後に硬直します。冷たくなって硬くなっていきます。硬直した後のお顔があまりいい顔ではありません。死を受け入れた方のお顔は、清らかなお顔をされております。しかし、死を受け入れられず、もがき苦しんで抵抗した人のお顔は、あまりよくありません。亡くなってすぐのお顔はいい顔をされておるのですが、最近の形状記憶シャツではありませんが、硬直すると、もがき苦しんで抵抗した時の顔に戻るような気がいたします。

### 臨終に学ぶいのち

ローマの哲学者セネカ.L.Aという人は、「人間が死を恐れたりするのは、死の付随物を見た時である」というようなことを言っております。その通りだと思います。子供が交通事故などでお亡くなりになる場合、みないい顔をしております。微笑んで眠っているような顔です。これは

るのです。部屋へ戻って見た妻もまた手を合わせたいほど尊く輝いて見えました。

みなさん考えてみてください。自分が癌になって、手術をして治ったかなあとって検査に行ったら、全身に癌が転移していた。その晩に、かっこいい言葉で、いい文章を書こうとは思わないですよ。恐らく井村先生は、自分が見た光景を、ありのままの光景を自分の言葉で書いておられると思います。その中に「犬が、垂れ始めた稲穂が、雑草が、小石までが輝いて光って見えるのです」という文章があります。こんな文章が書けるわけですね。この文章を読んでいるときに、私は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』という作品を思い出しました。

『銀河鉄道の夜』は何が書いてあるのかといいますと、中有の世界の事が書いてあります。中有というのは中陰といいますね。四十九日のことを書いてあるのです。下に北上川がキラキラと流れている。上には天の川の星がキラキラと光っている。それは汽車が上がろうとした瞬間に宮沢賢治はこんな文章を書いておりますね。「河原のすすきが光り、河原の小石が水晶のように輝き」と書いてあります。河原のすすきというのは、雑草ですね。要するに、あらゆるものが差別なく輝いて見える世界が描かれているということです。私は、はっと思いました。そういうことかと思いました。人間は、生と死が限りなく近づくか、あるいは生きていながら100パーセント死を受け入れた時、井村先生の言葉を借りるならば「レントゲン室を出る時、私は決心しました。歩けるところまで歩いて行こう」ということですね。これは死を受け入れた時の言葉です。その次の瞬間、駐車場で見た光景は、あらゆるものが差別なく輝いて見える世界でありますね。

私ははっと思いました。あんなに構えて叔父の病室へと入って行った。何を言われるのかと。あれほど辞めろと言われた納棺夫をまだやっているわけです。叔父の価値観を分かっていたから、家柄、地位、名誉、出世でしたから。私は、小学校、中学校の時代、叔父の言うなりに一生懸命にやってきました。しかし、挫折していく、最後は納棺夫に成り下がった。罵倒される。しかし、あの時入って行った時、叔

は、当時のプラスチックでできた長い酸素吸入がついていまして、顔がよく見えないわけです。それで、叔母の声に促されて叔父に近づき、ベッドの横の椅子に座りました。その瞬間、意識不明と聞いていた叔父が、手を震わせながら出してくるわけです。またドキッと、思わず叔父の手を握った瞬間でした。叔父の目からぼろっと大粒の涙が出て、口や何か動いていました。私は叔母に、これ何を言っているんだろうかと尋ねたら、「ありがとう」って言っているんじゃないと言った瞬間に、私の耳にも「ありがとう」と聞こえました。聞こえた瞬間でした、私の目からも大粒の涙がこぼれ、「叔父さん、すいません、勘弁してください」という具合になり、土下座して叔父の手を握っておりました。泣きながら帰りました。家についたときに、叔母から電話がありまして、あなたが病室を出ていった時、叔父は息を引き取ったとのことでした。

そんな叔父の葬式のすぐ後でした。私の文学友人で、砺波市に住むお寺の住職がおりました。その住職から一冊の本が届きました。その本はどのような本かと申しますと、その住職の姉さんが砺波市の井村病院に嫁いでおられました。32歳であった息子の名前は、井村和清といいます。32歳の時に癌で亡くなります。癌になってから1年間日記を書いておりまして、その日記を整理して本にしたのが、私の友人の文学仲間の住職でした。それを読み始めた途端に涙が出て読めなくなりました。井村先生が、膝にできた癌を手術によって取って、治ったと思い再検査に行ったら全身に癌が転移していた。その晩の日記をご紹介したいと思います。

癌が肺へ転移した時、覚悟はしていたものの、私の背中は一瞬凍りつきました。その転移数は1つや2つではないのです。レントゲン室を出る時、私は決心しました。歩けるところまで歩いて行こう。その日の夕暮、駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとっても明るいのです。スーパーへ行く買い物客が輝いて見える。走り回る子供たちが輝いて見える。犬が、垂れ始めた稲穂が、雑草が、小石までが輝いて光って見え

ら、私は、現場というのは死の現場だと伝えました。びんと張った緊張感だとか、臨場感だとか、日常生活にはないそのような場というものがあるんだと。オーディションやマネキンなんか使っても何の意味もないですよ。やはりその場に立ち会わないと駄目ですよと伝えました。

彼は偉いですね。札幌の納棺師協会で3回、酒田の葬儀社で2回、顔を隠すようにして、助手で現場に立ちましたね。そして、その中で一番緊張感のあった現場の事を思い出しながら、撮影をしましたと後日聞きました。真面目というか、私は立派だなあと思います。

私もきちっとやるようになりましてから、会社に礼状が来たり、菓子折りを持って挨拶に来られたりということになっていくわけです。それでなくても忙しいのに、だんだんと忙しくなっていくって、違った葬儀社のお手伝いにまで行かなければならなくなりました。その時代は誰もやってくれないわけです。新しい納棺師が来たと思ったら辞めていく。そのような状態でした。そんな中で、私も疲れてくるし、作家になる夢も絶たれ、友達とも会っていない、親戚とも会っていない。なんか心の中がモヤモヤとして納棺師を辞めようと思ひまして、また辞表を書いて持ち歩いておりました。

### 終末の光顔巍巍

そんなある日、お袋から電話がありました。以前、私に親族の恥だと言った叔父が末期癌で意識不明の危篤状態だから、一度だけでも顔を出しなさいとの内容でした。私はその電話を聞いた瞬間に、ざまぁ見ろと思いました。あれだけ育てて頂いても、最後に親族の恥だと言われたことしか覚えていませんでした。しかし、意識不明であるならば一度行こうかと思いました。それで、病室をノックして入った途端に、叔父の連れ合いの叔母が、富山弁丸出しで「あれ、あんたなんちゅうええとこに来らっしゃった。うれしや。さっきまで意識不明やったけれども、今、気がついておられる」と言うわけです。私はドキッとしまして、帰ろうかと思ひましたが、そういう訳にもいかず、叔母に手を引かれて中に入りました。ほっとしました。といひますの

られるようですね。

## 納棺という臨場

何はともあれ、私は丸ごと認められたような気持になりました。翌日から、これまで汚い服を着て嫌々やっていたわけですが、どうせやるならって気持ちになりまして、医療機器店に入って行きまして、お医者さんが着られる白い服を一式買いました。その横にあったお医者さんの往診用のかばんも買って、その中に全部入れました。お坊さんが七条袈裟をかばんに入れて持っていくように、自宅葬の時は、そのかばんを持って出かけていきました。礼節にも服装にも気を遣いながら納棺をしました。人間は結果として同じことをしておりまして、嫌々やっているのと、きちっとやっているのでは雲泥の差があります。かつ社会的評価が違ってくるといことも学びました。

あるところに行きまして、85歳のおばあちゃんをお棺に入れて、通夜祭壇の前に置きました。それから洗面所を借りて手を洗いに行きます。洗って帰ってまいりましたら、なぜかその家の場合、座布団が敷いてありまして、お茶まで用意してありました。白い服を着たまま、座布団の上でお茶を頂いておりましたら、あっちの方から90歳ぐらいのおばあちゃんが、這って来られまして言うんですね。「先生様、私が死んだらあなた様に来てもらえんかね」って予約まで頂けるようになりました。生前予約でございます。以前でしたら、汚い服を着て嫌々しておりましたら、ある家などでは、お通夜が始まるから早く帰れと、追い出されるように帰されたこともありました。それが白い服を着てきちっとやるだけで、座布団が敷いてあって、お茶が出て、先生に様がついて、予約まで頂くようになりました。ギャップというのはすごいですね。

私は本木くんが鰯の刺身を二切れ食べてくれてから、握手をしました。すると彼が、キーワードは何でしょうか、ポイントは何でしょうか教えてくださいと言うものですから、私は、服装と現場が大事ですよとお伝えしました。また彼が、現場とは何ですか、と聞くものですか

という詩です。少年は丸ごと認めていく力を持っています。とんぼもゴキブリも同じ昆虫だという視点を持っています。しかし、お母さんは分けて考えていますね。今どきのお母さんというのは、近代ヨーロッパ思想のヒューマニズムの中で育っています。ヒューマニズムというのは、日本語に訳しますと、人間中心主義ということです。人間に都合のいいものは、可哀想だから逃がしてあげなさいとなります。けれども人間に都合の悪いものは、叩き殺しても痛みさえ感じないわけです。そのような社会に我々は住んでいます。ブッシュ大統領は、フセイン大統領を殺しても、きっと痛みも感じませんよね。

人間に都合のいいものであればまだよかったです、最近では自分に都合のいいものというようになってきているように思います。例えば、裁判の判決文が全部同じになってきたりしていますよね。あまりにも身勝手な、自分中心的な犯罪ばかりです。そんな犯罪ばかりです。丸ごと認める者をも排除してしまうような社会に、なっているような気がいたします。

秋葉原の事件がありました。事件を起こした加藤という青年は、小学校の時に学校で1番か2番につくほど成績が良かったようですね。しかし、思春期で成績が下がった。お母さんは教育熱心者で、なんとか成績を取り戻そうと一生懸命やった。ところがおばあちゃんの様子を見るに見かねて、そんなに無理をしなくてもありのまま育てたらと言ったようで、それ以来、母親はおばあちゃんと会わせなかったということです。私が今何を言っているのかといいますと、おばあちゃんが「あるがままに育てたら」といったのは、ありのままを一回は認めようとしたわけですね。そのような丸ごと認めていくようなものさえも、排除していつてしまう社会になっているのではないかと思います。これは危険ですね。

ゴキブリや蛆は叩き殺しても心に痛みを感じない。私が納棺を始めた時に、蛆虫と人に言われたものですから、人に叩き殺されたくないと思ひまして、私はこの詩を書いた少年が大好きですね。人間は誰も私の事を信用してくれない。家のタマだけが私を丸ごと信用してくれていると言って、猫とだけ生きておられるおばあちゃんが何十万とお



の仕事をおののまま続けていけそうな気がした。

文学的にこのようなことを書いておりますけれども、あったことは事実でございます。私が大学を中退して、お袋の屋台のような店を手伝っているときに会った人でございます。彼女のお父さんというのは、富山で古くから今でもあります製薬会社の社長さんでありました。コンプレックスで会いに行けませんでした。しかし、彼女は、私の横に座って寄り添うようにお父さんの額を撫でて、また頬を撫でたりしながら、ときどき私の方を向いて涙を見ながら、汗を拭いてくれました。涙目でございますけれども、私がやっていることも含めて、何か丸ごと認めてくれているように私は感じたんですね。人間、追い詰められて追い詰められて、もう行き場がないくらい追い詰められた時でも、何かに丸ごと認められたら、生きているけるのではないかなあと思いますね。なんでもいいです。

## 理不尽な現代社会

今日の社会は、何かを丸ごと受け止めるという力が本当に衰弱しています。何かにつけて、分別して、頭のいい子、頭の悪い子などと言って、科学的合理思考とでもいいでしょうか。科学の科という字は、分けるという意味もあります。理科、社会科、内科、外科などというように別けて言ったりしますでしょ。トータルではないわけです。科学時代に生きると、そのような癖がついているのではないかなあとさえ思います。

ある少年のこんな詩があります。小学校4年生の男の子の詩です。

今日、学校の帰りにとんぼを捕まえて家に帰ったら、お母さんが可哀想だから放してあげなさいと言った。僕はとんぼを放してやった。とんぼは嬉しそうに空高く飛んで行った。それから僕が、台所へ行ったら、お母さんが箒でゴキブリをたたき殺していた。とんぼもゴキブリも昆虫なのに。

ので、ちょっと読み上げてみたいと思います。

今日の家は、行き先の略図を手渡されたときは気づかなかったんだが、玄関の前まで来てはと思った。東京から富山へ戻り、最初に付き合っていた恋人の家であった。十年たっていた。腫の澄んだ子だった。コンサートや美術展などよく行った。父がうるさいからと午後十時までにはたびたびこの家まで送ってきたものだった。車の中でキスしようとする、父に会ってくれたらと言って拒絶されたこともあった。その後も父に会ってくれと何回も誘われたが、結局会うことなく終わってしまった。しかし、醜い別れ方ではなかった。横浜へ嫁いだと風の便りで聞いていた。来ないかもしれないと思い、意を決して入って行った。本人は見当たらなかった。ほっとして湯灌を行った。もう相当の数をこなし、誰が見てみもプロと思うほど手際よくなっていた。しかし、汗だけは最初の時と同様に、死体に向かって作業を始めた途端に出てくる。額の汗が落ちそうになったので、袖で額の汗を拭こうとしたとき、いつのまに横に座っていたのか、額を拭いてくれる人がいた。澄んだ大きな目いっぱい涙を溜めた彼女であった。作業が終わるまで横に座って、私の顔の汗を拭いていた。退去するとき、彼女の弟らしき喪主が、両手をついて丁寧に御礼を言った。その後ろに立ったままの彼女の目が、何かいっぱい語りかけているように思えてならなかった。車に乗ってからも、涙を溜めた驚きの目が脳裏から離れなかった。あれほど父に会ってくれと懇願した彼女である。きっとお父さんを愛していたのであろうし、愛されていたのであろう。その父の死の悲しみの中で、その遺体を湯灌する私を見た驚きは察するに余りある。しかし、その驚きや涙の奥に何かがあった。私の横に寄り添うように座って、汗を拭き続けた行為も、普通の次元の行為ではない。彼女の夫も親族もみんな見ている中での行為である。軽蔑や憐みや同情など微塵もない。男と女の関係をも超えた何かを感じた。私の全存在がありのまま認められたように感じた。そう思うとうれしくなった。こ

て、死体を拭いて歩くらしいと広まっていきました。

そのような状況が続きますと、だんだんと仕事に対するコンプレックスのようなものを抱くようになりました。誰にも会わなくなりました。道を歩くにしても知り合いに会うことを恐れるようになります。隠れるように会社へ行って、隠れるように生きて、閉じこもりのような状態で家にいるというような毎日でした。

そんなある日、吉村昭さんから手紙が来ました。あの頃、文学者の彼は編集長をしておりました。丹羽先生が亡くなられ、『文学者』という雑誌は廃刊となりまして、書き溜めていた小説を吉村さんのところへ送っていました。その手紙には、「送られてきた小説の一作目は将来性があると思ってなんとか雑誌に載せたけれども、二作目は全く読むに堪えない」とぼろくそに書いてありました。それで私はがっくりときまして、今まで書いていた原稿用紙を全部燃やしたりして、作家になる夢も絶たれたような気がいたしました。友達もいない、親戚とも会っていない、誰とも会っていないという状態の中で、妻のそばに近寄ろうとしたら、妻にもこう言われました。「今日も納棺の仕事をしてきたのか」と。それで「今日は2件してきた」と言ったら、「死体を触ってきたような手で触られたらその気になれない」と言われました。その中で妻から言われた言葉が、汚らわしいという言葉でした。「おくりびと」の映画の中で、広末涼子さんがそのまま使っていましたので、びっくりしましたがけれども。そんなことよりも、妻は、「子供が小学校に入るまでには今の仕事をやめてほしい」と言ってきました。「お父さんの仕事は何ですか」と聞かれたときに、娘が答えられないようでは困るということです。私は、それもそうだなあと思いました。それで、私は納棺夫の仕事をやめようと思いました。

### 納棺夫の尊厳

そのような思いになりましたので、次の日に辞表を書いて持ってきました。その日の日中でした。一つの事件に出会います。この事件がなかったら辞めていたと思います。その事件の事を本に書きました

ことになってしまったというわけです。そのうちに2、3人だった会社も10人ほどの会社になりました。

毎日、お葬式に出ていくようになった頃のことです。いつのまにか会社の中でお葬式にでなくてもいいと言われてまして、納棺専従社員のようになっていました。祭壇などを組みに行っていたら、他でできたお葬儀の納棺に間に合わないわけです。ですから、いつも会社において、倉庫の掃除をしたり、お棺を作ったりしながら、納棺の時間になったら出ていくというような特殊な社員に、私はなってしまったんですね。

### 納棺夫への差別

その頃の富山県では、火葬場で働いておられる方の事を隠坊といいました。この隠坊というのは、差別用語です。この間、大阪で同和の大会に行ったら差別用語だから使ってはいけないといわれました。ともかく、その隠坊の住んでおられる隣の村の御嬢さんがお嫁に行くという時に、隠坊が住んでいるような村の娘はいらないとまで言われる時代でした。つまり、死に関わるということだけで嫌われるということです。そのような時代でした。ですから、私が納棺夫専従として働きだした途端、分家の叔父が突然現れましてこのようにいうわけです。「昨日法事の席でお前の話が出た。聞くところによればお前は死体を拭いて歩くというじゃないか。すぐにそんな仕事辞めろ。この狭い富山の町でそんな仕事に就かれたらわしら親族は町も歩けないじゃないか。お前は親族の恥だ」とまで言われました。会いたくない人に次から次に文句を言われると、こちらも反抗的になりますね。

あの頃の私もだいぶん歪んでおりました。人間は失敗と挫折を繰り返していきますと、いつのまにやら心の中に闇ができると申しますか、父を恨み、母を恨み、社会を恨みというように、歪んだ思想が身についてまいります。そのような状態でしたから、親族から絶交だと言われたら、こっちこそ絶交してやるというような具合でした。しかし、それだけではありませんでした。友達もいなくなりました。やがてニュースだけは速く伝わります。青木は何やら葬儀社のようなところに勤め

からさらしをくるくる巻いて、女性の場合ならばサーリーなどで巻いて、仕上げるということだそうです。

しかし、私とその世界に入った時は、すべて男性が行っていました。しかし、男性は酒ばっかり飲んでなかなか作業が進みませんね。人間は死にますと皮袋に水を入れたようなものです。袖を通すためちょっと傾げるだけでも、耳や鼻や目や口から汚物がたくさん出てまいります。そのようなものは、現在の皆さんは見たことがないと思います。なぜならば、90パーセント自宅外死亡ですから。病院や施設などで、看護婦さんや介護の方が綺麗にして下さいます。霊安室の一番近くにあるナースセンターにはエンゼルセットというものがあります。真綿の棒みたいなもの、紐みたいなのが何本か入っています。亡くなられた方の穴という穴に真綿を詰めて、不快感を抱かせないようにして、ご遺体をご自宅へお運びするわけです。みなさんは綺麗になったご遺体しか見ることはないからです。しかし、昔はそうではありませんでした。田んぼに行ってみると、おばあちゃんが死んでいたというような状況ですし、おまけにドライアイスなどはありません。今だとマイナス70度のドライアイスというものがありまして、胸の上に入れておきますと、食道の中まですべて凍ってしまいますから、何も外には出なくなるわけです。昔は、男衆が酒を飲みながら、嫌々始めて、仕舞いには横から口出しする長老みたいなのが現れます。まあ、いろいろなご家庭があるものです。葬儀社に関わっていた私は、身内の方々がされる納棺の様子を見ておりまして、ある時に口を出してしまいました。すると、出来るならなぜもっと早く言わないんだと叱られまして、お手伝いをする羽目になりました。当時、葬儀社というのは、納棺というのに関して全く手を出しておりませんでした。納棺というものは、親族、身内がやるという風習でしたから。しかし、それ以来私がたびたび納棺のお手伝いをしておりまして、ある時、その話が社長の耳に入ったわけです。すると、社長が私に今晚付き合えと言いまして、飲み屋へと連れ出されました。すると社長から、お前はそこまでやってくれていたのかと褒められまして、これからも熱心に頑張ってくれなどと言われながら、どんどんと深みにはまっていく

## 納棺と現代の事情

私はそのような世界へ行こうと思って入ったわけではありません。あくまでドライミルク問題を解決するために、アルバイトのつもりで入った会社が、葬儀を取り扱っていたということです。当時、私がそのような世界に入ったころは、富山県というのは6、7割が自宅葬でした。みなさんをご存知だか知りませんが、日本の国の昭和20年、30年代というのは、全国平均で90パーセントが自宅死亡でした。現在は、90パーセントが自宅外死亡です。病院か施設か、そのようなところで亡くなっておられます。私がそのような世界に入りました頃は、病院に入院しておられる方でも、何としてでも死ぬときは畳の上で死ぬんだという方が大勢おられました。医者が駄目だと言っても自宅へと戻り、親族に看取られながら死ぬという光景がまだある時代でした。そのような時代でしたから、納棺ということは100パーセント親族の方がやっておられました。いくらその場に村の長老などがおられても、一切口出しはしませんでした。納棺については、すべて親族が行うのだという暗黙の風習があるわけです。北陸の方は、ご遺体を他人に触らせるといってありませんでした。他の県は分かりませんが、主に身内の男の方がやっておられました。

この間、『おくりびと』の次の年にアカデミー賞を独占した『スラムドッグ\$ミリオネア』というインドの映画がありました。あの映画の原作者ヴィカス・スワラップが今大阪の総領事館に来ておられます。毎日新聞がスワラップさんと対談しろということで、総領事館まで行ってまいりました。その席で、『おくりびと』の話が出た時に、インドに『おくりびと』を持って行っても駄目ですよと言われました。どうしてですかと尋ねましたら、彼は、100パーセント今でも親族の方が、日本でいう納棺の儀式をやっておられるからです、とのことでした。『おくりびと』をインドの人に見せたら、なぜ身内の納棺を他人にやらせているのかと思われてしまうそうです。ところがインドでは、納棺を行うのはすべて女性だそうです。家にいる女性すべてが、亡くなった方の体を綺麗に拭いて、そこに白檀などのお香の粉をまぶして、その上

が子供を出産してアパートに戻ってきたわけですから、赤ん坊というものは、夜になると大泣きするわけですね。1時間置きぐらいに泣くわけです。小説を書いておりますら、六畳一間の中でギャーギャーと泣くわけです。やっぱり妻と子供を捨てて逃げてやろうと決意しまして、いつ逃げようかと考えておりました。

子供のドライミルクも買えないくらいお金がありませんでしたから、当然、妻とは喧嘩になりまして、ちゃぶ台がひっくり返るぐらいのものでした。すると、ちゃぶ台がひっくり返った拍子に私の顔に新聞が当たり、下に落ちた新聞の求人欄が目にとまったわけです。そこには「新生活互助会 社員募集」と書いてありました。何の会社か全くわかりませんでした。住所を見ると私のアパートのすぐそばでした。取りあえず、生活が苦しかったものですから、すぐに履歴書を書いて出向いて行ったわけです。その会社に行って入口の戸を開けたら、中には机が二つだけありました。その机に橋渡すようにしてお棺が置いてあったわけです。これは駄目だと思って、戸を閉めて帰ろうと思った時に、人間の出会いというものは不思議なものです。入口の戸が閉まる寸前のところで、その隙間からお棺の向こうに座っていた男と目が合ったわけです。それで、入っていかざるを得なくなりまして、仕方なしに入って行きました。入って行って取りあえずその履歴書を渡したら、その男はケラケラと笑い出しまして、君も倒産したのか、俺も倒産したんだと言ってきました。それでその男が私と一緒にやらないかと言って出してきたのが、平安閣という日本で最初に結婚ビジネスを起した会社のパンフレットでした。こんなことをやろう、と言ってくるわけです。と言われても、倒産して六畳一間の家に住んでいるような人間に対して、愛知県の別会社のパンフレットを出してと言われてもねえ。私は、この男は詐欺師だと思いましたね。取りあえず、私はこれまでの経緯を話して、ドライミルクも買えない状況なんだと伝えたら、その男は私に1万円札を手渡しして、その薬屋でドライミルクを買って、家に届けて出直してこいと言いました。私は、その1万円を貰ったばかりに、次の日からその会社に行くことになったわけです。

うに、私はたまたま入店してきた吉村昭さんとの出会いがありました。私は詩を書いておりましたが、吉村さんから小説を書いてみないのという勧めを受けまして、そっちの方が金になるかも知れないと思い書き始めたわけです。

## 納棺夫の縁

何を書いたかと申しますと、戦後10年ほどの時期、祖父が何もせず、ただぼーっと過ごしている中で、祖母が家のものを次から次へと売っていき、しまいには仏壇まで売り飛ばしてしまったことを淡々と書き上げたわけです。それを吉村さんのもとへ送りましたら、それがきっかけで、丹羽文雄先生が主催しておられた『文学者』という雑誌にその小説が掲載されました。その後、東京へ一度出てきなさいということで、出ていきました。

そうすると、吉村昭さんだとか、津村節子さんだとか、三谷晴美さんなどがおられました。三谷晴美さんというのは、瀬戸内寂聴さんのことです。あの頃は、近づくと手ごめにあいそうなくらい元気な方でした。そのようなそうそうたる方々がおられる中で、私の作品が一度雑誌に載ったわけです。そうするとどうなるのかと申しますと、私は富山駅から上野駅に着くまでに錯覚してしまいまして、作家にでもなったかのようなつもりになりました。それで、原稿用紙などを大量に買い込みまして、原稿を埋める毎日を過ごしておりましたら、富山のお店のことなどはすっかり忘れてしまいまして、倒産ということになったわけです。倒産は、するものではないですね。昨日までニコニコと魚を運んでくださっていた魚屋さんが、その日をさかいにえらい剣幕で怒鳴り込んでくるわけです。私はもういっそのこと東京へ逃げようと思いました。その時です。今まで黙っていた妻に足を掴まれまして、妊娠しているからと告白をされたわけです。ドキッとしましたね。ですから逃げるきっかけを失ってしまいました。その間に六畳一間のアパートに引っ越しまして、これぐらいの苦労をしなければ、いい小説は書けないなんて言い訳をしながら生活しておりました。それから妻



長く会っていなかったその母親が危篤という電報でして、帰ることにいたしました。なぜ母親と会っていなかったのかといいますと、中学2年生の時に母が恋しいと思って、母の住んでいる家を突然訪問しました。そうしたら、知らない男と寝ていたりしていたものですから、それ以来、母と子供の間には距離感ができてしまいました。とにかく、入院している母のもとに行きまして、母の経営していた飲み屋を手伝うようになりました。当時、東京の大学ではほとんど休講ばかりで講義がありませんでしたから、しばらく富山の方で手伝いをしていたわけです。それから、しばらくして飲み屋の近くを歩いていると、初恋の女性にばったりと会いまして、恋に落ちてしまいます。私は恋に夢中になってしましまして、東京にも戻らず、大学もそこで終わってしまうわけです。

ところが、そのころから私は詩を書きだしました。詩を2、3編書きましたら、富山の詩人の方々に大変誉められまして、新聞に掲載されたりしました。詩人氣取りで母親のお店を手伝いながら、恋人と過ごすうちに、母親と経営方針で喧嘩になりました。そして、私は母親の飲み屋を飛び出しまして、自分で店を始めました。絵描きやら詩人などの協力を得て、たいそう変わったお店をやり始めました。そうしたら来るお客というのは、貧乏お絵かきだとか、貧乏詩人とか、貧乏作家というような、そんなのばかり来るわけです。あのような連中というのは、友達をたくさん連れてきて、一晩中居座っておきながら、一銭も払っていないですね。一緒になって飲んでいるわけですから、全く商売になっていないわけです。

そんなある日、お店に吉村昭という作家が入ってきました。黒部第三ダムの『高熱隧道』という小説を書いた方です。その頃、私は吉村昭という人物をあまり知りませんでした。自分が知らない作家というのは、あまり大した作家ではないと思っておりましてから、適当にあしらっておりました。すると、一緒に来た新聞記者が、この方の奥さんは津村節子だというわけです。それで私は、津村先生の旦那様ですかと驚いたわけです。ちょうど、津村節子さんが『玩具』という作品で芥川賞を取ったばかりでしたから、私も知っていました。このよ

分かりました。長崎の浦上天主堂がありまして、その前に川が流れております。小さな河原でして、そこは爆心地ゼロです。ですから誰もいなかったのだと思います。ともあれ、私はこの子と同じ体験をしたわけです。再度、私の昔の記憶が蘇りまして、これが私の原点なのだと思います。

私も一人ぼっちになったわけですが、一人ぼっちになった時に、その収容所全体が日本へと帰れるということになりまして、みな喜んでいましたが、私は複雑な思いでした。その引き上げの2日前に、発疹チフスと栄養失調で起き上がるのもやっとであった母が突然現れました。立つのもやっとであった母の手を引いて富山の黒部平野まで帰って行くことができました。65年間、このように元気に生かさせて頂いております。有り難いことだなあとと思います。

さて、何はともあれ黒部に帰ってきたわけですが、村には祖父と祖母がおりました。ちょうど農地改革というものがありまして、田畑がすべてなくなって田んぼの真ん中に屋敷だけが残っておりました。父親もいませんでしたし、生産性がゼロでありますから、母はすぐに家を出ていってしまいました。すると私はまた一人ぼっちになって、祖父と祖母に育てられて大きくなりました。祖父は戦後の変化に対応できなくて、ぼーっとしているような状態でした、物を売って生活していました。祖母が家にあるものを片っ端から売り始めました。最後には仏壇まで売ってしまいまして、家中空っぽの状態でした。そのような時に東京の大学に入りました。早稲田大学の政治経済学部というところに入ったわけですが、一銭もお金がありませんでした。分家の叔父たちが相談して、屋敷を田んぼにして近所の人を買ってもらったりしながら、入学金の足しにしたりしておりました。そこまでして大学に入ったのはいいのですが、入ってしばらくしたら60年安保というのがございました。岸内閣打倒などといって、国会議事堂の周りを走り回り、単位も取らないで、そんなことばかりをしておりました。そして、安保の挫折感を味わいながら東京にいる時に、お袋から電報が届きました。

その頃、母親は富山の駅前で飲み屋のようなものをしておりました。

のです。そのジョー・オダネルさんはアメリカに帰ってから、ホワイトハウスの専属カメラマンになられまして、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン、ニクソンと、5人の大統領の専属カメラマンになられた大変有名な方です。その方が今から18年前に定年を迎えられまして、軍の規律に違反して撮っていたトランクいっぱいのネガを現像し、アメリカで展覧会を開こうとしたら、バッシングを受けて開催できませんでした。それで日本に来て写真展を開かれたわけです。それを偶然私が見に行ったということです。そうしましたら、広島、長崎の悲惨な写真がたくさんありました。このご紹介した写真は隅の方にありました。この写真の横にジョー・オダネルさんのコメントというものが掲示されていたわけです。それを読んでいるうちに涙がでて止まらなくなりました。このような内容です。

この少年は弟の死体を背負って火葬場にやってきた。やがて帯をほどき、おもむろに弟の亡骸を熱い灰の上に置いた。少年は兵隊のように直立し、顎を引き締め、決して下を見ようとはしなかった。ギュッと噛んだ下唇がすべての心情を物語っていた。火葬が始まると少年は静かに背を向け、その場を立ち去った。

それを読んでいるうちに涙が出て止まらず、嗚咽しながら泣いてしまいました。そのうちにどうしてそんなに泣いているのですかと聞かれました。実は、私は満州でこの少年と同じことをしてきたんです。それを思い出して泣いているんですとお伝えしたら、私を抱きしめてくださいまして、その胸の中で泣いておりました。

この写真に写っている背中にいる子は死体なんです。長崎に原爆が落ちたのは8月9日です。これは9月の写真ですから、1か月生きていたわけです。もしこの子にお父さんやお母さんがいたらおそらくその方が抱えてくるだろうと思います。私だって、もし母がいれば妹の亡骸は母が背負って火葬場へと向かったと思います。私は妹をやっとの思いで抱えながら火葬場まで運んで行ったことを思い出して泣いてしまいました。おそらくこの少年には、お父さんもお母さんもおばさんもおじさんもおられないのでしょうか。

私はこの少年が撮影された場所がどこか必死に探しました。そして

明日どうなるか分からないというと、一番今が不安になるわけです。明日を放置したままどうして今をケロッとして生きているのだろうか。だからマザー・テレサに、「こんなに美しい国なのに、こんなに暗い顔をして生きている国の人々を見たことがない」とまで言われてしまうわけです。「後世」を知らないということは、そのようなことだと思います。

## 私の生い立ちと一枚の写真

私が生まれましたのは、新潟県にほど近い富山県の黒部平野というところ。そこで生まれたのですが、5歳の時までは育っていません。5歳の時に父と母に連れられまして、中国東北地方の満州というところに行きました。そこで終戦を迎えたのが8歳の時でした。父は終戦直前にシベリア戦線に行ったきりになりまして、母と私と向こうで生まれた妹が3歳でおり、弟が1歳でおりました。そんな親子が逃げ惑っているうちに、日本人同士が集められまして、今でいう難民キャンプのようなところに入れられて、引き上げの時を待っておりました。そこへ入ってすぐ弟は死にました。あのような状況になると乳飲み子から先に死んでいきます。母親の乳が出なくなるからです。やがて発疹チフスが流行しました。母が発疹チフスにかかりまして、隔離されてしまいます。私と妹だけが取り残されるように収容所にいました。そんなある朝、目が覚めたら妹が死んでいました。その妹を抱きかかえて、建物の裏にあった火葬場のようなところにポンと置いてきました。

そのような体験がありますが、その後、戦後の時代を生きていくことに必死で妹のことなど全く忘れておりました。ところが今から16年前に、ある写真展を見に行きました。それを見たら、満州の収容所で妹の亡骸を棄ててきた場面が鮮明に蘇ってきました。

これは私が小学校1年に入った時の写真です。次のこの写真を見てもらいたいと思います。これはどのような写真かといいますと、昭和20年8月に長崎に原子爆弾が落とされた後に撮影された写真です。アメリカのジョー・オダネルという海兵隊従軍カメラマンが撮影したも

した。帰りに絹織物などを三反ほど褒美の品として頂きました。あまりにもうれしいので、奈良に住むお母さんにその反物を送りました。しばらくするとその反物が送り返されてきました。そこに添えられていた和歌が有名なお歌です。「後の世を渡す橋とぞ思ひしに 世渡る僧となるぞ 悲しき」という和歌で、まことの求道者となり給へということです。私が安心して死ねる為に後の世を渡す橋となってほしいと思ってあなたを比叡山へと上げたのに、あなたはこの娑婆を上手くわたっていく僧に成り下がったのか。お母さんは悲しい。本物の僧になってほしいという意味の和歌です。彼は我に返って横川に移り住んで、そこで著された書物が『往生要集』というものです。日本の浄土門に大きな影響を与えた書物でございます。

私は今何をお話ししているのかと申しますと、私も毎日亡くなった方のご遺体に接しながら、この死者たちはどこへ逝くのだろうかと、どうなるんだろうというようなことを真剣に考えながら、仕事をしていました。そして、死にゆく人や死者や、偶然出遇った親鸞聖人の『教行信証』などを読んでいるうちに、なんだそういうことだったのかということをつかんだ上で、歓喜踊躍して書いたのが『納棺夫日記』でございました。映画「おくりびと」では、その部分が全部カットされています。映画に見られるのは、近代のヒューマンイズム、ヨーロッパ思想で終わっているもので、宗教は全く映画の中に描かれていないわけです。蓮如上人は「後生の一大事」と言われましたが、映画には「後生」がないのです。例えば、「それ、八万の法蔵をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす」というお言葉が蓮如上人の『お文』にございます。私がなぜこの文章を引用したのかと申しますと、私が文学をやっていた時にお付き合いをしていた人たちというのは、私よりも10歳上の方々ばかりでした。吉村昭さんにしても江藤淳さんにしてもそうです。江藤淳さんなどは、あれだけ近代日本の知識人と言われた人が、死に直面した時、見苦しいほど狼狽えて、しかも「形骸を断ずる」という遺書まで残して死んでいきました。何だこれはと思いました。「後世」を知らないということは、こんなに狼狽えるものかと思いました。人間というのは、行き先が不明だと、今が不安になります。

う映画です。娘が亡くなったその瞬間も、誰も降りてこないその駅のプラットフォームの上で佇んでいました。大竹しのぶ演じる奥さんが旭川の病院で亡くなったその瞬間もプラットフォームの上で佇んでいました。いのちよりも仕事という感じの映画でした。そのような映画でも感動はします。しかし、オバマ大統領は逆でした。自分が大統領になれるかなれないかどうかわからない真っ最中に、自分の一人の祖母の危篤に行ったということです。すごいことであると感じます。そのような人物を大統領に選んだということは、アメリカの価値観が変化しているのではないかと思いました。その変化があつ『おくりびと』にバックアップするならば、アカデミー賞をとれるかもしれないなと思っていました。

そして、その1か月後の2月23日の1時でございました。『おくりびと』アカデミー賞受賞と流れました。やっぱりアカデミー賞をとったなと思えました。その5時間後ぐらいに「とれました」という電話がありました。私と本木雅弘くんとの間には、このような裏話があるわけです。

今でも私は「映画は映画、本は本」というように思っています。ある友人の奥様などは、著作権を放棄しなければ、たくさんのお金が入ってきたわよ、などと言います。しかし、お金の問題ではないのです。それは、私の人生やその現場で体験したことがあったからです。

## 後生の一大事

一つ例を挙げてお話をしてみたいと思います。昔、比叡山に源信という方がおられました。『源氏物語』の中で横川僧都という名前で登場される方です。紫式部も大変尊敬しておられ、法然上人も大変尊敬されておられました。親鸞聖人はもちろんの事、七高僧のお一人に加えておられる方です。その源信が15歳の時に、村上天皇の前で仏法を説く講師に選ばれております。現在の高校一年生である15歳で天皇の前において講義をする。おそらくは、やがて比叡山をしょって立つような秀才だと思います。その方がある日天皇の前で仏法を説いて大変に誉められま

繋がっているかもしれませんよ」と言ったわけです。ところがそれがまた悪かった。本木くんはすぐさま「それはどういう意味ですか」としつこく聞き返してくるわけです。それで私は続けて、「本木さん、あなたはインドへ行って来られたでしょ。インドというのは11億からの人間がいます。ですから年間750万から800万の人々が毎年亡くなります。そんなインドで10人か20人か知りませんが、行き倒れの人を抱えて、死を待つ家というところに運んで体を綺麗になさって、自分の腕の中で死を看取るということをなさったのは、マザー・テレサという方です。そのマザーの行為というのは、インド全体の行為から見たら針の穴を照らす一隅よりも小さい行為に過ぎないですよ。しかし、その小さな光というのは、ノーベル平和賞を受賞されたのですよ。そのような意味で言ったわけです」とお伝えしました。何はともあれ、私はオスカーをとるのではないかと思いました。

というのも、あの映画がハリウッドへと上がっていった時、審査が始まる前に、大統領が替わったわけです。あの映画はブッシュ大統領の時代でしたらとれていなかったと思います。アメリカの三流紙などに、今度のアカデミー賞はイスラエルの戦争映画がとるであろうと発表までしていました。その映画もなかなかいい映画でした。しかし、戦争映画です。審査の前にブッシュ大統領からオバマ大統領に替わりました。では、なぜオバマ大統領に替わったら『おくりびと』がアカデミー賞をとれるのかということです。私はオバマ大統領の政治的能力などは分かりません。しかし、オバマ大統領の一つの行為に私は非常に感動を覚えました。大統領選挙の真っ最中に、全米から6万人集まっていた選挙の大会をキャンセルして、ハワイに住む自分を育ててくれた祖母の危篤に足を運んだわけです。日本の政治家であつたら選挙中に身内のお通夜などに行く人は一人もいませんよ。それは政治家ばかりではありませんね。中村獅童だって父親の危篤状況の時には、舞台に立っていましたし、星野仙一だって、父親が亡くなった瞬間には日本シリーズをしていました。もっと極端なのは、北海道で撮影された『鉄道員』という映画がありました。何万人もいた炭鉱が閉鎖になって、一人か二人しか降りない駅の駅長を高倉健が演じているとい

ありますので、ぜひとも見に来て下さいと書いてありました。特別招待券が同封されていたので、私はそれを持って東京の有楽町まで見に行きました。見に行きまして、映画が終わって、一番最後のクレジットタイトルというところで、原作者も青木新門という名前も出てきませんでした。そして映画の題名が『おくりびと』という題に変わっておりました。私は、約束を守ってくれたなと思いました。

### アカデミー賞の受賞

私はA 1番という席に座っておりました。映画が終わったら、監督の滝田洋二郎さんや山崎勉さん、広末涼子さんだとかが壇上に出てまいりまして、マスコミが50社ぐらいフラッシュをたいていました。しばらく眺めておりましたが、さて帰ろうと思ひ席を立つと、本木雅弘くんが近づいてまいりました。そして、一言「いかがでしたか」と尋ねてきました。私は本木くん「いや～、いい映画になったね。脱帽します。俳優さんたちの演技力は素晴らしいものですね。そして青木新門を外して頂きありがとうございます。」と伝え、その会場を後にしました。

ところが、一昨年の23日だったでしょうか。突然、本木雅弘くんから電話がありまして、出た瞬間「ノミネートされました」と興奮しておりました。世界各国から100本ほど集められた映画の中から5、6本の映画が選ばれることをノミネートというそうですね。その時には私は瞬間的に、またリップサービスの何の根拠もなく本木くん「そこまでいったのならアカデミー賞をとれるでしょう」と伝えました。すると本木雅弘くんというのは、律義というか、くそ真面目というか、「それはどのような根拠で言っておられるのですか。なぜとれるとおっしゃられるのですか」と言って、なかなか電話を切ってくれないわけです。私はまいっちゃって、次のようなことを話しました。「本木さん、比叡山を開山された最澄という方は、一隅を照らす、これ国の宝なり、とおっしゃった。一隅を照らす光というものは、わりかし普遍性があるわけです。ですから蛆が光って見えたというのは、オスカーの光に



していただきたい。本は本のままにしておきたいと伝えました。

しばらくしましたら、私の家の玄関のベルが鳴りまして、私が表に出てみますと、プロデューサーなる人物がそこに立っておりました。本木雅弘くんが7年以上もかけてここまで進めてきたのに、今さらなぜ波風を立てるのですか、というようなことを言われました。私は何も波風を立てているわけではありません。私との想いの違いがあるから、どうしても直してくださいと言っているだけの事です。特に、最後の場面は絶対に直してもらわないと困ります。そうでなければ題を変えて頂いて、私の名前を外していただいて、映画は映画で勝手に制作したということにしてくださいと伝えました。しかし、なかなか噛み合いませんでした。

またしばらく経ちまして、今度は本木雅弘くん本人から電話がありまして、一度お会いしたいとのことでした。聞くと、もうすでに富山に入っているようで、致し方なく宿泊先のホテルまで会いに行きました。その日は雪がちらちらと降っておりました。ですからどこかに入ろうということで、私が知っていた小料理屋に向かいました。部屋に入ると本木雅弘くんはきちっと正座をしておりまして、まるでその様子が『坂の上の雲』の秋山真之のようでした。芸能界でこれだけ律義で礼儀正しい人間がいるのかと驚きました。そのような様子であった彼に私はお話しました。ここまで私を訪ねてこられたことは大変ありがたいと、感動しております。ですから映画のシナリオ通り映画をお作りになってください。ですけど、絶対条件として題名と名前だけは外して頂きたい。それだけ守って頂ければ、本のどこを引用されていても、後から文句は言いませんから、安心してそのシナリオのままお作りになったらどうですか、とお伝えしました。このようなことを話したら、彼はようやく目の前の料理に手を付けてくれました。

このような彼との裏話があるわけですが、それからまた1年ほど音沙汰がなくなります。私自身も映画の話などはすっかり忘れておりました。そんなある日です。手紙が一通きまして、裏を見たら本木雅弘と書いてありました。中を見えますと一行だけ書いてありました。内容は、完成披露試写会が東京有楽町の国際フォーラムという場所で

ざまな要素から生まれてくるはずだと思っていますから、カチンと頭にきました。しかし、映画だからそんなにむきになってもしょうがないのかなあとも思いました。読み進めているうちに、またカチンとくるわけです。私は10年間ほど納棺の仕事をしておりましてけれども、親族に成り替わりましてお手伝いのような気持ちでやっていました。サービスでやっていました。それが、お金がたくさん貰えるような感じで書かれているわけです。そのうち携帯電話が出てきてまたカチンときて、カチン、カチン、カチン、カチンしながら読み進めていったわけです。そして、最後の方で、石文というような形で終わっているわけです。私は、石文とは何だと思いましたね。これは向田邦子の『男どき女どき』というエッセイに出てくる文章にそっくりそのままじゃないかと思いました。それを取ってつけたように、現代の物語に持ってくるなんてと思いました。石文は、ネイティブアメリカンとかインカなどの言葉のない時代に、自分の思いを石の形に託して相手に伝えたというものです。石文の出ってくる時代ならともかく、現代の内容にくっつけたということですから、そこには必然性も何もないなと感じました。それから一番最後の場面が私にとってはどうしても許せませんでした。それは後から申し上げたいと思います。

## 『おくりびと』の原作者を辞退

とにかく私はカーッと血が上りまして、制作委員会に手紙を出して、この箇所とこの箇所を直してほしいと申しました。映画はお作りになってもいいと、しかしこの箇所は絶対にこのように直してほしいと、ここはこのようにしてはいかがでしょうかと、10カ条ほど書きまして、制作委員会に送りました。そうしたら、すぐに裁判所の判決文のような返事が来ました。制作委員会としましては、最終決定が出ましたので、どこも一切直せません、また直す予定もございませんと書いてありました。そこでまた私は、カーッと血が上りまして、制作委員会にまた手紙を出しました。それでは題名を変えて頂きたい。原作者青木新門もはずしていただきたいと書きました。作者の名前を外

した。なんとしても映画関係者に働きかけて、映画化を実現したいと思います。どうもありがとうございました。」このような手紙が来たわけです。

それから5、6年間、音沙汰がなくなりました。私もどうなりましたかとも聞きませんでしたし、彼からも何も言ってきませんでした。そうこうしているうちに、これは私が後から聞いた話ですが、7年ほど経ちました時に、長い間諦めないで映画化をしたいと懇願する本木雅弘くんの情熱に心を動かされた一人のプロデューサーが現われましたということです。そのプロデューサーは中沢敏明という方です。時代劇の『蝉しぐれ』などを手掛けた方で、若手の有名な方です。その方が動き出して、やがて制作委員会というものが立ち上がり、松竹、電通、TBS、小学館というそうそうたる企業がお金を出し始めたわけです。そして、小山薫堂という方が脚本を手がけスタートしました。

### 脚本への腹立ち

しばらく経ちまして、私のところにシナリオと申しますか、初版の脚本が届きました。仮題『納棺夫日記』、原作青木新門と明記されていました。ところが1ページを読んでちょっとがっかりしました。私の本の書き出しというのは、「今朝、立山に雪が来た」というものです。この書き出しというのは大事でして、川端康成の『雪国』に書き始めは、「トンネルを過ぎると、そこは雪国だった」とあり、大変有名です。書き出しでイメージがパーッと湧いてくるようなものがいいわけです。ところが私の場合は「今朝、立山に雪が来た」という冒頭で、富山平野の作品であるということが分かるようになっていきます。ところが脚本には、雪の中を自動車が走ってくる場面から始まるわけですが、かっこいいなと思いながらそれを読み始めた途端、山の名前が鳥海山となっているわけです。鳥海山というのは、出羽山々の一つで、その平野地は真言宗や禅宗などが栄えている地域です。私の地域は富山でして、お葬儀の8割が浄土真宗でして、そこで生まれたわけです。ものが生まれるというのは、大地だとか、光だとか、風とか、風土とか、さま

という思いに変わってきたといえます。そのようなことを雑誌『ダヴィンチ』の編集者と話し合っ、タイトルに映画を切望しますとまで書いてあるわけです。

## 映画『おくりびと』の成り立ち

私はびっくりしまして、手紙を本木くんに書きました。私は見えない世界を書いたつもりであって、それを映像化できるわけがないと思いましたから、『ダヴィンチ』を見ましたが、『納棺夫日記』を映画にするのは不可能ではないかと申し上げたわけです。また、以前伊丹十三監督の『お葬式』という映画がありましたが、そのような厳粛な場面をちかしたような感じで作るのならば、私は映画化などしてもらいたくはありませんとも書きました。しかし、本木さん、もしお作りになるのだったら、あなたがインドで感じた生と死が当たり前のようにつながっていると感じになったその視点で、蛆が光って見えたという生死一如の視座でお作りになるのであれば、なんとかなるのではないのでしょうかとも書き添えておきました。けれども、そのような視座をお持ちの方は滅多にいません。監督やら脚本家が現われると横道にそれていってしまいますから、あなた一人で作られたらどうですかと提案もしました。昔チャップリンの『ライムライト』という映画がありました。あれはチャップリンが監督、脚本、音楽、主演を全部一人で行った映画です。その素晴らしい映画を引き合いにして、あなたのライフワークとしてお作りになってはどうかと申し上げたわけです。その間は誰にも著作権をお渡ししませんから、ゆっくりと作り上げていってはどうかと。

しばらくして彼から返事がきました。彼は26歳、27歳でしたが、書道の5段か6段をお持ちでして、和紙に毛筆で書かれた手紙が届きました。手紙に書かれた字だけで感動いたしました。そこには、次のようなことが書かれていました。「ありがとうございます。しかし、私は一介の俳優です。監督や脚本などは到底できません。しかし、青木さんから映画化を許可して頂いたものと私は受け止めさせていただきます

で火葬されて、遺灰をガンジス河に流してほしいと思っておられる方がたくさんいます。

インドには現在の日本のように固定された火葬場というものがありません。農村などに行きますと、村はずれにあるいちばん近い川の河原で薪を積んで、その上にさらしてグルグル巻きにしたご遺体を載せて、また薪を載せて火をつけるわけです。荼毘という風習が4000年も、5000年も昔からあります。お釈迦さまも、ガンジーやネールも同じようにして焼かれております。何はともあれ、このベナレスというところは、聖地中の聖地であるがゆえに、全インドから熱心なヒンドゥー教の方々が来られます。来たらすぐに死ぬるわけではありませんから、巡礼者に食べ物など恵んでもらいながら死ぬ時期を待っているわけです。

そのようにたくさんの方がいるわけです。そうするとどうなるのかといいますと、365日、24時間、火葬が行われているわけです。煙がもうもうと漂っています。その下に死を待つ人がいたり、巡礼者がいたり、観光客がいたり、また物売りがいたり、牛がいたりするわけです。その間でヒンドゥー教の聖者がヨーガをしたりしているわけです。お金が少ししかない人などは、頭だけこんがり焼いて、川に流されるわけです。手や足などは生焼けのままになっていて、スコップなどで川へと流されるわけです。ですからガンジス河に足が浮いています。手が浮いています。そんな川の中で巡礼者が沐浴をしています。そのような場所です。ですから初めて行かれる方は、本木くんだけでなく大変カルチャーショックを受けたりなさると思います。

そのような場所で彼が大変なカルチャーショックを受けたということです。そのような中で、たまたま一緒に行っていたカメラマンというのが私の『納棺夫日記』を持っていました。彼は、インドのホテルの中や、帰りの飛行機の中で読んだりしながら帰ってきたそうです。そして、その中に蛆が光って見えたという文章に大変興味を持ったと。あのような気持ちの悪い蛆が光って見えるものだろうか、そんな世界があるのだろうか、そのようなことを真剣に考えているうちに、この本を何とか映画化できないだろうかと思うようになったそうです。そう思っているうちに、それが高じてきてなんとしても映画化したい

でうごめくように蛆が無数にいるわけです。そのようなご遺体でした。犯罪かも知れないということで、富山医科大学の解剖室まで運びまして、帰ってまいりましたら、部屋中が蛆だらけでございます。東京の方から親族の方がこちらに向かっているとのことでした。その方がお見えになる前に部屋ぐらい掃除をしておかなければいけないだろうと思って、私が蛆を掃き集めていた時の光景でございます。

### 本木雅弘くんの感性

そのような文章を本木雅弘くんが選んでいるわけです。若いのにいい感性をした、いい俳優だなあと感じました。このようなことを感じながらこの写真を見ておりました。

それだけのことだったのですが、しばらく経ちまして、本屋に行きましたら、一冊の本が目にとまりました。『ダヴィンチ』という雑誌です。私は初めて見る本でした。その表紙には、本木雅弘くんがソファに寝転がって黒い本を持っていました。その黒い本をじっと見てみますと、私の書いた『納棺夫日記』の初版なんですね。びっくりしました。買ったことのない雑誌を買って、家に持って帰りました。帰って中を覗きましたら、本木雅弘くんがインドへと行った話などが書かれており、本木雅弘特集のようなものでした。インドのベナレスへ行って、大変カルチャーショックを受けた。そこには生と死が当たり前のようにつながっている。というような書き出しで文章が載っておりました。

みなさんはインドベナレスというところへ行っただことがあるかも知れませんが、私は、三島由紀夫さんの『豊饒の海』だとか、遠藤周作さんの『深い河』などに書かれる最終場面のインドベナレスに触れ、関心を持ち、何回か足を運んだことがあります。とにかくあそこは、ヒンドゥー教がバラモン教と呼ばれていた時代から、4000年も5000年も前からヒンドゥー教の聖地中の聖地、インド一番の聖地です。聖地であるがゆえにインド各地から死に場所を求めて来られるおじいちゃんやおばあちゃんがたくさんおられます。どうせ死ぬのであれば、そこ

HEAVEN一」と書かれたちょっと変わった写真集でした。彼がインドベナレスのガンジス河に足を突っ込んだりして、いろんなポーズを収めた写真集でした。その中に樹木希林さんとか瀬戸内寂聴さんとか中沢新一さんなどが文章を添えているというものでした。その中に、彼が上半身を裸にしてガンジス河に足を突っ込んでいる写真があります。手のひらに沙羅双樹の葉っぱを乗せて、その上に蠟を乗せて火をつけてガンジス河に流す場面です。インドには送り火という風習がありまして、日本でいえば精霊流しのようなものですが、そのような真似をして、彼がガンジス河に火を流そうとしている。そのような場面がございました。そのページの左側に白い文字が見えますが、それが私の『納棺夫日記』の中から引用された文章でございました。そこに何が書いてあるのかと申しますと、

何も蛆の掃除までしなくていいのだけれど、ここで葬式を出すかもしれないと思って、私は蛆を掃き集めていた。蛆を掃き集めているうちに、一匹一匹の蛆が鮮明に見え始めた。ただ畳を必死で逃げている蛆もいる。柱をよじ登っている奴までいる。蛆もいのちなんだ。そう思うと、蛆たちが光って見えた。

という文章です。私は大変驚きました。と言いますのは、私の本にはいろいろなことが書いてあるのだけれども、よりによって蛆が光って見えたという文章を彼が選んでいるわけです。これは17年前の写真でして、彼は現在43歳ですから、26歳の時の写真ということになります。26歳の若い青年が、俳優が、それも少し前までアイドルとしてチャホヤされていた男が、蛆が光って見えたという文章を選んだということに私は大変驚きを覚えました。と言いますのは、仏教に「一切衆生悉有仏性」という言葉があります。生きとし生けるものは、みないのちであるという捉え方だと思います。そのような思いで私が書いた文章でございました。

ある日、警察からお棺を持ってきてくれと言われまして、お棺を届けましたら、部屋中が蛆だらけになっていました。真夏に一人暮らしの老人が亡くなって、誰も気づかなかったというご遺体でした。布団をめくってびっくり致しました。内臓が全部蛆に食べられて、その中

# いのちのバトンタッチ

— 映画「おくりびと」によせて —

青木新門

## はじめに

みなさんこんにちは。ただいまご紹介に預かりました青木新門でございます。私がひょんなことから葬儀社に勤めまして、ご遺体をお棺の中にお納めするという、いわゆる納棺の仕事をしていました頃の現場体験を『納棺夫日記』という本に著しましたのは、今から17年前の1993年3月のことでした。社長一人、社員一人という富山県の小さな出版社から500部印刷したのが始まりです。その頃は500部を刷ってもすぐに無くなって、それでも1000部ほど刷りましたでしょうか。そのような状態でした。

## ウジ 蛆たちが光って見える

その年の11月ぐらいのことでしたでしょうか、俳優の本木雅弘くんから電話がありました。その時、私の家には娘がおりまして、えらい興奮をして、「お父さん、モックンから電話、モックンから電話」というわけです。その時の私は、モックンとは誰だろうかというような具合でした。彼はインドに行ってきたと言っていました。インドのベナレスというところでたくさんの写真を撮ったんだと。その写真集なるものを出したいから、青木さんの『納棺夫日記』の中から文章を引用させて頂けないかと。そのような電話でございました。ただそれだけの事でしたので、どうぞ、どうぞ、自由にどこでも使ってくださいとお答えしたわけです。

そして翌年に一冊の本が送られてきました。「天空静座—HILL



# 岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要投稿内規

(目的)

第1条 この内規は、仏教文化研究所（以下「研究所」という）規程第4条第3号に基づいて、紀要への投稿に関する必要事項を定めることを目的とする。

(編集委員)

第2条 『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』の原稿の採否、その他編集等にかかる諸事項を決定するために編集委員会を置く。

2 編集委員は、研究所長及び研究所長が任命した若干名とする。

(投稿者)

第3条 投稿者は、次の各号の者とする。

- (1) 研究所研究員（客員研究員・嘱託研究員を含む）
- (2) 本学園の教育職員
- (3) 編集委員会から依頼を受けた者

(投稿原稿の内容)

第4条 投稿原稿は、研究所の研究テーマ及びそれに関連する諸分野における未発表の学術論文・書評・報告等とする。

(投稿原稿の書式・形式)

第5条 投稿原稿の書式・形式は、次の各号とする。

- (1) 原稿は日本語とすること。
- (2) 縦書・横書自由。註記は後註とし連番を付すこと。
- (3) 末尾にキーワードを5語程度付すこと。
- (4) 400字程度の日本語要旨を付すこと。
- (5) 氏名、所属を明記すること。
- (6) 原稿はワープロソフト「一太郎」、「ワード」のファイル、若しくはテキストファイルでのフロッピーディスクによる提出が望ましい。

(保存)

第6条 掲載論文は、デジタル化し保存する。

(掲載論文のネットワーク上での公開)

第7条 掲載論文の公開については、別紙「紀要掲載論文公開同意書」に公開の可否を記入し、提出する。

(著作権)

第8条 掲載論文の著作権は著作者が所有するものとする。

附 則

この内規は、平成15年4月1日から施行する。

BULLETIN  
OF  
INSTITUTE OF BUDDHIST  
CULTURAL STUDIES

GIFU SHOTOKUGAKUEN UNIVERSITY  
NO.11

---

---

【PREFACE】

Saiken Yuzuri

【ARTICLES】

About religious groupings at Kasagi temple

Kazufumi Shinkura … 1

Passing the baton in life : A review of the movie "Okuribito"

Shinmon Aoki…………… 23

A Research Study of Understanding and Teaching Method about  
the Foundation of Gifu-Shotoku-Gakuen University in Religion Class

Sachiyoshi Ninagawa  
Yoshikuni Kochi …… 59

The structure of cognition assumed by the Buddhist Epistemology  
: Bāhyārthavāda and Cittamātravādā.

Tetsu Yoshida…………… 149